

工-6D50

321

42

321

42

各府縣輸出重要品調查報告

附產業概況

(大阪、奈良、三重、滋賀、和歌山)

農商務省商工局

本編ハ、農工局員大阪府及奈良、三重、滋賀、和歌山ノ各縣下ニ出張
シテ輸出重要工業品ノ狀況及各産業ノ概況ニ關シ、縣及其他團體
當業者等ヨリ得タル資料ニ基キ調査報告セシ所ニ係リ、該地方
ニ於ケル一般ノ狀態ヲ知ルニ便ナルヲ認メ、茲ニ之ヲ印刷ニ付
シテ當業者ノ參考ニ資ス

明治四十一年八月

農商務省商工局



各府縣輸出重要品調查報告

目次

一、大阪府	一頁
一、奈良縣	百十七頁
一、三重縣	百九十七頁
一、滋賀縣	二百四十九頁
一、和歌山縣	三百四十九頁

各府縣輸出重要品調査報告

大阪府

概説

大阪府ハ帝國本土ノ中央ニ位シ攝津ノ内大阪市及西成、東成、三島、豊能ノ四郡ト河内、和泉ノ兩國ヲ管シ其面積凡百十八方里琵琶湖ニ發源スル淀川ハ隣接各國境ノ分水流ヲ聚集シテ府下北半全部ヲ貫流シ大阪市ニ來リ幾多ノ分流トナリ以テ交通運輸ノ便ヲ與ヘ大和、石津、大津、津田、岡田ノ諸川ハ南半部ヲ縱横貫通シテ灌溉ノ便ヲ與ヘツ、アリ山ハ府ノ東南隅ニ聳立スル海拔千二百三十七米ノ金剛山ヲ除クノ外ハ殆ンド其高サ千米ヲ出ヅルモノ無ク而シテ何レモ皆邊隅ニ繞スルカ故ニ府下ノ地勢ハ平坦ニシテ自然的ニ交通上多クノ障礙ヲ與ヘザル而已ナラズ殊ニ近年土木事業勃興セルガ爲メ道路橋梁等漸次完修ニ近ヅキ鐵道ノ増設亦著シク大阪市ヲ中心トシテ西ハ神戸ニ到ルアリ北ハ舞鶴及京都ニ至ルニ條ノ鐵路有リ東ハ關西線有リ高野線有リ南ニ向テハ南海鐵道ノ沿岸ヲ走ルアリテ加之大阪灣ハ自然ノ商港タルニ加ヘテ其築港亦完成ニ近カムトシ内外大小ノ船舶出入頻繁ニシテ眞ニ四通八達ノ要衝ニ立テリ去レバ府下産業ノ發達ハ農工商ニ偏シ其商工業ノ發展ハ殆ンド全國ニ冠絶セルニ關ハラス他ノ産業ハ農業ヲ除キ餘ハ皆微々トシテ言フニ足ラザルノ狀況ニ在リ是レ蓋シ特リ人爲ノミニアラズシテ自然ノ形勢之ヲシテ然ラジメタルナリ

今最近五年間ニ於ケル府ノ統計ヲ見ルニ左ノ如シ

種別	三十四年	三十五年	三十六年	三十七年	三十八年
鑛産	四一七九	四七六九	一〇七七	四三〇〇	二二一五
林産	六八四一七四	九七八八四七	八五二二四四	四八〇七二九	五三七一一四
水産	六九〇八九四	八九二七〇〇	八〇五一四八	七〇八九八九	五七六五八六
畜産	六〇一五八一	七四六三七六	七六七九九二	六九六八四〇	七八一五五六
農産	一七、七〇、二四一六	一七、五二、三九九九	二一、六六、五〇七四	二一、六六、五〇七四	二〇、四四、三八七五
工産	六一、二五、九二〇七	六八、三九、四六六三	七七八八九〇五三	七八、四二、七六五三	九〇、一九、二七六
計	八〇、九四、二四五二	八八、五七、七三五一	九七八三七八一三	一〇、九八、三五八五	一一、五三、二五二二

依是觀之府力ハ年々順調ニ發達増加シツ、アルモノ、如シ今左ニ各産業ニ就キ其ノ概況ヲ説述スヘシ

該府ノ鑛業ハ由來甚ダ振ハズ上記數字ニ現ハレタル産額ノ如キ豊能郡ニ於ケル銀及ビ銅、泉北郡ニ於ケル石炭ノ何レモ少許ノ採掘額ニ過キサルナリ

林業ノ如キモ古來之ガ經營ハ等閑ニ附セラレタル而已ナラズ都民ノ需用ニ應スルガ爲メ樹木類リニ伐採セラレ且田畑ニ開拓セラレ、モノ多ク逐年府下森林ハ荒廢ニ歸シ唯僅ニ僻隅不便ノ地ニテ之ガ伐採ノ勞功相償ハサル地方ニノミ其形狀ヲ存スルニ至レリ去レバ此等ノ故障ト近時一般人民智識發達シテ山林經濟ノ前途有望ナルヲ看取セル結果トハ將來今日以上ノ荒廢ヲ見ルコト無キノミナラズ當局者ノ施設ト相俟ツテ多少舊時ノ面目ヲ改ムルニ至ルヘキカ

抑モ大阪府下ノ森林地質ハ大體ニ於テハ決シテ不良ナルモノニアラズシテ之ヲ學者ノ説ニ聞クニ府下ノ土質ハ和泉國東部一圓及河内國ノ東南部ハ和泉砂岩ヲ以テ構成セラレ樹木ノ生育ニ對シ最モ不良ナル火成岩質花崗石質ノ地質ハ僅ニ北河内郡ノ東部及豊能三島兩郡ノ北部ニ點在スルニ過キズシテ其他ハ重ニ秩父古生層ト稱スル水生岩ノ最古ナル地質ニシテ所謂第四紀層若クハ第三紀層ニ屬スル良好ナル埴土ナリ去レハ此理ヨリ推ストキハ府下ニ於ケル山林ノ前途ハ之ガ經營ヲ誤

ラザル限リハ頗ル有望ナリト云バザル可ラザル也今府下ノ森林反別ヲ調査スルニ左ノ如シ

藩制時代

一九、三二五、五_反

明治三十四年末(臺帳)

二四、九五七、四

見積

三七、九〇〇、四

明治三十九年

二六、四八八、一

該府森林原野面積ヲ全國各府縣道廳ト比較スル時ハ最下位ニ在リ

又該府ハ十七里餘ノ海岸線及河流ノ大ナルモノヲ有スルニ拘ラズ水産物ノ産額ハ極メテ少ク輸出品トシテハ唯僅ニ干鰯類アルノミニシテ其他ハ漸ク府下人口ノ食膳ニ供スル河海ノ魚類ヲ捕獲スルニ過ギス産額十萬ヲ超過スルモノハ乾鰯ト海産ノミナリ

畜産ハ古來一部地方ニ於テ犢牛ヲ他府縣ヨリ購入シ養成シ生長ノ後之ヲ他ニ賣却スルモノアルノ外近年牛乳ノ需要増加セルガ爲メ牛ノ飼育漸ク盛ナルノ傾キアリ之ヲ統計ニ見ルニ牛乳搾取高及價格ハ左ノ如シ

明治三十四年

九、二一七、七〇

二一六、六五八_反

全 三十五年

一一、五六八、一五

二九七、八八六

全 三十六年

一三、五三四、一八

三一八、九八五

全 三十七年

一二、一六七、八一

二九二、一四三

全 三十八年

一三、七三四、七四

三三〇、七五二

屠牛頭數ハ東京及兵庫ノ二府縣ノ次位ニ在リ其數三十八年ニ於テ一萬七千一百一頭ニシテ是レ多クハ他地方ヨリ輸入スルモノナリ三十八年末ニ於ケル府下飼牛數ハ二萬七千八百七十二頭ナリ

馬ハ當府ハ其適産地ニアラズ之ガ供給ハ總テ他地方ニ仰ギツ、アリシガ殊ニ近年交通機關發達ノ結果ト馬耕ノ棄クレタルト小大ニ其需要ヲ減スルニ至レリ

養豚業ハ近時需要ノ増加ニ伴ヒ漸次發達シ養豚數左ノ如ク増加スルニ至レリ

二十八年	一八六
三十三年	五一六
三十八年	八一六
三十五年	四〇
三十八年	八二

之ニ反シ山羊ノ飼育ハ微々トシテ振ハズ今其數及搾乳高ヲ見ルニ左ノ如シ

三十五年	一五
三十八年	四八、五七一

家禽ハ他ノ畜産ニ比シ稍々見ル可キモノアリ其主ナルモノハ鶏、鶩、鶉、七面鳥等ニシテ之ガ飼養數ヲ查スルニ次ノ

三十四年末現在	三十九年六月末現在
鶏	二九二、四二〇
鶩	七五、三三六
鶉	一九七
七面鳥	五五

農業ハ古來大ニ發達シタリト雖モ維新以來商工業ノ進歩著大ナリシニ比スレハ聊カ遅々ノ觀ナキ能ハズ然レドモ之ヲ全

國各府縣ニ比スレハ尙多ク遜色ヲ見ス而シテ農産中其産額一千萬圓ヲ超過スルモノハ米ノミニシテ其他ハ麥ノ産額百萬圓以上ナルノ外甘藷、豆類、蔬菜類、菜種、實棉、密柑等ヲ除キ他ハ總テ年額十萬圓ニ滿タザルナリ

由來大阪府ハ神戸ト共ニ奈良、和歌山、三重、愛知、滋賀、京都等各府縣ノ産品ヲ處分ス可キ貨物集散ノ一中心地ナルガ故ニ數百年來商業ノ殷盛我國第一ト稱セシモ工業ニ至ツテハ我國狀ノ然ラシメタル所トハ云ヘ其規模頗ル小ナリシガ時運ノ變遷ハ遂ニ此舊態ヲ維持スルコトヲ許サズ維新前ノ機械ノ運用皆無ナリシニ反シテ近ク四十年來西洋新文明ノ輸入ト共ニ大阪府工業ハ一大變遷ヲ經テ著シキ發達進歩ヲナシ個人又ハ會社ノ事業トシテ工場ノ新設、機械ノ運轉年ト共ニ増加シ煙突林立煤烟濛々市部ヨリ漸次郡部ニ擴張シ眞ニ工業ノ中心地タラシメ管ニ日用必需品ノ輸入ヲ防遏スルニ止ラズ進テ海外ニ輸出シテ外國市場ニ文明各國ノ工業品ト輸麻ヲ爭フモノ尠カラザルノ好況ヲ見ルニ至レリ三十八年ノ統計表ノ示ス所ニ從ヒ産額十萬圓以上ノ工業品ヲ查スルニ左ノ如シ

重要工業品種類及産額

綿糸	一四、二五七、一七三	一五、九六一、八三七
織物	—	二四〇、四七七
織物通	—	六七三、八九〇
タオル	一、〇二〇、一七九	二、三七二、八七三
莫大小	—	三、二一七、六三七
清酒(年度)	一一〇、九五三	一、二七二、四六〇
麥酒	三九、八〇七	五四四、八九三
醬油	三六、五六〇	—

大阪府

精製糖	五六、一七六、七九八斤	八、六〇三、九三八
寒天	一二五、六三九斤	四七四、五三八
油及油粕		一、八四一、三六一
皮革		五、一六五、〇四九
革製品		二、九六四、六〇三
漆器		一五五、九九八
燐寸	一二七、九七七、一八七斤	二、七九八、四七八
石鹼		一、〇三四、七三四
刷子	三、四二一、一六三	一、二二九、二四五
鈕釦		一、〇八七、九八七
工業用藥品		一、五四六、六一〇
人造肥料	二〇、三五六、三八三斤	三、三七〇、〇三三
玻璃製品		一、一〇九、九九四
錫詰	八九七、一八八斤	一八四、七二一
麥粉(機械)	七、八四二、八一八斤	四三三、二八一
西洋紙		一、〇〇六、〇二三
木蠟	六一三、一五〇	一四二、六二八
セメント	一一九、四三二	三五八、二九二

コークス	五三、五七〇	七八〇、五八一
フェルト帽子	一六、四三〇斤	三三一、六七〇
アルミニウム製品		二六一、三四五
香油香水		二二六、四二一
扇子	六、二九六、四二二斤	二二〇、三七五
絹製品		三三〇、八六七
洋傘	一〇三、九一一斤	八一五、四九一
製綿		三、七二六、七六二
ブリキ細工		一八二、〇一八
蠟燭		五五六、五八二
醫藥		一、一〇八、一六五
袋物		一二〇、三〇九
薫物線香		二三〇、五四一
精煉金屬		一六、一九八、六六一
利器		二三五、一〇九
木櫛	一〇、二二三、二二三斤	一二八、六三九
凍豆腐	四五、六一六斤	二二五、四六六
カタン糸	六四、〇二〇斤	三七七、七四〇

菓子
煉瓦
時計

一、九六三、〇四七
一、〇四六、七四二
六五、五一八

此中主要輸出品ハ別ニ各品調査ヲナシタリト雖モ爾餘ノ各品ニ關シテハ一言之ヲ記述スルノ要アルヘシ木蠟ハ府下ニテハ從來唯他地方産ノモノヲ精晒スルニ過キヌシテ其産額十萬圓ヲ超過スルニ至リタルハ三十七年以來ノコトニ屬セリ本品ハ三十五年價格暴落ノ爲メ蠟樹ヲ伐採スル者多カリシ等ノ爲メ近時産額減少シ爲メニ再ビ需給ノ不懸衡ヨリシテ價格騰貴シ「パラピン」及支那蠟ノ輸入著シク増加シ爲メ内地ノ需要ハ漸次減退シツ、アリ輸出向ノ主ナル地ハマニラニシテ歐米及印度地方亦相應ノ需要地タリ西洋紙類ハ産額近年著シク増加シ既ニ百萬圓ヲ超過セリ本品ハ社會ノ進運ト共ニ其需要年一年ニ増加スルコト明カニシテ殊ニ支那ニ於テ印刷事業ノ發展ト從來ノ同國製品ノ粗惡ナルトハ漸次我製品ヲ使用スルモノ多キヲ加フルニ至レリ又近時著シク其聲價ヲ高メタルモノハ「アルミニウム」製品ニシテ三十八年度製品産額ハ二十六萬餘圓ニシテ同年清國政府ガ軍用飯盒トシテ注文シタル同製品ハ約九萬圓ニ上レリト云フ「アンチモニー」製品モ亦大ニ好況ヲ呈シ來リ其玩具類ノ如キハ戰後殊ニ歐米人ノ嗜好ニ適シ輸出額三十萬圓ニ垂ンタリ想フニ之カ前途ハ頗ル多望ナルヘシ唯一般製作上化學的應用ニ缺如セルハ一考ヲ要スヘシ家具及木製品ハ韓國ニ最モ多ク輸出セラレ殆ンド總テ移住邦人ノ需要スル所ナリ時計ハ府下ノ産額ヲ精密ニ調査スルトキハ十萬圓以上ニ達セルコト疑ヒナシ近時一般外人ノ信用ヲ博シ支那市場ノ如キハ獨逸品ト比シ遜色ナキノミナラズ價格ノ低廉ト實用ニ適セルトハ漸次需要ヲ増加シツ、アリ尙邦人移住者ノ使用スル家具ト等シク布哇、韓國、支那等ニ向テ輸出セラル、履物モ近時我國民ノ發展ト共ニ其額ヲ増加シ來レリ想フニ本品ノ輸出額ハ以テ邦人發展ノ割合ヲト知スルノ資料タルヘキカ

之ヲ要スルニ大阪府ノ工業ハ其發達進步ノ狀顯著ナルモノアリト雖モ尙ホ改善施設ヲ要スヘキモノ少カラス殊ニ輸出品

ノ製造工業ニ於テ然リトナス去レバ左ノ二十六品ニ就キ順次述フル所アラントス

- (一) 紡績綿糸
- (二) 織物
- (イ) 白木綿
- (ロ) 綿子ル
- (ハ) 金巾
- (三) 清酒
- (四) 人造肥料
- (五) 燐寸
- (六) 莫大小
- (七) 刷子
- (八) 玻璃製品
- (九) 精銅
- (十) 漆器
- (十一) 洋傘
- (十二) 麥酒
- (十三) 鈕釦
- (十四) 石鹼

大阪府

- (五) タヲル
- (六) 寒天
- (七) 利器
- (八) 段通
- (九) 帽子
- (十) 扇子及團扇

重要輸出品調

(一) 紡績綿絲

(二) 沿革

文久三年島津義光英國ヨリ技師機械等ヲ輸入シ地ヲ泉州堺ニトシテ綿絲紡績工場ヲ起サントセシカ恰モ維新ノ改革ニ際シ其意ヲ果サス明治三年ニ至リ市メテ堺紡績所ヲ創立セリ是即チ後ニ川崎紡績所トナリ再ヒ又泉州紡績會社ト變シタルモノニシテ府下ニ於ケル斯業ノ嚆矢トス然レトモ我國需要ハ到底輸入品ヲ要求セサル能ハズシテ年々歲々輸入増加ノ狀勢ヲ示シタリシカバ時ノ大藏大輔松方正義貿易ノ平均ヲ保ツノ策トシテ官立模範工場ヲ三河、安藝兩國ニ興シ明治十二年起業基金ヲ以テ機械(二千鎊)十臺ヲ購入シテ府下及他ノ八縣ニ抛下ゲ民業獎勵ニ勉メタリ是ニ於テ澁谷紡績所並ニ桑原紡績所ノ設立ヲ見ルニ至リ政府モ亦技師ヲ派シテ此等ノ保護發達ニ努メタリ其後明治十五年三重其他ニ四五ノ工場起リタレトモ何レモ有力ナル投資者ナク其規模皆小ナリキ然レトモ機運ハ漸次回轉シテ金融緩緩金利低落ニ際シ政府ハ不換紙幣ヲ引上ゲ兌換制度ヲ立テムトシテ整理公債ニヨリ市場ノ遊資ヲ吸收シ一面資本金ハ五朱ノ

利ニ安ンセズシテ各種ノ事業ニ放資スルニ至リシカバ事業一時ニ勃興シ府下ノ如キモ數會社前後シテ起リ十六年大阪ニ於テ全國紡績同業聯合會規定ノ約款ヲ實行シ表裝量目輸入品ニ異ナラザルニ至レリ而モ輸入ハ依然トシテ増加シ爲メニ廿一二年頃綿絲ノ大暴落ヲ來タシ之ニ反シ原棉ハ騰貴シ我斯業界ニ一大憂患ヲ與ヘタリ是レ即チ我國紡績所ノ濫興ト原棉ハ總テ輸入ニ仰ギシニ需用者華奢ヲ好ミ太絲擯斥セララル、ニ至リ殊ニ上海紡廠ガ續々製産ヲ増加シタルガ爲メ原棉輸入ヲ減シタル等ノ原由ニ外ナラサルナリ然レトモ二十三年以來清國輸出ハ漸ク増加シ同二十六年ヨリハ郵船會社ト特約シテ印度ヨリ原棉ノ輸入ヲ仰ギ十手以上ノ細物ヲ紡出シ初メテ印度綿絲ノ驅逐スルニ至リタリ續テ原棉ヲ米國ニ求ムルニ至リ二十手以上ノ物ヲ紡出シテ益々輸入品ト拮抗シ進ンデハ支那市場ニ於テ印度綿絲ト輸贏ヲ争ヒ殊ニ二十七年清國銀貨下落ノ機ニ乘ジ金貨國タル英國品ト競争シテ遂ニ支那市場ニ於ケル最優者ノ地位ヲ占ムルニ至リ政府モ亦斯業保護ノ必要ヲ認メテ輸出稅ヲ免除シ且二十九年棉花輸入稅ヲ免除セリ是時ニ當リ印度ニ於テハ「ベスト」流シシ幾多ノ工場ハ閉鎖ノ止ム無キニ至リシ爲メ支那市場ノ需要俄ニ増加セルニ我市場ハ日清戰爭ノ影響ニヨリ製産過剩ニ苦シム時ナリシカバ此等ノ事情ハ海外輸出ニ向テ多大ノ發展ヲナサシメタリ其後三十一年我國金貨本位ノ採用セラル、ニ及ビ銀貨相場ノ變動アリ此機ニ乘ジ外人ハ支那資本家ト相結ンデ工場ヲ設立シテ大ニ我製品ヲ驅逐セントセリ去レバ我資本家モ亦彼地ニ之ガ經營ヲ爲シタリト雖モ種々ナル事情ハ不幸之ヲ失敗ニ終ラシメ遂ニ一般ノ信用ヲ失墜スルニ至リ續イテ北清事變ノ起ルアリ茲ニ清國輸出ハ殆ンド絶滅セントスルノ悲境ニ沈淪セリ是ニ於テ當業者ハ經濟上ヨリ打算シ英國及印度等ニ於ケル大資本ヲ有シ技術巧妙商器機敏ナル勁敵ニ抗爭セムト欲スレバ資本ヲ増大シテ根基ヲ固ウセザル可ラサルヲ看取シ若々小會社合併合同ノ交渉ヲ開始シテ府下ノ如キ朝日、天滿、廣島ノ三會社合併シテ大阪合同紡績會社ト改稱シ平野紡績ハ攝津紡績ト相合シテ營業スルニ至レリ爾來若々トシテ好景氣ヲ示シツ、アリシガ三十六年海外原棉ノ價格騰貴シ且露國ト開戰ノ急ヲ告グルガ爲メニ商人見越ノ手控ヘトナリシガ三十七年開戰

ノ布告出ツルニ及ビ内ハ國民ノ勤儉論唱ヘラレテ之ガ需要減退シ外ハ保險料ノ昂騰ニヨリテ景況甚ダ不利ナリシモ幸ニシテ開戦以來皇軍連戦捷海上權ノ確保セラルト共ニ支那市場ニ於テハ綿絲缺乏シ内ハ軍隊ノ需要激増シテ非常ノ好況ヲ呈シ驚ク可キ大發展ヲナスニ至レリ今連年ノ産額ヲ擧ゲテ參考ニ供スヘシ

年	數	重	價	額
廿九年	八、七七四、八九五		一六、九〇〇、四四七	
三十一年	一〇、五〇一、六四二			
三十三年	一一、九六八、七八六			
三十五年	一二、二九二、二九九			
三十七年	一〇、六五六、九〇一			
三十八年	一一、一七八、八一四		二二、八〇四、七八〇	
三十九年	一三、〇五九、四一一			
四十年	一三、三五三、七五五			
四十一年	一二、九四二、四一八			
四十二年	一四、二五七、一七三			

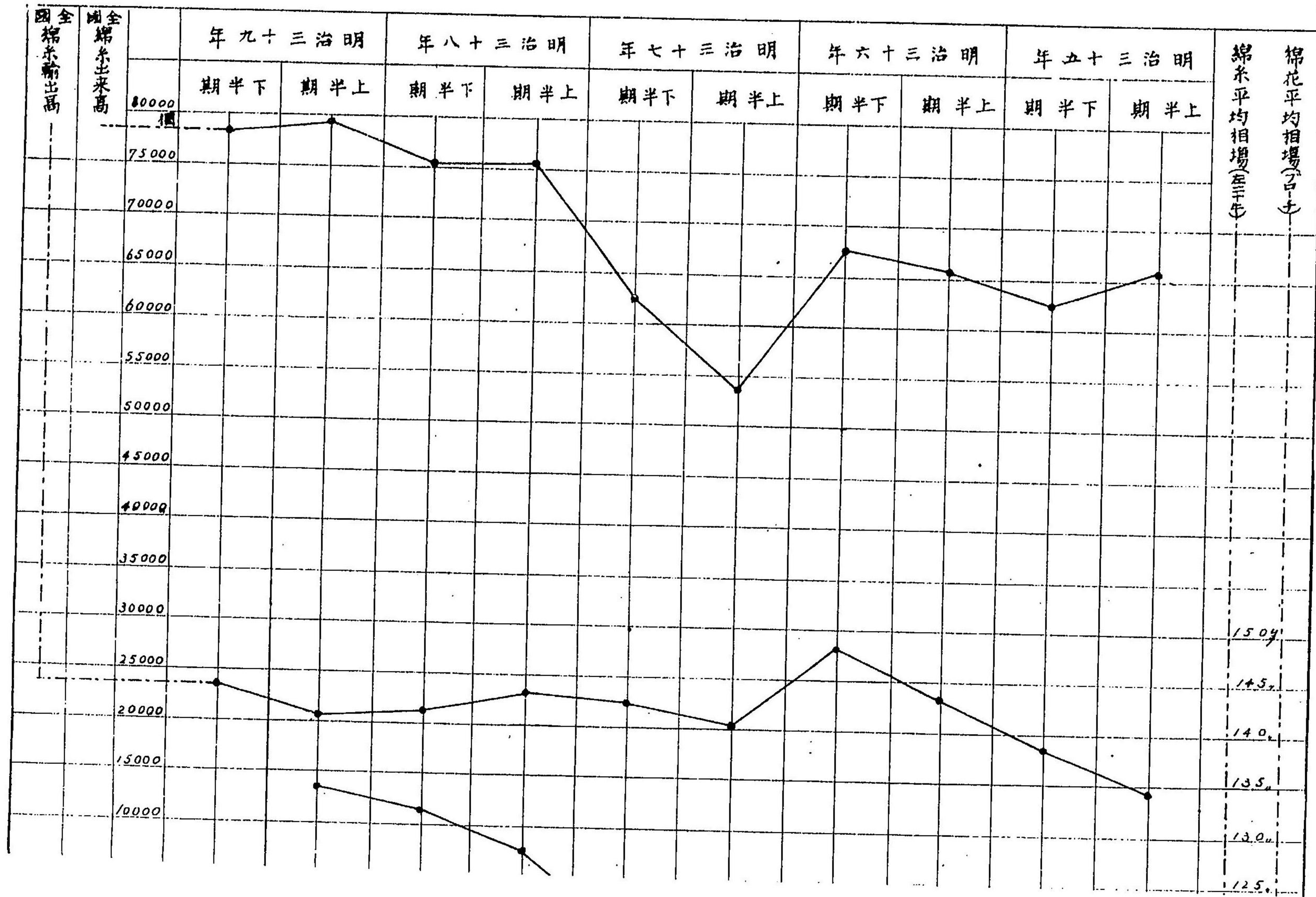
- (一) 主要産地
 - 大 阪 市
 - 泉 北 郡
 - 東 成 郡
 - 北 河 内 郡
 - 西 成 郡
 - 泉 南 郡
- (二) 製造戸數及職工數(三十八年)
 - 職 工 男四千二百四人 女一萬五千九百九十四人
 - 運 轉 鑄 數 四十八萬一千二百二十七本

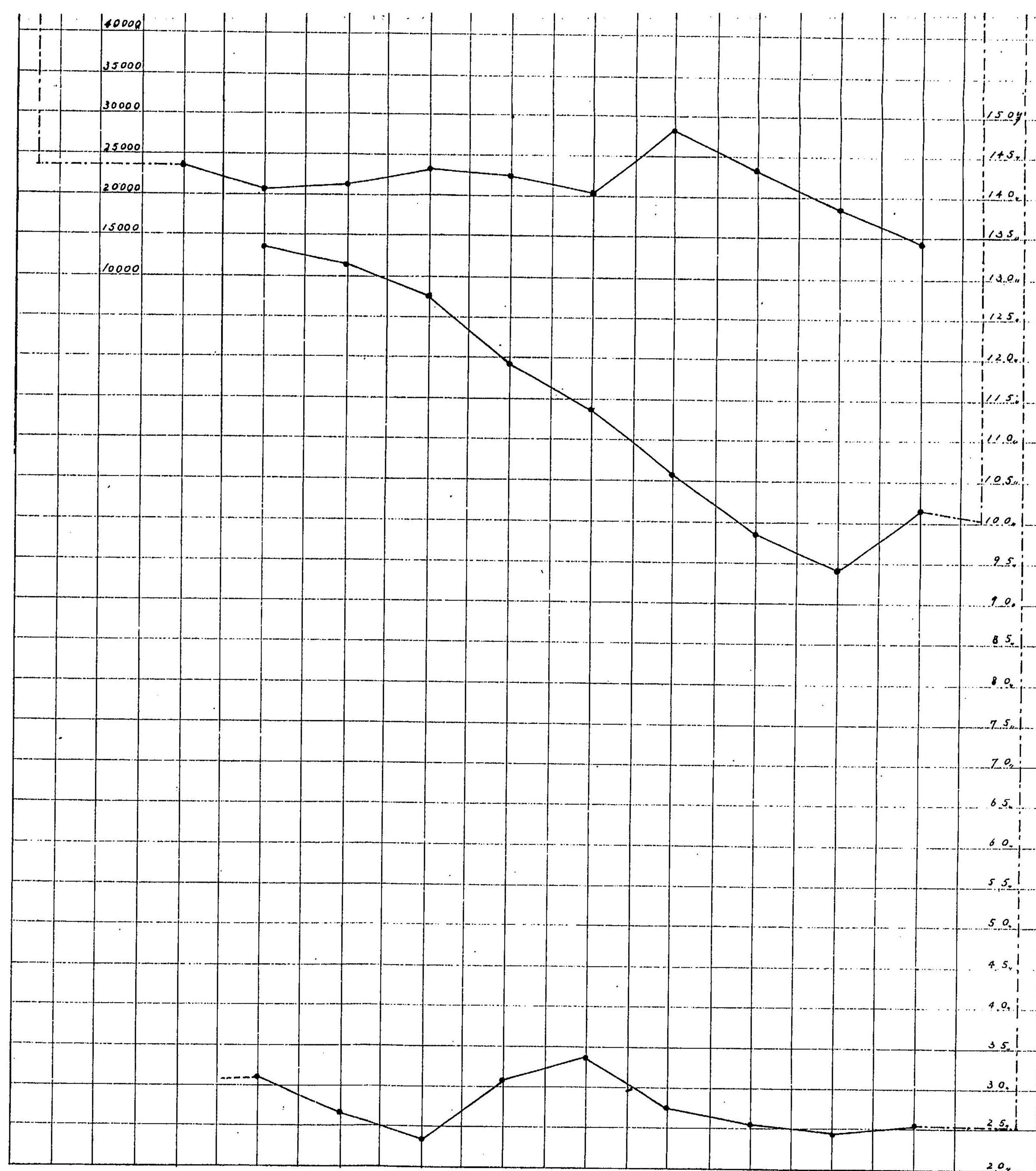
(四) 製 産 狀 况

明治卅七年ノ上半期ニ於テハ一月ニ於テ米國ニ於ケル買占メニヨリ米棉ハ一圓五十錢方ノ騰貴ヲ爲シ印度棉、埃及棉モ亦之ニ伴フテ高價トナリ二月ニ於テハ日露國交愈々斷絶トナリ内地機業家ハ茲ニ全ク前途ノ憂念ニ驅ラレテ之ガ織出シニ警戒ヲ加ヘ從テ取引先ニ於ケル商人ノ見越注文ヲ手控ヘ而モ原棉ノ價格ハ大ニ騰貴シ四月ニ於テハ其最高ニ達シ前年末ニ比シ十四圓方ノ高値トナリシト雖モ綿絲ノ價格ハ之ニ伴ハサルカ故ニ各紡績會社ハ操業短縮ノ方針ニ出ツルノ止ム無キニ至レリ加フルニ海上運輸ノ不便ト危險トハ運賃保險料等ノ騰貴トナリテ輸出ニ多大ノ影響ヲ及ボシ製産額半減ノ悲況ヲ現出セントセシガ幸ニシテ戰局發展皇軍連捷ノ結果ハ國民ノ心裡ニ多大ノ刺撃ヲ與ヘ人氣漸々恢復シ殊ニ綿布ハ軍隊ノ需用増加ト支那市場綿絲缺乏トニ由リ機業界ニ俄然繁忙ヲ告ゲシムルト同時ニ米國ニ於ケル買占者破産ノ結果棉花ノ價格低落スルアリ爲メニ綿絲界ノ活氣ヲ回復シテ市場ハ展々買占メノ行ハル、ニ至リ相場ハ其最高ノ九月ニ於テハ十番手百三十圓蓋ニ上リ空前ノ現象ヲ見ルニ至レリ而モ未ダ製出ヲ充實スルコト能ハザリシガ茲ニ米國棉花ノ豐收ハ益々原棉ノ低落ニ助勢シテ三十二圓ニ下リ綿糸モ亦下落ノ傾向ヲ帶ブルニ至レリ漸ク此間ニ乘ジテ輸出ノ歩ヲ進メントセシモ依然トシテ内地需要ノ急ヲ告グルモノアリシガ爲メ三十七年ニ於ケル綿絲界ハ後半期ニ於テ大活況ヲナスニ至レリ然レトモ上半期ニ於ケル手控ノ爲メ産額ニ於テハ之ヲ三十六年ニ比シ大ニ減退セルハ亦止ムヘカラサル所也同時ニ如上ノ理由ニ基キ輸出モ亦減額ヲ示スニ至レリ今參考ノ爲メ兩年度間ニ於ケル大阪府下各紡績會社ノ管絲出來高ヲ示サントス

	三十六年	三十七年
大阪紡績株式會社	一、七九一、七五四	一、七三三、四九七
金巾製織株式會社	五六二、二二七	七〇七、二五一
日本紡績株式會社	四三五、九五九	四〇九、〇一四
福島紡績株式會社	六〇八、三二一	一、二一一、六八九
攝津紡績株式會社	二、四二二、五〇〇	一、八九五、五二二
全 野田分工場	四四五、三二四	四二八、〇二二
全 平野分工場	一、二六五、一〇〇	一、〇八五、九六〇
天滿織物株式會社	一四三、九六〇	一九一、三一〇
大阪合同紡績會社天滿工場	一、二三七、三四八	七九二、八四〇
全 今宮工場	三三〇、一九〇	二二三、二五〇
全 住吉工場	四七二、〇八八	四二五、四六四
小津細絲紡績所	一一〇、八八八	三三三、五〇〇
內外綿絲株式會社	一三八、五八四	一六〇、二三一
安田商事合名會社	三〇七、〇五九	三九七、二四一
鐘淵紡績株式會社中島支店	六六二、四四二	六六七、九三〇
全 住道支店	四三三、九五一	三三、六三八
堺紡績株式會社	六四八、四五二	六四六、八五九

綿糸生產輸出及相場表





岸和田紡績株式會社	六六二、八一二	六四三、四一六
堺紡績株式會社堺分工場	六二二、九〇七	五五六、八〇四
計	一三、三五三、七五五	一二、九四二、四一八

斯カル盛況ヲ以テ卅八年ヲ迎ヘタル綿絲界ハ内地ニ於ケル需要依然トシテ減退セザルニ加ヘテ一月ニ於テ棉花ハ二十三圓ニ暴落シ綿絲モ亦下落ノ傾向ヲ帶ビタリト雖モ百十圓臺ヲ維持シタリシカバ製産高漸次増加シ五月ニ至ツテ空前ノ多額ニ上レリ然ルニ棉花ハ又漸次騰貴シテ遂ニ年末三十圓臺ニ上リシガ綿絲從テ高値ヲ示シ此亦百三十圓ヲ下ラズ平和克復ニテ内地織物業ノ如キハ一般不景氣ヲ示シタルニ關ラズ全國製産額ハ實ニ九十萬五千五百三十六圓ニ及ヒ眞ニ空前ノ巨額ニ上レリ今府下ニ於ケル各紡績會社ノ製産額ヲ見ルニ鐘淵紡績會社支店ヲ除キテ實ニ三十二萬一千五百二十七圓半ナリトス而シテ三十九年ニ於ケル紡績界ノ大勢ヲ見ルニ輸出ハ下半年ニ著シク發展セリト雖モ全年ヲ通觀スレバ依然トシテ振ハズ之ヲ三十八年ニ比シテ寧ろ三十五圓ノ減退ニシテ又三十六年ノ三十萬七千二百〇一圓ニ比スル時ハ甚シキ不活潑ト云ハザル可ラズ然ルニ棉花ハ又一月三十圓ニ上ツテ以來引續キ騰貴シタリト雖モ綿絲ノ價格之ト共ニ引上リ四月ノ如キハ百四十圓臺ニ上レルガ如キ景況ナリシカバ以來漸次市價下落セリト雖モ製産ノ如キハ九十四萬五千六百六十四圓ノ多額ニ上レリ而シテラ本年度上半期ニ於テハ綿絲界小恐慌ノ時機ニシテ下半年ニ於テハ綿絲停滯問題ハ斯界ニ於テ容易ナラザル現象トシテ一般ノ注目スル所トナリ各紡績會社モ其製産ニ向テ多少ノ手加減ヲ加フルノ止ム無キニ至レリ今過去數年間ニ於ケル此等ノ潮勢ヲ一瞥センガ爲メ表圖ヲ示サンニ

三十七年下半年以來今日ニ至ルマデ紡績界ノ景況ハ眞ニ空前ノ大活動ヲナセルモノト云ハザル可ラズ是固ヨリ三十七年以來日露戰爭ニ際シテ我軍用品ノ著シキ需要ハ之ガ盛況ノ一原因ナルニ相違ナシト雖モ三十七年上半年ニ於テ米國買占者ノ破産ト棉花ノ豐收トニ基ク原棉價格ノ著シキ下落ハ又實ニ一大原由ヲナセルコトヲ看過スル能ハザル也然レトモ職ヲ製

產品ノ需要ノ如何ナル方面ニアルカヲ研究スルコトハ又實ニ此ガ前途ヲトスルニ必要ナルコトナラズンハアラズ試ミニニ
十六年以降ノ統計ヲ見ルニ

	綿絲出來高	輸出高	内地需要高
三十六年	八〇一、七三七	三〇七、二〇一	五〇三、五三六
三十七年	六九五、二一二	二五七、三〇七	四三七、九〇五
三十八年	九〇五、五三六	二六七、三八三	六三八、一五三
三十九年	九四五、一六四	二六七、三四八	六七七、八一六

即チ見ル製産年々膨脹セルニ關ハラズ之ガ需要ハ海外ニ發展スルモノニアラズシテ内地ニ於テ吸收サル、也然ラバ果シ
テ内地ノ織物業ハ如何ナル趨勢ヲ有スルヤヲ知ラザル可ラズ之ガ詳細ニ至ツテハ別ニ織物ノ部ニ於テ論ズル所アルベシ

(五) 原料ノ需給

原料タル棉花ノ種類ハ米國産、印度産、支那産、埃及産等ニシテ米國ハ「テキサス」、「アラバマ」、「アブラント」ノ三
種、印度ハ「ブローチ」及「スラット」種、「コムタ」及「ダルワル」種、「ヒンガンゲット」種、「ヘラー」種、「ツ
エスタン」及「マドラス」種等ニシテ支那ハ北京種、通州棉花、南京棉花等トス
之ガ供給ハ海外ニ仰ゲトモ各種機關ヲ完備セルガ故敢テ難事ニアラズ其購入ハ内外棉花商人ノ手ヲ經ルモノトス

(六) 製産收支

堺紡績會社ノ三十七年ニ於ケル收支ヲ見ルニ左ノ如シ

原料費	一、二六五、三六六、八七五
前期繰越	七二、三四三、三六四

利子	一七、三〇六、七九五
機械損金	一六、〇〇〇、〇〇〇
賞與金	五、〇〇〇、〇〇〇
給料及賃金	七五、五〇三、七七〇
火災保險料	三、〇六五、九九六
石炭費	一九、四四三、三五〇
其他雜費	五七、三二六、八四五
計	一、五三一、三五六、九九五
製絲賣捌金	一、四九〇、八三八、二四二
落綿賣捌金	三〇、四九七、四六五
收入利子	四、六五四、二九六
雜收入	一六、七九六、二五五
後期繰越金	三六、三三〇、七三二
計	一、五七九、一一六、九九〇
差引益金	四七、七五九、九九五

又内外綿株式會社ニ就テ取調タル所ニヨレバ左ノ如シ

原棉費(四十玉一捆)	一〇一、五〇〇
事務費	七、四三〇

工場費	一四、五〇〇
計	一二三、四三〇
製絲賣上高	一二七、五〇〇
雜收入	一、五〇〇
計	一二九、〇〇〇
差引利益	五、五三〇

(七) 相場

表ニ示ス

(八) 販出手續等

之ガ賣買手續ハ大概先物賣買ニシテ現物賣買ハ稀ナリ俵數價格受渡期月并場所ヲ約定シテ現金取引ス直輸出ヲナスモノハ支店特約店ニ於テ之ヲ爲ス大抵三井物産會社日本棉花會社又ハ神戸商館ヲ手ヲ經ルモノトス

(九) 荷作法

輸出向ハ商標ヲ貼附シタル洋紙ニ包ミ麻繩ニテ括リ更ニ蕙包ハ製絲二十玉(一玉目方一貫二百目)ヲ一梱トシ「ドンゴロス」包ハ四十玉ヲ一梱トシ長方形ニ造リ横ニ蕙繩二條ヲ二ヶ所ニ纏ヒ暨ニ十文字ニ蕙繩ヲ纏フモノトス「ドンゴロス」包ハ同形ニ作り四方ニ割竹ヲ宛テ鐵帶六條ニテ締ムルモノトス而シテ二十玉入ハ内地向ニシテ外面ニ番手并ニ商標ヲ印刷シテ發荷ス

之ガ荷作費三十錢(半梱)トス

(十) 商況

前年來ノ好況ヲ繼承シテ輸出ノ盛況ト内地織物ノ好況ト相俟テ賣行盛ニシテ品拂底ノ状態ニ至リシガ最高左二十手百四十五圓、左三十手二百圓、最低左二十手百十四圓、左三十手百四十圓ナリキ斯亂高下ノ中ニモ概シテ最高ヲ持續シタリ而ルニ五六月ヨリ定期市場買占ノ爲メ前途ノ品潤澤ヲ氣拂ヘ多少ノ下押アリシモ眼先需要期ニ入ルト棉花ノ騰貴ニヨリ底意緩和ヲ以テ七八月ニ入ルヤ霖雨アリテ農事ノ手後レ及收穫悲觀等ハ戰捷ニモ關ラズ消沈シテ二十手高直ノモノ十圓方下落シテ百二十八圓トナリ三十手モ亦同ジク百五十五圓トナリタレトモ九月ニ入り天候回復ノ爲メ好況ニ向ヒ講和條約ノ一船國民ニ不滿ノ念ヲ抱カシメタルニ拘ラス日英同盟、外資輸入及銀塊騰貴(十一月銀塊相場二十九片四分三トナレリ)シテ上海爲替相場好況トナリタル等ニテ綿絲ノ輸出商談アリ殊ニ米國農務局ヨリ米棉收穫不況ノ報告アリテ原棉三十七圓ニ上リ又軍隊凱旋等ハ來春ノ好望ヲ豫期セシメ且中絲以上ノ細物ハ夏物織出シノ好況ナルニヨリ大ニ買進ミ左二十手高直百三十八圓安直百二十八圓ニ對シ左三十手高直百八十八圓安直百五十五圓ヲ往來スルニ至レリ

(二) 織物

(一) 沿革

府下ニ於ケル織物業ノ起源ヲ尋ヌルニ遠ク垂仁天皇ノ御宇ニ在ルモノ、如シ其後仁德天皇難波ニ都シ給ヒテヨリ攝、河、泉三州ハ全國ニ於ケル斯業ノ中心トナリ雄略天皇ノ朝ニ百濟ノ織工ヲ今ノ南河内郡錦部及東成郡住吉ニ置キ織業ニ從事セシメ給ヒタリ

平安遷都以來織業モ又皇城ト共ニ移リ加フルニ支那輸入品ノ増加ニ伴ヒ阪地ニ於ケル機業ハ一時衰頹ヲ見ルニ至レリ後小松天皇ノ時大内義治城ヲ堺ニ築クニ及ヒ同地機業ノ興起ヲ促シタリト雖モ兵亂ノ爲メ殆ント廢絶スルニ至レリ

豊大閣海内統一ノ功ヲ奏スルニ及ビ堺ノ機業ハ漸ク回復シ唐土ヨリ織工ノ來ルモノ尠カラズ當時羽二重ノ産出多カリシガ京都ノ斯業ニ壓倒セラレ遂ニ廢絶スルニ至リタレトモ絹織物ニ代ルニ木綿織物ノ勃興ヲ見ルニ至リ天正年中南蠻人ノ紡績法ヲ傳フルヤ河内ニ於テ漸次之ガ發達ヲ見ルニ至リ寛文年間木綿ノ丈尺ヲ定メ二丈六尺ヲ一反トシ元禄中之ヲ改正シテ幅九寸以上、丈五丈二尺八寸ヲ一疋トナシ寶曆年間ニ於テハ堺市ニ於ケル織屋二百軒ニ垂ントシ問屋株亦四十ニ達シ農家ノ一大副業トナリ文化文政ノ頃ニハ木綿市場ヲ設置スルニ至レリ然ルニ安政年間外船來航スルアリ人心爲メニ穩ナラズ木綿ノ價格大ニ下落シ將ニ斯業ノ廢絶ヲ見ントシタルモ遂ニ明治維新トナリテ原絲ノ購入賣買ノ自由ヲ得ルニ至リ農家手紡ノ綿絲ハ漸次減少スルニ至リ明治三年堺戎島ノ紡績所起ルヤ手紡ト紡績絲トノ混織ヲ出シ半唐木綿ト稱シタリ

其後明治十二三年ノ頃ニ至リ一時綿布ノ騰貴ノ爲メ斯業盛況ヲ極メタリシカ是ヨリ漸ク粗製濫造ノ弊ニ陥リ信用地ニ墜テントスルニ至リシカバ同十四年和泉國ノ同業者相集リテ尺巾等ニ改良ヲ加ヘ巾九寸二分以上、長五丈六尺九寸五分ヲ以テ一疋トシ翌年河内國同業者ハ巾九寸以上、長五丈四尺ヲ一疋ト改メ又其翌年尺巾検査所ヲ設ケシガ之ガ勵行困難ナルニ加ヘテ價格ノ暴落ニ會ヒ倒産者ヲ出スニ至レリ然レトモ這ハ却テ一大革新ノ動機トナリ明治十八年ニハ府令ニ基キ準則組合ヲ設ケ一般ニ「バタン」式機具ヲ採用スルニ至リ同二十年ニハ二十番手紡績ヲ使用シテ手紡殆ンド其跡ヲ絶テ二十五年ニハ韓國輸出ヲ見ルニ至レリ其後明治三十三年重要物産同業組合法發布セラレテヨリ更ニ組合ヲ組織シ着々其效果ヲ收メツ、アルモノト又將ニ之ガ組織ノ計畫中ナルモノトアリテ今ヤ白木綿ハ府下重要物産タルニ至リ日露戰爭中ノ如キハ或種産業トハ趣ヲ異ニシ軍需品多額ニ上リシ爲メ却テ盛大ノ域ニ進ミタルコト日清戰爭當時ト異ナルヲト無シ

「フランネル」ハ明治二十四年大阪毛絲紡績會社失敗ノ後ヲ受ケ大阪毛絲會社ヲ設立シ營業ヲ開始シタルヲ以テ嚆矢トナス然レトモ當時設備ノ不完全ト技術ノ未熟トハ舶來品ニ對シテ頗ル劣ル所アリシカバ二十六年増資シテ事業ノ擴張ヲ計レリ其後卅七八年ノ戰役ニ際シ多額ノ軍需品買上ラレシカバ茲ニ同社ノ事業盛大ヲ致スノ端緒ヲ開ケリ斯クテ同社ハ鹽分ヲ含有セザル善良ノ水ヲ使用セザレハ製品ノ好良ナル能ハザルヲ知リ西成郡長柄ニ移轉シテ新タニ製織機械ヲ購入シ三十年手機ヲ廢シテ銳意製織ニ從事シ遂ニ舶來品ニ對シテ遜色無キノ精品ヲ出スニ至レリ

金巾ハ専ラ機械力ニ依ルモノニシテ明治二十一年金巾製織會社ノ創業ヲ以テ當府下ニ於ケル斯業ノ嚆矢トナス次デ翌年天滿織物會社起リ其翌年大阪紡績會社ハ分工場ニ於テ之ガ製織ニ從事セリ今ヤ此等ノ製品ハ清韓兩國ニ盛ニ輸出セラル、ニ至レリ

毛織物ノ製織ハ明治十六年伊藤九兵衛氏ガ古屋ノ綿毛布製織業ニ倣ヒ毛布製織所ヲ設立セシヲ以テ嚆矢トナス當時手機ヲ用ヒ原料ヲ附近ノ羊毛ニ仰ギシガ漸次事業ノ發展ニ伴ヒ原料供給ニ不足ヲ感ジタルヲ以テ天津羊毛ノ供給ヲ仰ギシモ打綿機ヲ有セザルカ爲メ毛絲ヲ紡績スル能ハズ下等品ノ製作ニ從事シタリ其後明治二十六年株式組織トナシ海外ヨリ諸種ノ機械ヲ購入シ大阪毛布製造株式會社ノ創立ヲ見ルニ至レリ斯カル混沌ノ時代ニ於テ府下二三ノ同業者ヲ出シタリト雖モ三十三年頃多ク廢業シ僅ニ泉州大津ニ一ヶ所殘リタルノミ而シテ前記毛布會社ハ三十年更ニ増資ヲ行ヒ製産ニ勉メタリト雖モ時勢ノ變遷ハ「マント」ノ流行トナリ毛布ノ需要日ニ減退シ加フルニ經濟界ノ變亂ハ三十四年同社ヲシテ解散ノ不幸ニ接セシメタリ

毛絲紡績會社ハ明治二十八年發起セラレ粗紡機十二臺、精紡機十二臺、錘七千二百、織機二百臺ヲ以テ三十二年初メテ營業ヲ開始シタリシガ翌年漂白場竣成シテ生晒地ヲ製出スルニ至リ此ヨリ同社ノ事業ハ漸ク盛大ノ機運ニ向ヒ更ニ織機百臺ヲ増加シ翌年精紡機四臺、錘千二百及糊付機械ヲ増置スルニ至レリ

先是岡島千代藏氏ハ原絲ヲ佛國ニ仰ギ毛絲綸ノ製産ニ着手セシモ空シク不成功ニ終リシカバ三年間糊附機ノ發明ニ

苦心シテ遂ニ良案ヲ得ザルニ偶々巴里ニ於ケル同機ノ新案出デタリト聞キ直ニ原絲ト共ニ之ガ輸入ヲナシ二十九年手機十二臺ヲ据付ケ爾來幾多ノ辛酸ヲ嘗メ専心經營ノ結果三十一年ニ於テハ七十臺ノ機械ヲ有スルニ至レリ又同氏毛斯綸友禪染ヲ發明シタル等斯業ノ爲メ盡シタル功勞少カラスト云フ

(二) 産 額

年 次	絹織物	絹綿交織物	綿織物	毛織物	麻織物	雜織物	合 計
三十四年	五、八五六	四、四六八	六、七九八	一、七四六	四、七六八	八、四八〇	八、六四四
三十五年	九、二九〇	二、九六八	七、七一一	二、〇七二	三、七三二	一、〇〇三	一〇、〇五五
三十六年	六、七四四	六、二二二	八、〇九一	二、三二四	二、七二八	一、〇四七	一〇、五五〇
三十七年	四、〇六六	三、八〇〇	九、二七九	一、八九七	四、〇五二	四、五三三	一、六四九
三十八年	二、五五二	六、三三九	二、三〇三	三、三三三	一、〇三六	四、八八〇	一、五九六

備 考 綿織物ハ白木綿並ニ金巾類、毛織物ハ「モスリン」ヲ大宗トス

(三) 製造戸數及職工數

機 業 戸 數	職 工		機 場	家 内 工 業
	男	女		
力織機	五、〇三三		一一七	一、二四八
手織機	五、〇一六	八九五	八九五	二、一七〇
		四、八九八	四、八九八	二、三二〇

○綿 布

一、綿布産額

重ナル綿布ノ産額ハ左ノ如シ

年 次	白 木 綿	綿 ネ ル	雲 齋	機械織廣巾(天竺、金巾等)
三十六年	三、三九二、一一二	六七七、三四七	九〇、一二六	二、三七九、五三二
三十七年	三、三三九、九一九	四三九、九一九	?	九五九、九九四
三十八年	八、四九九、三八一	五五六、九五〇	二、〇二三、五八四	二、七一四、七七〇

右各種綿布ノ三十八年中ニ於ケル商況ヲ記スレハ左ノ如シ

(イ) 白 木 綿

白木綿ハ三十八年一月以來軍需品増加シ傷病者ノ被服、蒲團、綳帶等ノ注文多額ナリシニ拘ラヌ一般ノ市況ハ不振ニシテ殊ニ清韓地方ノ需要ヲ喚起スル能ハサリシガ爲メ概シテ上半期ハ不況ナリキ殊ニ綿糸騰貴ノ爲メ製産ヲ減少シ綿糸ノ暴騰ハ又木綿ノ市價ヲ高メタリ此ヨリ需要減少シ隨テ價格モ下落スルニ至レリ十月頃ニ至リテハ米收穫季ニ際シ殊ニ綿糸ノ高價ナリシヨリ産出高少カリシモ凱旋兵士ノ需要ニヨリ一時好況ヲ呈セリ而モ是僅ニ一時ノ現象ニ過キスシテ概シテ不振ノ状態ニ在リ唯僅ニ清韓地方ニ輸出ヲ見テ三十九年ニ入レリ

輸出先ノ嗜好等

韓國向木綿ノ主ナルモノハ東海岸ハ經十六手、緯十四手、幅九寸五分、長五丈六尺、量目一反四百多ニシテ西海岸ハ經十二手、緯十手、幅一尺、長五丈四尺乃至六丈、量目一反四百五十多及經二十手、緯十六手、幅九寸五分、長五

三十七年	最高	四,五〇〇	四,五〇〇	四,四〇〇	四,五〇〇	四,五〇〇	四,六〇〇	四,六〇〇	六,一五〇	六,一五〇	五,七〇〇	五,五〇〇
	最低	四,一〇〇	四,一〇〇	四,三〇〇	四,三〇〇	四,四〇〇	四,五〇〇	四,七〇〇	五,〇〇〇	五,〇〇〇	五,四〇〇	五,一〇〇

同年ハ清國向輸出盛ナリシモ軍用品多ク下半年ニ入ルヤ清韓輸出期トナリ好況ヲ呈セントセシモ北清農作ノ不況ト韓國財界ノ小恐慌ト農作不況等ニヨリ和金巾供給超過シテ競争賣ノ狀トナリ二割乃至三割五分方下落シテ前途暗黒トナレリ

(三) 清 酒

(一) 産 額	敷 量	價 額
三十三年度	一三五、一八八	三、五七四、三七一
三十四年度	一三〇、〇三六	三、六六一、八一四
三十五年度	一一六、一〇四	三、五二二、五九五
三十六年度	一一五、六九四	三、七五四、二七〇
三十七年度	一一〇、九五三	三、二一七、六三七

備考 酒造年度ハ其年十月ヨリ翌年九月ニ至ル一期間ナリ

(二) 種 類

扇正宗	菊正宗	孔雀正宗	瓢正宗	桐正宗	百合正宗	鯛正宗	春駒正宗	袋正宗
馬正宗	金 露	白 鶴	甲長正宗	勇 鯛	春 駒	旭 山	澤 龜	若 翠
金 山	松の井	秀 鶴	王 翠	的正宗	二羽鶴	白菊盛	都 菊	松 盛
菊 泉	文 蝶	壽	幾久一	龜 壽	文明一	菊 壽	菊千穂	東洋一

- 御代春 金 福 千 歳 澤の鶴 松の壽 花 友 島 臺 大 海 松 壽
- 金 水 國民一 龍 梅ヶ枝

- (三) 主要産地 堺 市 大阪市 泉南部 豊能郡 三島郡 南河内郡等
- (四) 製造戸數

(五) 製造状況 明治三十七年四月一日現在酒造場數ハ二百三十二ヶ所ニシテ男使用人約千三百五十人女同五十人ナリ

一般ヨリ云フトキハ大阪清酒ハ餘リ良好ナラズシテ需要減退ノ傾キアリ爲メニ近年大阪市製造家ハ大ニ減少セリ然レトモ日露戰爭當時ニ於テハ出征軍ノ需要多カリシガ爲メ非常ノ盛況ヲ呈シタリシカ平和克復後ハ軍隊ノ殘留品拂下多額ナリシガ爲メ却テ戰爭中ヨリモ醸造高ヲ減少セリ尙從來布哇ニ輸出スルコト多カリシガ價格騰貴運送不便ノ爲メ減退スルニ至レリ併シ乍ラ清韓地方ハ居留邦人ノ數大ニ増加シ今ヤ輸出品中重要ノ地位ヲ占ムルニ至レリ當業者畫策宜シキヲ得バ益々販路擴張スベシ

元來清酒ハ大體ニ於テ需要者ノ範圍ガ氣候風土ノ關係上一定セリト云フヲ得可キ種類ノモノナルガ故ニ濫リニ他ノ販路ニ立入ルモ容易ニ好果ヲ收メ難シ故ニ府下醸造酒ノ販路モ古來自ラ一定ノ姿ニアレトモ國民ノ生活方法及經濟狀態ニヨリテ多少ノ影響ヲ蒙ルコト云フ迄モナシ大體ニ於テ季節ハ冬期需要多ク醸造モ亦十月ヨリ翌年三月ノ近間ニアリ使用人ノ如キモ多ク地方民ヲ雇入レ日給又ハ月給ニシテ毎年殆ンド同一人ヲ使雇ス而シテ堺市ニ於ケル醸造家モ其醸造場ハ灘ニ置キ唯賣捌ヲ堺市ニ於テナスモノ尠カラス故ニ統計上ノ醸造高ト其地トハ多少實際ニ於テハ相違セリ

(六) 原料ノ需要供給 大阪府

原料ハ内地米ニシテ各醸造者ハ附近ノ地方ニ之ガ供給ヲ仰ギツ、アリ外國米ハ未ダ使用セザルモノ、如シ而シテ此ガ原料供給ハ年々ノ豊凶作ニヨリ異ナルガ故ニ一概ニ云フ能ハズト雖モ仲買人ノ手ヲ經テ十月十一月ニ購入シ精白シテ使用ス府外ニ供給ヲ仰グハ大和、攝津、淡路、播磨ノ産米ナリ

(七) 製産費及收益ノ比較

原料タル米穀ハ相場ノ變動甚シク運送費ノ如キハ地方ニ依リ異ナリ賃錢其他ノ雜費皆然ルガ故ニ之ガ收支ハ固ヨリ精細ニ知ル能ハズト雖モ今三十七年度ニ於ケル概算ヲ示サンニ造酒一石ニ付キ

原料	一一、〇〇〇	(八斗五升七合代金)
賃	一、三〇〇	
薪炭及雜費	一、八〇〇	
税金	一五、〇〇〇	
計	二九、一〇〇	
酒粕及粉米賣價	一、〇〇〇	
清酒賣價	三三、〇〇〇	
計	三四、〇〇〇	
差引純益	四、九〇〇	

(八) 販出額及仕向地

府下醸造高ノ内其幾分カ管内ニ於テ需要セラレ幾分カ管外ニ輸出セラル、ヤ統計ノ據ルハキモノナキヲ以テ之ヲ知ルコトヲ得ス但堺市ハ全國有數ノ清酒集散地ニシテ同地ノ一ケ年醸造高ハ六萬石内外ニ過キサレトモ其管外販出額ハ

三十八年ノ如キハ約九萬五千石ニ達セリ同地ノ營業者ハ地酒屋ト下シ屋トノ二種アリ所謂下シ屋ハ兵庫其他地方ヨリ輸入シ更ニ之ヲ各地ニ輸出スルナリ參考ノ爲メ今堺市ニ於ケル最近五ケ年間清酒ノ輸出入高ヲ示セハ左ノ如シ

年次	輸 出		輸 入	
	數 量	金 額	數 量	金 額
三十四年	八四、六一八	二、四六五、一〇〇	一五、三八一	?
三十五年	八二、二一九	二、四九八、七九一	二〇、四〇〇	?
三十六年	八一、三三九	二、五六六、二八二	二一、二六五	?
三十七年	九六、二一九	三、二二三、一七九	三五、二四七	?
三十八年	一一七、六〇九	四、二八二、五一一	五五、三九六	?

備考 本表輸出額中ニハ地賣並ニ府下各地ニ對スル販出額ヲモ包含ス而シテ三十八年中ニ於ケル地賣高ハ一六、四七九石府下各地販出高ハ六、三六二石ナリ

仕向地ハ全國ニ涉レトモ就中北海道、長崎、福岡、廣島、山口、徳島等ニ販出スルモノ最モ多ク海外ニ在リテハ清韓兩國ヲ主トシ浦潮、布哇、米國等ニモ多少輸出セラル

(九) 販賣手續及取引習慣

醸造業者ニシテ清韓各地ニ出張所ヲ有スルモノアリ又特約販賣店ニ依テ賣出スモノアリ而シテ其特約店トノ取引ハ概ネ現金取引又ハ荷爲替附ナリ尤或種ノ特約店ハ擔保物ヲ差入レ延取引ヲ爲ス者モアリ又内地向販出ハ或ハ小賣商ニ販賣スルアリ或ハ仲買人及他ノ大醸造家ニ販賣スルアリ別ニ繁雜ノ手續ナシ但豊能郡ノ慣習トシテ仲買人ハ醸造場ニ於テ買取(延)リ樽詰運搬等凡テ醸造者ハ之ヲ負擔セザルヲ例トス今參考ノ爲メ韓國ニ於ケル輸入販賣法ヲ稍精密ニ述ベンニ委託販賣、直接取引、支店販賣ノ三種ニ分ツヲ得可シ大體ニ於テ内地ト異ルナシ

第一、委託販賣ニ於テハ全部賣却ノ上手敷料、税金等其他ノ諸費ヲ計算シテ荷主ニ支拂フモノト、又月末賣價計算ヲナシ送金スルモノト、荷物着後一定ノ期間ヲ經過セバ（大抵二三ヶ月）委託品ノ賣却セラルト否トヲ問ハズ豫テ相互取極メタル代價ニテ全部ノ代金ヲ送金スルモノトノ三種アリ而シテ其手敷料一定セズト雖モ大低賣價ノ六七分トス

第二、直接取引トハ貿易商人又ハ酒類販賣者ガ内地酒造家ト直接取引ヲナシ現品到着後代金ヲ支拂フモノ也支店販賣ハ醸造家自ラ販賣スルモノニシテ内地ト異ナラズ

(十) 荷作法及其費用

輸出向モ内地向モ荷作法畧同一ニシテ樽詰瓶詰ノ二種アリ樽詰ニハ四斗四升、三斗九升、三斗七升、二斗二升、二斗ノ各種アリ樽材ハ杉板ト竹輪ニシテ樽底ノ合目ニ洋脂ヲ流注シ鏡口ヲ密閉封印シ外部ニ藁ヲ巻キ其上ヲ商標ヲ記入シタル瓶ヲ以テ梱包ス唯外國行ハ樽ノ上下ニ板ヲ當テ荷作ヲ注意スルノミ容積ハ三斗七升入以上ハ七才位ニシテ二圓内外ヲ要シ二斗二升入、二斗入ハ三才位ニシテ其費用約壹圓貳拾錢ヲ要ス

瓶詰ハ四合硝子入瓶ハ四打ヲ一箱トシ二合硝子瓶入ハ八打ヲ一箱トス容積共ニ三才位ニシテ其費用ハ約貳圓八拾錢トス

(十一) 相場（三十九年中平均）

	内地向一石	輸出向一石
上	三〇、一三〇	四〇、八〇〇
下	三一、〇〇〇	四一、一八三

(十二) 輸出先ニ於ケル嗜好

内地ニ於ケル需要者ハ各其地方ニヨリ嗜好ヲ異ニシ府下清酒ノ販路ハ稍一定セルコトハ既ニ述ベタル所ノ如シ海外ニ於テ韓國ニ最モ多ク需要セラル、ハ堺産ノ所謂辛口ニシテ金露ヲ第一トシ澤龜、桐正宗之ニ次ギ近來仲買者ノ不正手段アリシガ爲メ櫻正宗、白鹿、二羽鶴、菊正宗、福娘等漸次勢力ヲ占メ他府縣清酒モ亦其販路ヲ擴張セントスルハ勢アリ一般ニ上等品ヲ好ムノ傾向ヲ生ゼリ灘産ノ所謂甘口ハ正宗、白鶴等ナリ而シテ韓半島ニ於ケル我移住者カ廣島山口、福岡、長崎人等多キヲ知ラハ自ラ亦以上地方ニ於ケル嗜好ヲ識ルニ足ルヘシ又清國ニ於ケル輸出先ハ營口ヲ第一トシ芝罘、大連等之ニ次ク其種類ハ扇正宗、菊正宗、孔雀正宗、金露、白鶴等ナリ又布哇ニ輸出セラル、ハ主ニ鯛正宗、百合正宗、勇鯛等トス

(十三) 主ナル製造者及取扱商

大塚 和 三 郎	安宅 合名 會社	鳥 井 合名 會社	肥 塚 源 二 郎
大塚 三 郎 兵 衛	柴 谷 合名 會社	千 歲 清 酒 株 式 會 社	綿 谷 利 平
辰 馬 六 郎	平 野 利 平	太 田 利 三 郎	大 澤 徳 平
種 野 榮 三 郎	西 田 興 兵 衛	辻 田 楠 三 郎	

以上ハ主ナル酒造家ニシテ又取扱店ノ主ナルモノハ左ノ如シ

大塚 和 三 郎 營口出張所	同	大 連 出 張 所	安 宅 合 名 會 社 大 連 出 張 所
同 東 營 口 出 張 所	營 口	大 國 公 司	北 京 林 良 茂
天 津 石 田 商 會	上 海	上 橋 文 藏	同 守 田 芳 太 郎
營 口 難 波 商 會	營 口	金 舛 洋 行	同 祐 和 盛 商 店
芝 罘 華 信 洋 行	同	白 石 洋 行	

安東縣 三浦香次郎 二宮五男 長好萬次郎 福田酒造場
 韓國釜山 田中竹次郎 柴田重兵衛 河野省三郎 横山喜太郎 中原佐介
 元山 渡邊半藏 中野常太郎 田中良介
 仁川 增本茂三郎 忠岡治三郎 前田熊市 酒井政平
 京城 福島謙一 森本森藏 寺本安太郎 齋藤久太郎
 鎮南浦 伊藤彌吉 齋藤進 河野支店
 新井新藏
 平壤 齋藤久太郎
 馬山浦 比田勝兵衛
 木浦 松前松之介
 群山 岡田末吉
 米國桑港 綾部米藏 オクスナード徳山商會
 布哇ホノル、菊水商會 濱野商店

四) 人造肥料

(一) 産額

年次	動物性		礦物性	
	數量	金額	數量	金額
明治三十七年	九二、七八二	一三、〇一三	一八、一五五	五八八
同三十八年	二八四、七六二	五六、九三六	二〇、〇七一	六二一
			三、〇二九	一八一
			三、三二三	〇九七

(二) 主要産地

大阪 市 泉 南 郡

(三) 製造戸數及職工數(三十八年)

製造戸數 十一戸

職工數 三百二十六人

(四) 製産狀況

近時内地ニ於ケル菜種栽培ノ減少ハ油糟ノ産額ヲ減少セシメ又北海道地方ヲ初メ魚肥ノ供給豐饒ナラザルガ爲メニ人造肥料ヲ使用スルモノ多キニ至リ殊ニ戰爭中ノ如キハ滿州豆糟ノ輸入杜絶セシガ爲メ我内地ニ於ケル人造肥料ノ需要ハ一段ノ増加ヲナセルニ關ハラズ原料タル硫酸ノ輸入ガ戰時運賃保險料等騰貴ノ爲メ輸入減少セルアリテ内地製硫酸モ多ク軍用ニ買上ケラレ充分ノ製産ヲナス能ハザリキ然レトモ時局當時ニ在リテハ一般農民モ施肥ヲ手控エタルノ傾向アリシカハ茲ニ多少ノ平衡ヲ保持スルコトヲ得タリ然ルニ一タヒ平和克復トナルヤ此等ノ大勢ハ遂ニ新會社興起、既設會社増資等ニヨリテ著シク製産額ヲ増加セシメタリ人造肥料ハ機械製ナレトモ府下ニ於ケル製造家中攝津製油會社ノ如ク原料ノ配合丈ケハ配合機ヲ用ユルモノニアレトモ大抵ハ人工ヲ以テ之ヲ爲セリ

(五) 原料ノ需要供給

大阪府

原料タル硫酸「アンモニヤ」ハ内地産少ク多クハ英米獨等ノ輸入品ヲ使用シ磷礦モ亦能登ニ僅少ノ産出アレトモ品質下等ナルガ故ニ舶來品ヲ用ユ就中「オーシヨン」、「クリスマス」、「アルゼリヤ」ノ三種ヲ主ナルモノトス殊ニ「オーシヨン」ハ成分多量ニシテ其質軟キガ故ニ最も多ク用キラル

(六) 販路

輸出先ハ内地ハ關西地方ヲ主トシテ全國ニ亘リ海外ニアリテハ濠洲方面トス

(七) 荷造方法

輸出向ハ百斤即チ十六貫ヲ「ヅツク」袋ニ入レ内地向ハ十貫ヲ以ニ入レテ販出ス

(八) 人造肥料ノ將來

人造肥料ハ其効力有機質ニハ及バスト雖モ過燐酸ハ普通ノモノニテモ燐酸百分ノ十五以上ヲ含ミ十貫ノ價格一圓五十錢位ニシテ硫酸「アンモニヤ」ハ窒素百分ノ二十以上ヲ含ミ其價格十貫五六十錢ナレトモ魚肥ハ窒素百分ノ九乃至十燐酸百分ノ五乃至六ニシテ十貫ノ代價五圓二十錢位、油粕ハ窒素百分ノ約五燐酸百分ノ約二ニシテ價十貫目二圓三四十錢ナレトモ以上ノ點ヨリシテ人造肥料ノ將來ハ益々有望ナリト云ハザル可ラズ年々府下小製油粕業ノ減少スル偶然ニアラザルナリ

(五) 燐寸

(一) 産額	數	量	價	額
三十六年	七四、三九〇、四七八		一、七一〇、九八一	

三十七年	一三九、三〇三、九五四	二、八七三、五〇〇
三十八年	一二七、九七七、一八七	二、七九八、四七八

(二) 種類

安全 硫黄 黄燐

(三) 主要産地

大阪 堺 市 西成 郡 東成 郡
南河内 郡 中河内 郡 泉南 郡

(四) 製造戸數

明治三十七年ニ於テ製造家數六十戸職工八千八百十六人ヲ使役シ此他箱張等ニ於テハ一般人民(殊ニ農家ニ多シ)ノ副業トシテ從事スルモノ多ク其數詳ナラス

(五) 沿革

全國燐寸製産ノ半額ハ大阪府ニアリ製造戸數ニ比シ其造出力實ニ大ナリ今府下ニ於ケル之ガ沿革ヲ調査スルニ明治八年小杉又三郎等製造ヲ開始シ十年遊連橋畔ニ工場ヲ移シ之ヲ昌燐社ト稱シタリ是即チ斯業ノ起源ニシテ爾來數個ノ起業者アリシガ當時士族ノ貧困者多クシテ之ガ内職トシ殊ニ婦女子ノ業ヲ有セザル者ヲ使用スルニ便利ナル業務ナリシカバ起業者續出シ明治十三年ニ於テハ製造者十三名ニ上レリ然レトモ機械ノ設備不完全ニシテ軸木配列ノ杵ヲ有セズ化學的藥品配合法ヲ知ラズ製産毫モ振ハサリシガ明治六年以來井上貞次郎見ル所アリ苦心ノ結果「ムキ」機械、軸刻ミ機械「ドッキ」機械、丸「ムキ」機械等ヲ發明シテ七年東京ニ建テシ安全燐寸ノ業務ヲ擴張シテ十三年大阪ニ移シ着々製出ニ從事セシガ彼ガ最初ノ目的タル輸入防遏其功ヲ奏セシカバ更ニ進デ清韓及南洋印度地方ニ其販路ヲ擴張セリ然

ルニ此勢ヲ見テ競ヒ起リタル各社ハ粗製濫造ヲ敢テシ而モ生産過剰トナリシ爲メ止ム無ク濫賣ノ狀勢トナルヤ狡猾ナル清商輩ハ此機ニ乘ジ品位ノ如何ヲ吟味スルコト無ク之ヲ仲買シテ海外市場ニ送りシカバ我機寸ノ信用全ク失墜シテ十三年ニ於ケル三十六萬圓ノ輸出額ハ翌年三十五萬圓トナリ其翌年俄然三萬七千餘圓トナリ遂ニ十六年ニ於テハ僅々三千圓ノ少額ニ減退スルノ不幸ヲ見タリ去レバ府下ニ於テモ廢業者續出シ職工數僅ニ三百五十人同業者四五名トナレリ是ニ於テ同業者規約ヲ設ケテ之ガ挽回ノ策ヲ講ジツヽアリシガ端ナクモ十七年ノ朝鮮事變起リ銀貨ト紙幣トノ差著シク増加シ輸入原料ノ騰貴トナリ斯業者ヲシテ困難殆ンド其極ニ達セシメタリシガ兵庫縣下ノ製造家一致協力シ互ニ氣脈ヲ通ジテ之ガ救濟方法ヲ圖リ十九年再ビ輸出ヲ見ルニ至レリ是ニ於テ又製造者ヲ増加シタレトモ昔日ノ大敗ヲ繰返サンコトヲ恐レテ二十年府ノ認可ヲ得テ組合ヲ組織シ之ガ統一及ビ信用回復ヲ計レリ二十五年ニ至リ兵庫ト合シテ聯合組合ヲ組織シ神戸税關内ニ検査所ヲ置キ製品ノ検査ヲ爲シ之カ改善ニ勉メシカバ遂ニ内外ノ信用ヲ博シ又海外ニ於ケル昔日ノ販路ヲ回復シ得タリ然シテ内地ニ於テハ十八九年全國民ノ之ヲ使用スルニ至リシカバ販路擴張ノ餘地ニ乏シク爾來全ク輸出ニ全力ヲ注ギ製品ニ注意セシカバ又前轍ヲ踏ムコト無クシテ益々進運ニ向ヘリ斯クテ二十三年我政府黃燐製ノ國禁ヲ解クヤ井上貞次郎率先シテ之ガ製出ヲ爲シ漸次増加シテ輸出スルヤ需要愈々多ク一二年ヲ出デスシテ從來殆ンド清韓地方ノ專賣者タルノ觀アリシ澳國品ヲ驅逐シテ隻影ヲ認メザルニ至ラシメタリ然ルニ又モヤ同業者競争ノ端ヲ開クト同時ニ二十五年後半期ヨリ製品原料タル鹽酸加里ノ價格約一倍半ノ騰貴トナリシカバ再ビ恐慌ノ時機ニ接セリ仍テ輸出ヲ制限シ纒ニ大失敗ヲ免レ漸次好況ニ向ヒシモ機械舊式不完全ニシテ之ガ改良ヲ促スコト切ナリキ斯クテ又日清戰爭ノ起ルニ及ビ清韓ノ輸出ハ全ク杜絶シタリシガ戰後急速ノ發展ヲナシ井上貞二郎三十年運賃及海關稅ノ負擔ヲ輕カラシムル目的ヲ以テ細軸安全「マツチ」ヲ製造シ遂ニ東洋市場ヨリ全ク外國品ヲ驅逐シタリ而シテ府下輸出額ハ二百萬圓ニ垂ンタルノ好景ヲ呈スルニ至リシカハ起業者續出シテ製産過剰ヲ來タシ翌三十一年或ハ休業

シ或ハ轉業スル者多ク再ヒ悲況ニ沈淪セシカ法律ニ基キ組合ヲ組織シテ宿弊ヲ掃蕩シ着々面目ヲ改ムルニ至リシガ恰モ北清事變起リ北清ノ需要杜絶セシモ事件鎮定ト共ニ販路却テ擴張シタルノ觀アリ爾來順境ニ向ヒシモ三十六年四月清國爲替相場激變ニヨリ多少影響ヲ被リシカ之ガ爲メニ大勢上變調ヲ來タスコト無カリキ三十七年日露大戰ノ起ルニ會シ又同様ノ現象ヲ繰返シタレトモ其結果モ亦日清戰爭及北清事件ト同一ナリキ

(六) 製産狀況

三十七年ニ於テハ時局ノ影響ヲ受ケ製産額輸出額共ニ減少セシガ戰局ノ發展ト共ニ漸次回復セリ三十八年上半年期ハ海上不便ノ爲メ輸出抄々シカラス唯北清向黃燐製見越輸出ノ好景ヲ呈セシノミナリキ下半年期ニハ黃燐ノ輸出減少セシガ安全製ハ機寸合同問題ノ爲メ内地向好況トナリ殊ニ爲替相場低落ノ爲メ輸出盛況ナリキ三十九年ニ入りテモ三十八年末ニ於ケル盛況ヲ持續シ四月ニ至リシガ製産過剰ノ爲メ價格一割五步方下落セリ而シテ約定物ノ如キモ口實ヲ設ケテ破約スルモノアリ製造者ハ多少ノ損失ヲ被リ下半年期ニ至リテハ殊ニ不振ヲ極メタリ去レバ製産額モ減少セリ原料モ内外共ニ總テ一割乃至三割ノ騰貴ナリキ唯内地産軸木ノミハ一二月頃ヨリ漸次下落ニ向ヘリ

職工ハ三十七八年戰役當時ニ在リテハ出征軍人遺族等ノ之ニ從事スル者多キト紡績業緊縮ノ爲メ職工ノ轉業セル者アルトニヨリ一時ニ製産狀態ニ膨脹ヲ來タシ初期ニ於テハ稍ヤ不安ノ趨勢無キニシモアラザリシガ戰局發展ト共ニ活氣ヲ加ヘ來リ且検査所ノ設置ニヨリ從來ノ惡弊ヲ矯正シ製品確實トナリ需要ハ内外共ニ増加シ製産額モ亦著シク膨脹シ殊ニ三十九年ニ於テハ一段ノ盛況ヲ呈シタリ然レトモ近時浴巾製織業繁榮ヲ極ムルノ結果職工ノ多ク此方面ニ轉ズルコト府下郡部ニ於テ其現象ヲ見ル

職工ハ大抵一日十時間乃至十二時間ノ程度ニ於テ從事シ家内副業ノモノニアリテハ其從業時間一定セズ尙ホ日中時間短キ時ハ夜業ニ從事スト云フ

(七) 原料ノ需要供給

原料中軸木ハ北海道其他ノ内地産及英米獨佛等ノモノヲ用ヒ色紙ハ未ダ内地産(主トシテ大阪)ノミニテハ全ク其需要ヲ充タスニ足ラズシテ佛國米國ノ産ヲ使用ス而シテ黃燐、鹽酸加里、洋膠、亞鉛板、「バラビン」亞鉛花等ハ英米獨佛等ノ産ニシテ一般原料ハ時局以來輸入税運輸不便等ノ關係ニヨリ價格約二割位騰貴セリ然レトモ之ガ供給ハ不便ヲ感ズルニ至ラズ神戸「デンカンブ」商會「スタンダード」商會及大阪仲繼人等ヨリ購入ス

(八) 製産費及收益ノ比較

製産費區々ニシテ一定セズト雖モ全體ヨリ見ル時ハ原料費八歩六厘、工費其他一步三厘、收益一厘ノ割合ナルガ如シ今府下安全及黃燐「マツチ」ニツキ堺市ニ於ケル全額及一噸ニ就テノ生産費ヲ計算スルニ次ノ如シ

赤燐	五〇〇 <small>円</small>
鹽酸加里	九八五
バラビン	八八〇
軸木	一、四〇〇
原料 アンチモニー	二二〇
封紙	二八〇
デツタル	三七五
小箱	二、四〇〇
石炭	一五〇
堺市(一噸ニツキ)	

其他雜費	八二〇
工費	二、〇〇〇
計	八、〇〇〇
製品賣價	九、九〇〇
差引利益	一、九〇〇

(九) 販出額及仕向地

三十七年ニ於ケル生産額中内地向六十二萬四千四百七十八圓ニシテ外國向二百二十四萬九千二百二十二圓ニシテ海外ニ於ケル仕向先ハ韓國、清國、香港、海峽殖民地、印度、濠洲、北米合衆國、布哇等ナリトス

(十) 販賣手續等

清韓地方ニ向テハ直輸出ヲナスモノアリ代金ハ現金ナルアリ月一回又ハ二回ノ勘定ナルアリ又爲替ニヨルモノアリ而シテ多クハ神戸大阪ニ於ケル居留外商若クハ大阪貿易商人ニ賣渡シテ輸出スルモノトス尙仲買人ハ賣買ノ當人ヨリ各一函ニ付キ一定ノ手数料ヲ受ク

(十一) 相場

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
安全(木)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇
六百打ニ付	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一四,五〇〇	一四,五〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇
同(細)	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一六,五〇〇	一六,五〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇	一七,〇〇〇

大阪府

リ漸ク需要ヲ回復シ南ハ新嘉坡ヨリ北ハ浦潮ニ至ルマテ販路ヲ擴張スルニ至レリ然ルニ偶々西南戦争起ルニ及ビ一般産業ノ不振ヲ來タシ斯業モ亦其影響ヲ被ルコト大ニシテ同業者中轉業又ハ廢業スル者多カリシガ小西藤兵衛刻苦精勵之ガ回復ヲ計リ明治十一年裏毛莫大小ノ發明ヲナシ忽チニシテ好評ヲ博シ茲ニ再ビ斯業ニ從事スル者續出スルニ至レリ爾來或ハ紀州紋羽毛掻工ヲ輸入レ或ハ工夫ヲ凝ラシテ小西藤兵衛ハ裏毛掻ニ農事試作場ノ「テッセル」ノ下附ヲ請フテ之ヲ實試シ成功ヲ告ゲ舶來品ニ髣髴タル製品ヲ出スニ至レリ然ルニ再ヒ經濟界ノ變調ヲ來タシ同十四年同業者半數ニ減ジ斯業ノ衰進ヲ見ルニ至リシガ經濟社界ノ狀況舊ニ復スルト同時ニ又之ガ商勢ヲ回復シテ十七八年頃ニハ殆ント輸入品ヲ防遏スルニ至リ茲ニ岩崎某等計テ當局保護ノ下ニ見本ヲ各國駐在ノ領事ニ輸送シテ試賣セシガ好評ヲ博スルニ至リシカバ同業者ノ數益々増加シ百數十名ノ多キニ達シ動モスレバ同業者間競争ヲナシ弊害ヲ醸出セントスル形勢ヲ呈セシカバ府廳ノ認可ヲ經テ組合ヲ組織シ各自ノ利害ヲ研究シテ改善進步ノ方法ヲ講セントセリ此時恰モ紡績會社勃興ノ時機ニ際會シ原絲ノ供給ヲ海外ニ仰グノ必要ヲ見ザルニ至リ莫大小賣價二三割ノ低廉ナルニ至リシカバ之ガ需要ハ頗ル増加シ同二十四年ニ於テハ同業者毎月相會シテ競賣買及商略ノ攻究ヲ爲スノ競賣市會ナルモノヲ組織シ愈々好況ヲ呈スルニ至レリ降テ日清戦争ノ時ニ際シテハ輸出ハ多少減退ノ狀況ヲ示シタリト雖モ他ノ産業ト趣キヲ異ニシ内地ノ需要益々頻繁トナリ殊ニ戦後經濟社會ノ發展ト共ニ著シク發達スルニ至レリ殊ニ二十六年小西藤兵衛等ノ發起セル株式會社ハ從來ノ天日乾燥法ニヨル晒白ノ到底多額ノ生産ニ適セザルヲ看取シ茲ニ蒸氣機關ヲ裝置シ技師ヲ海外ニ派出シ新式晒白法ヲ採用セリ縫針ノ如キモ從來舶來品ノミナリシガ新ニ之ガ模倣ヲナシ而モ高崎清右衛門ガ發明セル模倣丸護織織機械ハ敢テ舶來品ニ劣ラズ二者共ニ殆ンド輸入品ヲ防遏スルニ至レリ此他此等ノ機械類發明模倣等ニヨリ斯業ノ發達ニ裨益スル所多ク遂ニ府下ニ於ケル莫大小業ハ全國ニ冠タルニ至レリ然ルニ三十三年末ヨリ三十四年ニ於ケル大阪經濟界ノ大恐慌ハ他ノ産業ト同シク莫大小業ニモ多大ノ打撃ヲ蒙ラシメ倒産ニ次グニ倒産ヲ以テシ製

造戸數半以上ノ減少トナレリ而モ海外市場ニ於ケル價格ハ前年ヨリ甚シク下ルコト無カリシト雖モ其産額ハ一割五歩ノ減退ヲ見タリ然レトモ漸次又回復シ殊ニ日露戦争ニ際シテハ清韓二國及ビ内國ノ需要激増シタリ是レ軍用品夥多ナリシカ故ナリ左ニ府下産額ノ累年統計ヲ示スヘシ

(二) 産 額

年 次	個 數	人 口	量	價 額
廿九年	三九八	二、二二〇	一、二二九、六〇一	一、四四九、四八六
三十一年	三七一	二、二三三	一、一七二、五二九	一、三七九、一一七
三十二年	三二九	一、九九六	一、〇七八、九九四	一、二五四、四六四
三十三年	三六一	二、二二三	一、二三七、四二一	一、四一〇、四八五
三十四年	四二六	二、三四三	一、二二七、七九九	一、四二〇、二九六
三十五年	一八五	一、五〇一	八九〇、五三〇	一、二五二、九三七
三十六年	一八八	一、二三三		一、八〇八、八六一
三十七年	一八七	一、五五九	一、七三五、二四二	二、三七二、八八三
三十八年	二一六	二、六二一	一、六三六、六七二	二、三一三、八二七

(三) 種 類

シャツ、ズボン下、靴下、手袋、サル股、其他

(四) 主要産地

大 阪 市

(五) 製産狀況

大阪府

本業ハ近年著シク發達シ日露戰爭中モ格別ノ影響ヲ蒙ラサリシノミナラズ印度地方ノ需要増加ト内地軍用防寒用トシテノ需要多カリシヲ以テ却テ好況ヲ呈シタリ但原絲ノ騰貴ハ製産費ヲ昂騰セシムルニ至レリ

莫大小ハ十二月末ニ於テ冬物ヲ仕切り一月ヨリ夏物ノ製造ニ從事スルモノニシテ輸出向ト内地向トガ其繁閑ノ期節ヲ異ニスルガ故ニ職工使用上非常ノ利便ヲ得

(六) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數	二一六戸
職工數	二、六二一人

(七) 原料ノ需給

今日ニテハ原料タル綿絲ノ供給ニ困難ヲ感ズルコト無シト雖モ價格騰貴セルガ爲メ製産上多少ノ苦痛無キコト能ハズ然レトモ取引盛況ナルガ爲メ稍ヤ之ヲ減殺スルコトヲ得ヘシト云フ

(八) 製産費及收益ノ比較

原絲	六歩	晒	賃	四厘	
毛カキ	賃	三厘	染	賃	一步四厘
織	賃	一步二厘	裁	賃	三厘
口	錢	四厘	縫	賃	三厘

(九) 輸出狀況

三十八年ハ軍需防寒品ノ賣行多カリシモ内地向ハ氣候比較的溫暖ナリシガ爲メ著シキ好況ヲ呈スルニ至ラザリシノ

ミナラス原料騰貴セルガ故輸出モ亦甚ダ振ハス三十九年ニ入リテモ夏物季節タル三月ニ至ルモ依然トシテ悲況ヲ呈シタリ四月以降ハ順潮ニ向ヒ五月末ニ於テハ需要ノ大部分ヲ充タスコトヲ得タリ輸出ハ印度ニ於ケル天災影響ヲ蒙ルコト深カリキ而シテ職工ノ缺員ト原料ノ騰貴トハ製産額ヲ減少シタレトモ市場ハ日本海々戰ノ捷報至リテ以來益々好況ニ向ヒ殊ニ内地需要多カリシ爲メ平年ニ比シ早ク冬物季節ニ入レリ九月トナルヤ輸出益々好況ニシテ製産力モ不足ヲ訴フルニ至レリ年末ニ至リテハ北清航路杜絶シ且内地ノ賣行モ抄々シカラザリキ然レトモ支那ニ於テハ米國品排斥以來一般ニ我國産品ヲ需要スルモノ多キニ至レリ支那向ハ裏毛品トス印度向ハ薄地多ク近年裏毛品モ賣行アルモノ、如シ

今明治三十五年以來阪神兩港ヲ經由セル綿メリヤス肌衣及靴足袋ノ海外輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

大阪港輸出額

綿メリヤス肌衣	靴足袋	
三十五年	六四、六九一	五一、三七一
三十六年	五二、六一五	六一、四三〇
三十七年	一四二、七七一	八〇、七六三
三十八年	二二八、二八六	一三三、三六八
三十九年	六一九、三一五	三一四、九三二

神戸港輸出額

綿メリヤス肌衣	靴足袋	
三十五年	一三六、七四七	八〇、七〇六

大阪府

ハ産業上重要ノ地位ヲ占ムルニ至レリ

(二) 産額	産額	金額
明治廿年	二〇六、一五二	?
同廿一年	二七九、一六五	?
同廿二年	二八五、八七六	?
同廿三年	二二一、二八四	?
同廿四年	一五八、二六三	?
同廿五年	一四四、三六二	?
同廿六年	一一五、四〇六	?
同廿七年	一五六、八二五	?
同廿八年	一三八、五七七	?
同三十四年	三八六、〇二八	三七四、七五八
同三十五年	?	九五六、六〇三
同三十六年	?	一、〇〇四、二七三
同三十七年	二、八七一、五六六	一、一三三、二一九
同三十八年	三、四二一、一六三	一、二二九、二四五

(三) 製造戸數及職工數(三十八年)

製造戸數 七五戸
職工數 一、三九五

(四) 製産狀況

本品ハ戦争ノ影響ヲ被リタル物産ノ一ニシテ會社組織ニヨレルモノト家内工業ノモノトアリ前者ハ海外ノ注文ニ應ジ之ガ製作ヲナセトモ後者ハ豊能ノ如キ田舎地方ニ於テ大阪商人ノ注文ニヨリテ下請製造ヲナスモノナレバ平時四位ノ職工ヲ使用シテ從業セリ府下ニ於ケル大工場ハ「ゼ、ローヤル、ブラシ」合資會社ニシテ職工ハ毎日午前七時ヨリ午後五時マデ就業シ一時間休憩ヲ與ヘ居レリ
時局以來職工減少ノ傾向アリシガ米國市場ニ停荷ヲ見ルニ至リ一時産額ヲ減退スルノ止ムナキニ至レリ然レトモ平和克復以來漸次景況ヲ回復シ來レリ

(五) 製品ノ種類

爪 刷子 齒 刷子 理髮 刷子 其他

(六) 原料ノ供給

原料タル豚毛ハ佛國産、支那産ニシテ牛骨ハ英國、米國、濠洲及内地産トス而シテ唐木ハ支那、印度、暹羅産ヲ用フ原料ノ重ナルモノハ英、米、佛ノ代理店ヨリ輸入ス

(七) 販出額(三十八年)

内國各府縣 二十萬圓餘
外 國 八十一萬八千三百十二圓
外國ニ於ケル販出先ハ米國、英國、英領亞米利加、支那、濠洲等ヲ主ナルモノトス

大阪府

米國向ハ製造者直接ニ在米支店ニ輸送販賣シ清韓向ハ大阪市雜貨貿易商ノ手ヲ經テ販出セラル其他大阪、神戸居留外商ノ注文ニ應ズルモノトス

(八) 相場 三十九年一月ヨリ十二月ニ至ル(單位厘)

製	品	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇	三三〇〇
	休	八三〇〇	九六〇〇	四六五〇	九八〇〇	九八〇〇	一〇、五〇〇	一〇、六〇〇	一〇、七〇〇	一〇、八〇〇	一〇、九〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、一〇〇

(九) 販出手續

下請人ハ主ニ大阪市料野米藏ニ賣渡シ「ブラシ」會社ハ米國紐育市「ジアルギブトン」商會及英國倫敦「ダイヤモンドビルヂングス」商會等ノ注文ニ應ジ輸出ス

(十) 荷作及運搬費

輸出品ハ刷子一打或ハ半打宛紙函ニ入レ「レットル」ヲ張り其紙函五百二十一個(一梱ノ平均數)ヲ澁紙又ハ油紙ニ包ミ亞鉛板ニテ密封シ縦八分板長三尺一寸三分巾一尺九寸三分高一尺八寸六分ノ釘付外箱ニ入レ外部ヲ鐵帶ニテ締ム此ガ外箱一個ニ付一圓二十五錢、紙函五百貳拾壹個ニテ十三圓貳錢五厘「レットル」五百二十一枚一圓六十錢、釘二百十匁四錢八厘、澁紙油紙二十一錢、亞鉛板一圓〇四錢、鐵帶八錢ヲ要ス而シテ神戸迄ノ運賃一梱約四十錢也

(十一) 盛衰ノ見込

本品ハ機械的ノ作業ニシテ又手工の仕事多キガ故ニ海外製産地タル英、佛等ニテハ工銀甚ダ高ク廉價ノ製品ヲ出ス能ハサルヲ以テ品質ヲ改良シ歐米人ノ嗜好ニ適セシメバ前途頗ル有望ナルヘシ歐米向ハ主ニ齒刷子トス

(十二) 府下ニ於ケル主ナル賣込商

大島 兼介 兼松 大藏 太田 宗助 小林 常次郎
 松 德 松 ガローヤルブラシ合資會社 關西刷子工場 帝國ブラシ株式會社

(八) 玻璃製品 (玻璃鏡ヲ含ム)

(一) 産 額	玻璃 鏡	各種 製品
三十四年	?	九二八、七四七
三十五年	?	一、〇六七、三五四
三十六年	?	九三二、四三二
三十七年	?	九三二、六九七
三十八年	一七五、六二二	一、一〇九、九九四

(二) 沿革

我國ニ於テハ太古玉工ト稱スルモノアリテ寶玉ヲ作り以テ之ヲ皇室ニ獻納シタルコトハ史ノ傳フル所ニシテ神武帝以來代代此事アリシモ承平天慶ノ亂アルニ際シテ國內騷亂玉工四散シテ一時斯業廢滅セリト云フ然ルニ六百有餘年ヲ經テ元龜年間南蠻ノ玉工來リ大阪ノ玉工モ亦之ヲ傳習シテ其製作ニ從事セリ而モ當時ハ皆玉ニシテ他ノ玻璃器ハ一モ有之コト無カリシカ元和年間濱田某ナル長崎人南蠻ヨリ眼鏡ノ製法ヲ習得シ來ツテ大阪其他玉工ニ之ヲ傳授シ各種ノ眼鏡ヲ製出スルニ至レリ徳川氏ノ世ニ至リテハ盛ニ之ガ製産ヲ試シシモ粗品ニ過ギザリシガ寶曆年中長崎ノ久米清兵衛和蘭人ヨリ硝子製法ヲ傳習シテ大阪ニ來リ天神社前ニ開業シ自ラ其業ニ從事シテ技ヲ他ニ傳ヘザリシガ後僅ニ二

三ノ者ニ傳ヘ寛政ノ頃漸ク販路ヲ擴張セリ其後文政年間ニ至リ同業者増加シ徒弟ヲ置キテ事業ノ發達ヲ計リ飲食器ヲ製出スルニ至レリ然レトモ未ダ學理ノ應用ヲ知ラズシテ着色意匠ノ完備スル能ハズ其後安政六年通商貿易ノ開カル、ニ及ビ「ランプ」ノ輸入ヲ見苦ダ便利ナルヲ感ジタレトモ火屋ノ供給充分ナラザルガ故ニ之ガ使用ノ利ヲ得ザリシカバ伊藤庄三郎等苦心ノ結果之ガ製法ヲ發明スルニ至レリ然レトモ當時石油一升七八十錢ノ高價ナリシカバ「ランプ」ヲ使用スル者ナク加フルニ維新ノ變亂ニ際會シテ此等製造業ハ一時廢絶ノ状態ニ陥レリ維新後ハ輸入増加シ價モ亦從テ低廉トナリ需要増加シタレトモ内地模造品ハ粗製品ヲ出セシメ信用ヲ失墜セリ其後府下伊藤某造幣局硫酸瓶ノ製造ヲ依頼セラレシカバ當時品川ニ設置セラレタル工部省所屬硝子製造所ハ外人技師ヲ雇入居リシガ故之ニ練習生ヲ派シ業終ルヤ十五年株式會社ヲ組織シ大ニ之ガ改良ヲ計リシモ二十一年遂ニ解散ノ不幸ニ陥レリ然レトモ同社ノ職工ノ如キハ各所ニ製造所ヲ開キ熱心業務ニ從事セシカバ斯業大ニ興リ漸次外國品ヲ壓倒スルノ好運ニ向ヘリ殊ニ日本硝子株式會社職工監督タリシ島田孫市ハ同社工場ヲ讓受ケ苦心經營ノ結果色硝子透明硝子其他彩色ヲ焼附クルノ法ヲ發明シ完全ナル器物ヲ製出スルニ至リ遂ニ多年ノ研究功ヲ奏シテ板硝子ノ製造法ヲ會得シテ我硝子製造界ニ一大光明ヲ與ヘタリ本業モ亦幾多工產品ト等シク經濟界ノ情況ニ因リ時ニ盛衰ヲ示シ殊ニ日露戰爭中ハ「バルチック」艦隊來航等ノ爲メ多少輸出ニ影響セシモ漸次海外ニハ好評ヲ博シ順境ニ處シツ、今日ノ盛況ヲ見ルニ至レリ

玻璃鏡ハ我國固有ノモノハ頗ル幼稚ナルモノナリシガ輸入鏡ヲ見ルニ至リ世人ノ嗜好ハ之ニ向ハントセシカバ此舶來種ヲ製出スル方法ハ未ダ知ラレズシテ殊ニ職工及精良ナル原料ヲ得ルコト能ハザリシカバ之ガ製品モ甚ダ粗雜ナルモノナリキ然レトモ浪川虎之助ハ明治三年之ガ製造ニ着手シテヨリ以來苦心經營ノ結果大硝子面ニ銀ヲ附着セシムルノ發明ニ次ギ明治五年金線、塗線其他ノ附屬品ヲ製造スルニ至リ販路漸ク開ケ長崎支店ヲ設ケ續テ同七年香港、上海等ニ輸出スルニ至リ明治十二年頃ニハ硝酸銀ヲ以テ銀ニ代フルニ至リ其他品質意匠甚モ舶來品ト異ナル無キニ至レリ去

(三) 主要産地
大阪 市

(四) 製造戸數及職工數(三十八年)
製造戸數 一一二戸
職工數 一、九九八

(五) 製品ノ種類
燧類、石笠、ホヤ類、舶來模造品及食器、板硝子、鏡其他

(六) 製産狀況
硝子板ハ日露戰爭中ハ諸建築線延又ハ中止トナリシガ爲メ之ガ影響ヲ蒙リシガ白耳義ノ硝子職工同盟罷工ト海上危険トハ輸入品ノ杜絶ヲ見ルニ至リシカバ一時其需要ヲ増加シタレトモ卅七年八月以來再ビ輸入品ヲ見ルニ至リ内地品ニ影響セリ然レトモ平和克復ト共ニ建築増加シテ玆ニ製産又盛況トナリ且其製法著シク發達セリ而シテ硝子鏡及「ランプ」等玻璃製造品ニ至ツテハ時局ノ影響著シクシテ一時價格ノ低落ヲ來シ製造家ハ業務ヲ減縮シ以テ製産額ノ減少

ヲ謀ルノ不況ニ陥リシガ漸次市況回復シ殊ニ恤兵部ヨリ酒瓶ノ注文アリ又ハ佛領交趾政府ノ特約品アリシ等ノ諸原因ハ因テ製産額増加ノ好況ヲ示スニ至レリ玻璃鏡ノ如キハ機械力ニヨリテ製産セルモノアリト雖モ手工ヲ要スルノ點多キガ故ニ尙未ダ大工業的施設ニ依ル能ハズ之ガ製造業モ個人ノ經營ニナルモノトス本品ノ上等ナルモノ、裏面ニ當ツル金屬ハ亞鉛ノ鍍金ニシテ輸入品ヲ用ヒ綠ハ真鍮鍍金ニシテ内地品ナリ而シテ「ガラツト」鏡縁ノ木片ハ從來「チャ」木ヲ用ヒシガ今ヤ競争甚シクシテ粗品トナリ内地雜木ヲ使用スルニ至レリ

(七) 原料需用供給

板硝子ノ原料ハ輸入品多キガ爲メ時局當時ニ於テハ海上運輸不便ニ伴フ障礙ヲ感ズルコト尠カラズ殊ニ燃料ノ價格騰貴セシヲ以テ多少ノ困難ハ免レ能ハザリキ他ノ玻璃製品ハ固ヨリ原料ヲ内地ニ仰グコト多ケレバ之ガ供給ハ充分ニシテ外國品モ一時ハ輸入ノ困難ニ遭遇セルモ戰局ノ發展ニ隨ヒ再ビ之ガ供給ヲ見ルコトヲ得ルニ至リ大體ヨリ云ハハ戰爭中ト雖モ原料ノ不足ヲ見ルコト無カリシカ如シ

(八) 輸 出 額

最近三ヶ年間ニ於ケル阪神兩港ノ海外輸出額ハ左ノ如シ

大阪港 輸出額	
三 十 六 年	玻 璃 製 品 一六二、六三七
三 十 七 年	玻 璃 製 品 一六五、二二八
三 十 八 年	玻 璃 製 品 二二八、八七四
	玻 璃 鏡 三一六、八一七
	五九〇、一〇二
神 戶 港 輸 出 額	

(九) 相 場	
三 十 六 年	玻 璃 製 品 三〇一、三七三
三 十 七 年	玻 璃 鏡 三三一、一三八
三 十 八 年	玻 璃 製 品 三〇二、八二六
	玻 璃 鏡 一七五、〇八三
	二七九、五四七
	二一五、六六八

各品種類多クシテ一定ノ相場ヲ明記スルコト困難ナレトモ五寸物一打七十錢、六寸物一打八十八錢ヨリ九十二錢、綠ナシ手附六寸物一打二圓二十錢、同五寸物一打一圓七十錢、綠ナシ角形六寸物一打二圓、同五寸物一打一圓五十錢位ナリ

(十) 販 賣 手 續

大抵大阪及神戸在留外商ノ注文ニ應ジ又ハ邦人雜貨貿易業者ノ手ヲ經テ海外ニ販出ス中ニハ海外ニ支店或ハ特約店ヲ有シ直接取引ヲナス者アリ

(十一) 仕 向 先

韓國、清國、佛領交趾支那、香港、印度、海峽殖民地等ヲ以テ主ナル海外販出先トナス

(十二) 荷 造 法 及 運 賃

一般破玻璃製品ハ一個ツ、包裝シテ半打乃至一打ヲ以テ紙箱ニ詰メ更ニ之ヲ厚キ「バトロン」紙ニテ上包ミシ十打乃至十五打ヲ堅牢ナル木製箱ニ納メ聽ヲ以テ中詰ヲナシ鐵帶ニテ締ム其費用約五十錢ニシテ神戸迄ノ運賃十八錢ナリ

(九) 精 銅 及 黃 銅

(一) 産 額

年 次	銅		黄 銅	
	数 量	金 額	数 量	金 額
三十五年	六、六九一、六二九 _斤	三、九四一、二八九 _円	二、九七一、六二九 _斤	九八六、二四〇 _円
三十六年	六、四九二、四一九	三、八九五、四五一	二、九六四、一二五	九七八、一六二
三十七年	三、八〇二、八九一	八、九九五、〇〇九	五七九、二一八	一、一八四、三五九
三十八年	三、九五六、二一八	一、四七三、〇三二	六一二、六八二	二、三二八、一九二

(二) 種 類

熟 銅 薄 銅 板 黄 銅

(三) 主 要 産 地

大 阪 市

(四) 製 造 戸 數 及 職 工 數 (三十八年)

工場二十六ヶ所職工數千六百九十二人此内女百六十四人ナリ

(五) 事 業 ノ 沿 革

銅吹事業ハ往時ヨリ大阪工業ノ重要部分ヲ占メタルモノナレトモ其慣習舊法ニ屬スルガ故ニ之ヲ改廢シテ一大進歩ヲ斯業ニ畫スルガ爲電氣作用ヲ以テ荒銅ヲ精煉セント欲シテ創立セラレタルモノハ資本金三十萬圓ノ大阪電氣分銅株式會社ナリトス是ニ先ツ二年即チ明治二十四年御料局ハ大阪製煉所ヲ設置シタリシカ(二十九年之ヲ三菱合資會社ニ拂下ゲタリ)當時尙我國民ハ未ダ電氣精煉ノ品質佳良ナルヲ知ラズ僅カニ砲兵工廠、造船所、造幣局等各工廠ニ使用スルニ過ギサリシカ近時海外輸出ノ増加スルニ至リ又此ガ精煉所モ増設セラレ今ヤ右電氣分銅會社ノ製煉ノミニテモ

(六) 製 産 状 况

三百萬斤ニ垂々トスルニ至レリ
三十七年中ニ於テハ價格ニ變化無クシテ順潮ヲ保チタリシト雖モ三十八年ニハ時局ノ影響ヲ蒙リ職工ノ多ク出征セルト又砲兵工廠ニ轉ジタル等ニ依リ一時之ガ補充ニ困難ヲ感ジ待遇法ヲ改良シテ之ヲ吸收スルノ止ムナキニ至ラシメタリ然レトモ平和克復ト共ニ漸ク回復シ殊ニ海外市場ノ需要漸次増加スルノ傾向アルガ故ニ製産益々盛況ヲ呈スルニ至レリ

(七) 原 料 ノ 需 要 供 給

原料ハ銅鐵ニシテ伊豫別子銅山、陸中ノ小阪、尾去澤其他ノ鐵山、備中ノ帶江、出雲ノ大森、飛彈ノ平金、日向ノ日平、下野ノ山一、加賀ノ尾小屋、其他内地ノ鐵山ヨリ供給ヲ受ケツ、アリ然ルニ近時清國官衙ノ買上多額ナル等ノ理由ニヨリ需要著シク増加シ礦山主及商人等ノ強氣ナルガ故ニ買入レ頗ル困難ナリト云フ

(八) 收 益 勘 定

電氣分銅株式會社ガ報告セル收支勘定ヲ見ルニ次ノ如シ

	熟 銅	黄 銅
原 料 費	四拾參圓	四拾參圓
工 賃	七圓	五圓
收 入	參圓	貳圓
差 引 益 金	五拾五圓	五拾貳圓七拾五錢
大 阪 府	貳圓	貳圓七拾五錢
	圓	五十七

(九) 販出額及仕向地

最近三年間ニ於ケル阪神兩港ノ輸出額ハ左ノ如シ

大 阪 港		神 戶 港	
種 別	三 十 八 年	三 十 七 年	三 十 六 年
熟 銅	一七八七八・九二一	二五〇〇四・〇三	一九七八・八二五
板 銅	一八九三三・〇八七	二三八〇四・六〇	七二四・二五
計	四五、四九七	六二、七九八	三六、〇二八
熟 銅	一七、九二四・一八	二六、三二一・五	一六、〇二七
板 銅	一八、九四六・九〇	三六、四七六・八	二〇、〇〇一
計	三六、八七〇・〇八	六二、七九八・三	三六、〇二八

神 戶 港		大 阪 港	
種 別	三 十 八 年	三 十 七 年	三 十 六 年
熟 銅	一七、九二四・一八	二六、三二一・五	一六、〇二七
板 銅	一八、九四六・九〇	三六、四七六・八	二〇、〇〇一
計	三六、八七〇・〇八	六二、七九八・三	三六、〇二八
熟 銅	一七、九二四・一八	二六、三二一・五	一六、〇二七
板 銅	一八、九四六・九〇	三六、四七六・八	二〇、〇〇一
計	三六、八七〇・〇八	六二、七九八・三	三六、〇二八

(十) 販賣手續等

仕向先ハ韓國、清國、香港、印度及英國等ヲ重ナルモノトス
生産者直接ニ賣込ヲナスモノト仲繼商人ノ手ヲ經ルモノトアリ取引ハ總テ現金ニテ現物ヲ引渡ス又常得意先トシテ月二回ノ勘定ニテ取引スルモノモアリ唯清國ニ於テハ手数料トシテ商品代價千分ノ五ヲ引去ルノ慣習アリ

(十一) 輸 出 狀 況

三十八年清國政府ガ各省ニ流通セシムル補助貨ニ充ツルタメ銅貨地ヲ本邦ニ注文スルヤ大阪及京都ノ當業者續出シ

遂ニ粗製ノ弊ヲ生ズルニ至リシヲ以テ卅九年以降清國政府ハ本品取引ヲ拒絕スヘシトノ說アリシカバ當業者ハ年内ニ其引渡シヲ了セント欲シタルト歐洲ニ於ケル銅價奔騰ノ結果本邦銅ノ手合行ハレ爲ニ熟銅ノ輸出ハ著シク好況ヲ呈シタリ

而シテ薄板銅ハ韓國ニ於テハ別ニ異變ナシト雖モ清國ニ於テハ從來銅貨地金ニ使用サレシガ熟銅之ニ代リタル爲メ著シク其額ヲ減セリ

(十二) 輸 出 先 ニ 於 ケ ル 用 途 等

清國官署ノ銅貨鑄造事業及ビ器具其他工業用品原料トシテ用ヒラレ而モ該事業ハ益々發展擴張ノ見込アリテ加フルニ韓國印度ノ需要増加シ殊ニ印度ニハ使ヒ馴レタルモノヲ喜ブガ故ニ住友銅日向加賀銅等歡迎セラレツ、アリ

(十三) 相 場

銅ハ日露戰爭中モ清國ニ輸出セラレタル外戰事特種ノ需要ヨリ相場高値トナリ而モ三十七年末日ヨリ歐洲市場ニ於テ著シク騰貴シ遂ニ七十磅ニ上ラントセシカバ内地モ之ガ影響ヲ受ケタリ三十八年一月ニ於テ延地丁銅約一圓方騰貴セシガ下旬荒銅ハ下落セリ我國官署ノ需要ハ相應ニアリシモ三月ニ至リ爲替ノ不引合ヨリ清國鑄貨用ノ注文ヲ減ジ相場下落セリ然ルニ六月ニ至リ漸次之ガ回復ノ徵ヲ示シタレトモ九月ニ至リテハ各製煉所産額ヲ減退シ加之清國銅貨地金輸入禁止問題起リ前途頗ル不安ノ模様ヲ示シタリ然レトモ價格下落セルガ故ニ歐洲方面ヘモ多少ノ輸出アリ十二月ニ於テハ又輸出モ多少之ヲ見タリキ今相場ヲ示サバ左ノ如シ

(三十八年調平均相場)

延 丁 銅 (百斤ニ付) 大 和 丸 銅 (百斤ニ付)

一 月 四六、九〇〇 四三、六〇〇

二	月	四五、八七〇	四二、二七〇
三	月	四五、七〇〇	四三、一〇〇
四	月	四五、五七〇	四一、五〇〇
五	月	四四、五〇〇	四〇、四三〇
六	月	四五、六七〇	四〇、一七〇
七	月	四七、二〇〇	四一、三三〇
八	月	四七、三〇〇	四一、五〇〇
九	月	四七、五〇〇	四一、一七〇
十	月	四六、八三〇	四〇、六七〇
十一	月	四六、三三〇	三九、八三〇
十二	月	四七、一七〇	四二、四〇〇

(十四) 荷作方法及費用

銅貨地金ハ百封度入ト百斤入トノ二種アリ松八分板ニテ左ノ箱ヲ作ル

百封度入	巾	七、〇	長	九、六	深	五、七
百斤入	入	八、一		九、〇		八、一

之ニ巾一寸五分厚八分ノ口桁二本宛ヲ二寸釘ニテ固メ周圍ヲ鐵帶ニテ巻ク而シテ内装ニハ鍍力罐ノモノト「ツック」袋入ノモノ及ビ洋紙包ノ三種アリトス
之ガ費用ハ百斤入四十錢百封度入廿八錢トス

(十五) 競争品

清國ニ於ケル十五六ヶ所ト造幣廠ノ需要ハ我獨占ノ状態ニアリテ相場ニ至リテモ歐洲地方ノ如ク亂高下ノ危險少シト雖モ近時軍事多端トナリシ以來内地銅價ノ暴騰シタルガ爲メ若シ歐洲銅ノ價格ト共ニ之ガ引下グラナサハルニ於テハ清國及香港地方ニ向フモノハ輸出ノ減退ヲ見ルコトヲ免レザル可シト云フ又韓國ニ於ケル狀況ヲ見ルニ三十五年以來英米銅ノ輸入ハ我國ト等シク漸次増加シ三十八年一月ヨリ三月ニ至ル間ノ如キハ時局當時我國ノ止ム能ハザル事情アリシトハ云ヘ總輸入額八萬四千四百七十八擔中英米銅六萬五千六百七十擔ノ多キヲ占メタリ此中英銅ハ僅少ニシテ其大部分ハ米國銅ナリ米國銅ハ我電銅ニ比シ純分約千分ノ四劣ルト雖モ其價格廉ナルガ爲メ需要アリト云フ

(十六) 主ナル製造者及取扱商店

- 大阪電氣分銅會社
- 住友伸銅所
- 三菱大阪精煉所
- 増田合名會社
- 佐渡島製銅所
- 大阪ニ於ケル主ナル輸出業者

張友深萬年泰協茂永泰	萬豐太盛泰恒昌震文昌信	西盛永義昌信双盛太斗太永	鴻泰萬斗泰松原淳藏河邊九良三郎
------------	-------------	--------------	-----------------

本品ノ製作ハ木地職、塗師職、蒔繪職ノ三部ニ分レ造出スルモノニシテ分業ナリ日露戰爭ノ影響ハ著シク本業ニ及ビ内ハ國民ノ需要ヲ減少シ外ハ運輸不便且危險ノ程度多キガ爲メ運賃保險料等ノ騰貴トナリ製造者頗ル困難ニ陥リ轉廢業者ヲ續出スルニ至レリ然レトモ平和克復ト共ニ稍ヤ内外ノ狀況ヲ回復セルガ故ニ卅九年下半年期ヨリ製産狀況モ亦隨テ稍ヤ活氣ヲ呈スルニ至レリ大阪製品ハ職工各地ヨリ集合セルモノナルガ故ニ一定ノ特長ヲ有セズ種々雜多ナリトス本業ハ大工場尙仕掛ケテ以テ營ムモノ無ク職工等多クハ家内工業トシテ小規模ニ從事セリ是レ即チ紙製漆器(芝川氏所營)等ニ非ラザレバ主ニ手工業ニシテ機械ヲ應用ス可キ點尠キガ故ナリ

(七) 原料ノ供給

原料ハ大抵内地産ヲ使用スレトモ上等美術品ヲ除テハ多ク支那漆ヲ使用ス之ガ供給ハ戰事ニ於テ多少影響ヲ受ケタリト雖モ毫モ之ガ爲メ不足ヲ感ジタリト云フ程度ニ至ラズ唯價格ニ於テ約二割乃至三割騰貴ヲ見タルニ過ギズ

(八) 製産費及收益ノ比較

本業ノ如キ製品區々タルモノニ在リテハ之ガ收益ヲ算出スルコト甚ダ困難ナリト雖モ其製産ノ割合ヲ示サバ木地三歩、漆一步、職工賃六歩ニシテ戰後工賃約一割半騰貴シ當業者ノ利益ハ美術品等ニ於テハ二割以上ニ達スレトモ一般製産品ニ於テハ大概五分以上ナリト云フ

(九) 販 出 額

製品ハ之ヲ商人ノ手ニ賣渡スモノニシテ内外販出額ノ區別ヲナスコト困難ナリ大阪市ノ輸出品ハ他ノ内地品ヲ購入シテ之ヲ輸出スルモノ多ク爲メニ大阪製品ト區別スル能ハズ此ト同時ニ内外國人ニ店先キ販賣ヲ爲ス額少カラザルガ故ニ内外ノ販出額ヲ區別スルコト頗ル至難ニ屬ス海外ノ輸出先ハ清韓及米國ヲ第一トシ南洋及印度地方及其他多少有レトモ微々トシテ云フニ足ラズ

(十) 販 賣 手 續

製品ノ大部分ハ内地向ニシテ其取引ハ之ヲ仲買ニ賣渡シ又ハ直接販賣ヲナセトモ外國向ハ總テ注支ニ應ジ製作ス直輸出ヲナスモノハ韓國ヲ除テハ極メテ少シ

(十一) 相 場

製品ノ種類復雜ニシテ一々之ガ價格ヲ明示スル能ハズ戰後約二割乃至三割ノ騰貴ナリト云フ

(十二) 荷 作 方 法

荷作ハ縦ノ八分板ヲ以テ製シタル箱詰トシ鐵帶ヲ卷ク其内詰ヲナスニハ他ノ小箱ニ入レ又ハ藁包トス

(十三) 輸 出 狀 況

本品ハ支那、香港、露西亞等ニ於テ需要減退セルモノアルニ反シテ暹羅、韓國、獨逸、佛蘭西等ニ於テ増加セルガ故ニ輸出ノ大勢ニ於テ敢テ著シキ衰退ヲ見ズ韓國向ノ主ナルモノハ膳、塗箸、鏡臺等ニシテ近時蒔繪小箱ノ如キ優等品ノ輸出増加ノ傾向アリ米國向ハ寫真縁、仕事箱、二段棚、帽子臺等ノ家具及裝飾家具、卓子等其主ナルモノニシテ近年「ストロブ」隠シ及椅子等販路ヲ開ケリ北清向ハ果物器、食籠、其他婦人手箱、小箆筒、盆等ニシテ年々輸出狀況ハ他ノ内地品ノ盛衰アルニ關ハラズ大阪ニ於テハ一定ノ歩調ヲ以テ進ミ輸出額増加シツ、アリ

(十四) 輸 出 先 ノ 嗜 好

一般ニ云フトキハ清韓向キハ廉價ノ實用品ニシテ歐米向ハ美術工藝等ノ裝飾品多シ

從來清國向ノ我漆器ハ粗製品ニシテ剝落セシモノ多キガ爲メニ需要ヲ減退シタリ清國人ハ一般ニ堅固且便利ナル實用品ヲ愛シ必シモ廉價ナルノ故ヲ以テ粗品ヲモ厭ハスト云フニアラサレハ此點ハ當業者ノ深ク注意ス可キ事ナリトス歐米各國ト雖モ堅固精良ナル品ニ非ラザレバ永久ノ聲價ヲ保持シ能ハザルコトハ明カニシテ日用品ノ如キモ堅牢且便

利ニシテ例ヘバ仕事箱ノ如キ裁縫小道具全部ヲ蓋裏ニ狭ミ空間ハ糸巻ヲ入ル、ガ如キモノ好評ヲ博セリト云フ

(十五) 主ナル製造賣込業者

- 加藤 武右衛門
- 田 中 宗 兵 衛
- 田 中 合 名 會 社
- 東 門 五 兵 衛
- 手塚 平右衛門
- 鎌 谷 常 二 郎
- 藤 原 伊 兵 衛

(十一) 洋 傘

(二) 沿 革

府下ニ於ケル洋傘ノ製造ハ明治五年日野利三郎竹骨金巾張ヲ以テ之ヲ製造セシニ始マリ翌年井上淺文亦之ガ製出ヲ企圖シテ熱心其製造方法ヲ研究シ稍ヤ會得スル所アリテ多少ノ製品ヲ出スヲ得タリ其後二三ノ同業者輩出シタリト雖モ未ダ需要ヲ喚起スルニ至ラズ遂ニ廢業スルニ至レリ井上淺文獨リ此間ニ處シテ苦心研究シ明治十三年頃ニハ製産額モ増加シテ清國ヘモ多少輸出スルニ至レリ然ルニ明治十年ヨリ國民一般ニ西洋崇拜ノ傾アリ著シク舶來品ノ嗜好ヲ増加シタルガ爲メ洋傘ノ如キハ需要頃ニ多キヲ加フルニ至リ同業者競ヒ起リ傘骨及附屬品製造會社ノ創立ヲ見ルニ至レリ此ハ不幸ニシテ倒産セシモ明治十六年頃ニ至ルヤ清韓地方ノ需要大ニ増加シ十八年以後數年間最モ好況ヲ呈シ歐洲品ヲ壓倒シテ殆ンド獨占ノ狀勢ヲ示シタリ二十二年輸入溝骨特許洋傘ヲ模倣シテヨリ内外ノ需要益々増加スルニ至レリ是ニ於テカ又同業者ノ競争ヲ惹起シ一時清國方面ノ輸出衰退セシカ印度方面ニ向ツテ販路ノ擴張ニ勉ムル者アリ好況ヲ呈シタリ然ルニ粗製濫造ノ弊ハ免カル可ラザルノ形勢トナリシカバ二十七年同業者相謀ツテ組合ヲ組織シ之ガ改善ニ勉メタリ日清戰役當時ハ清韓ノ販路杜塞シタレトモ製造高毫モ減退スルコト無ク益々増加シ殊ニ戰争終了後恰モ盛夏ノ時季ニ向ヒシカバ著シク發展シ三十年頃ニハ南洋方面ニ販路愈々擴大シ三十三年ニ至ルマデ年々一割以上ノ増産額ヲ次ニ示スヘシ

(三) 産 額

年 次	數 量	價 値
明治三十四年	一五五、〇四三	一、一六四、五六四
全 三十五年	一六一、二四四	一、四〇二、八〇五
全 三十六年	一六四、一六九	一、四七七、五二二
全 三十七年	二二〇、六八〇	八三五、六三三
全 三十八年	一〇三、九一一	八一五、四九一

(三) 主、要、産、地

大 阪 市

(四) 製造戸數及職工數(三十八年)

製 造 戸 數	三三三
職 工 數	六〇〇

(五) 製 産 狀 况

日露戰爭ハ斯業ニ大影響ヲ與ヘ製産一般不振ナリシガ三十九年ニ至ツテ輸出増加ノ好況ヲ呈シ之ガ景況ヲ回復セリ

輸出時期ハ例年四五月マテニ悉皆取引ヲ終ルヲ常トス

(六) 原料ノ需給

原料ノ綿布地ハ多ク外國品ヲ用ヒ絹地ハ内地品トス骨ハ鋼鐵類ニシテ内外品共ニ使用ス

(七) 販出額

外國九割内國一割ノ比例トス今最近二ケ年間ニ於ケル大阪港ノ輸出額ヲ見ルニ左ノ如シ

三十一年	六五一、四三〇
三十九年	八一五、六〇七

(八) 輸出手續

多クハ仲繼業者ノ手ヲ經テ輸出セラレ製造者直接ニ販出スルモノハ極メテ少ナシ

(九) 販出品仕向地

韓國、清國、露領亞細亞、香港、英領海峽殖民地等

(十) 荷造法及費用

二十五打ヲ一函トシ内部ハ亞鉛板ヲ以テ包ミ外面ニ鐵帶ヲ用ユ此費用二圓五十錢乃至三圓トス

(十一) 海外ニ於ケル商況

清國民ガ漸次奢侈ノ風ヲ長ズルニ至リ近年我輸出洋傘モ上等品トナルノ傾向アリ木又ハ鐵柄ノ「バテン」ハ上海ニ多ク「引絞メ引揚ゲ」ハ香港ニ多ク需要セラル北清ハ下等ナル「バテン」需要最モ多シ上海ニ於ケル我輸入品ハ黑縹子及綾縹製、柄ハ人造象牙ニ彫刻ヲ施セルモノ氣受ケ宜シク上等物一打十兩中等物八兩五匁位ナリ其他一般ニ獨逸品ニ比シ我製品ハ二三割方低廉ナルガ故ニ嗜好ニ投ジツ、アルモノ、如シ尙英、米品ノ傘ノ心棒強ク太キモノハ下流社會

ノ者重荷ヲ助クルニ便ナリトテ愛用ス是レ我製造家ノ一考ヲ要スヘキモノトス

(十二) 重ナル製造者

大 阪 市	北川洋傘製造所	小林洋傘製造所	福原洋傘製造所
	林洋傘工場	二川製傘所	貴島洋傘工場
	六島洋傘所	井上洋傘工場	阿部洋傘工場
	川崎洋傘工場		

(三) 麥 酒

(一) 産 額

數 量

價 額

三十四年	三四、〇七〇	九二五、七七五
三十五年	三〇、八二一	九五五、三三二
三十六年	二七、三九四	八九四、二一四
三十七年	二五、八九四	七一三、七九七
三十八年	三九、八〇七	一、二七二、四六〇

(二) 種 類

旭ビール 錦ビール 旭黒ビール

大阪府

(三) 主要産地

大阪府三島郡

(四) 事業ノ沿革

大阪ニ於ケル麥酒會社ハ唯一アルノミ明治二十年外山修造鳥井駒吉二氏ノ發起ニヨリ三島郡吹田村ニ麥酒會社ヲ創設シ二十二年其製造ヲ開始セリ爾來經濟界ノ不振ニ遭遇セシカ或ハ社員ヲ海外ニ派シ或ハ外人技師ヲ雇聘スル等種々計畫スル所アリ同二十五年始メテ朝日「ビール」ノ名ヲ附シテ全國ニ發賣セリ五月大阪市内ニ販賣店ヲ設ケ翌年二月資本金拾萬圓ヲ増加シ大ニ擴張ヲ計リ「パブリック」風ノ錦「ビール」ヲ試醸セリ而シテ當初ハ舶來「ビール」ノ空瓶ヲ使用スル計畫ナリシモ輸入麥酒減退ト同社事業ノ發展トハ遂ニ製瓶所ヲ設置スルニ至ラシメ大阪市北區ニ工場ヲ建テシガ擴張ノ必要ニ迫リ西成郡海老江ニ移セリ時ニ明治二十九年也今ヤ瓶産額十萬圓ヲ超ユルニ至レリ而シテ廿八年ニ於テ同社ハ第二回ノ増資ヲ行ヒ十五萬圓ヲ増シ而シテ社債十萬圓ヲ募集セリ然ルニ日清戰後ハ其事業大ニ發展シ遂ニ一百万圓ニ増資スルニ至レリ爾來營々トシテ製産及販路擴張ニ勉メ内地ハ云フ迄モナク清韓ヲ越エテ遠ク南洋印度方面ニ輸出スルノ盛況トナレリ然ルニ三十九年東京、札幌兩會社ト合同シ大日本麥酒會社トナリ今ヤ舊大阪麥酒會社ハ之ガ分店トシテ製産ニ勉メツ、アリ

(五) 製造戸數及職工數

舊大阪麥酒會社ガ三十八年中使用セシ職工ハ男四百二十四人、女百十六人、計五百四十人ニシテ原動力ハ次ノ如シ

蒸 汽 力	電 動 力	發 電 機
機 關 數	機 關 數	機 關 數
實 馬 力	實 馬 力	馬 力
三	一	二
三三〇	七七	九〇

(六) 輸 出 狀 況

大畧其沿革ニ於テ述ベタルガ如ク大阪麥酒會社ハ創立以來漸次盛大ニ向ヒツ、アリリシガ明治三十六年ニ至リ日露開戰ノ風説頻ニシテ滿州商人ノ十一月結氷期前ノ見越輸入ヲ中止シ且翌年早々開戰ヲ見ルニ至リシカハ其海外販路ノ約六割ヲ占メタル滿州輸出杜絶スルニ至リ一時其影響ヲ蒙リ殆ンド悲運ニ陥リタリ而モ内地ニ於テハ戰争ノ爲メ國民一時勤儉貯蓄ヲ唱道シテ本品ノ販路ニ影響セントセル折柄捷報頻々トシテ來リ且軍隊用トシテ需要多ク敢テ不況ヲ呈スルニ至ラサリキ戰争以來滿州ニ於テハ露人ノ需要減退セント雖モ戰争中多少我軍占領地及芝罘ニ向ヒ殊ニ上海ニ向テ大阪ヨリ直輸出ノ途開ケ本邦品ハ獨逸及米國製麥酒ヲ凌駕スルノ勢ヲ示シ稍ヤ大勢ヲ回復ス可キ兆候ヲ示シタリ尙ホ日本麥酒會社大阪工場ニ於テハ近時海峽殖民地ヲ中心トシテ南洋方面ニ「スペシアル、ライト」ト稱スル淡味ノ製品ヲ輸出シ稍ヤ需要ヲ喚起シツ、アルガ故ニ製産ノ前途ハ之ヲ好望ナリト云ハザル可ラズ況ンヤ平和克復後再ビ滿州方面ニ販路ヲ開キシヤ

(七) 原料ノ需要供給

從來全國總輸出額ノ約七割ハ旭「ビール」ニシテ尙ホ漸次輸出額増加ノ傾アリ樽入生「ビール」ハ専ラ上海地方ニテ料理店ニ使用セラレ需要増加スルモノ、如シ然レトモ南洋方面ニ於テハ澳太利製ニ擬シタル獨乙製「ビルスナー、ビール」ノ輸入盛ナルカ故ニ此方面ニ販路ヲ擴張セントセバ競争ヲ免レサルベシ

原料ノ種類ハ「ドールトムンド」種ニシテ「メルン」輸出麥芽ト稱シ埃太利國メーレン州ノ産也苦草(ホップ)ハ埃太利國ビエーメン産ノ「ザーツ」及「パバリア」國中央フランケン州産ノ「スバルド」ヲ用ユ

麥芽苦草共ニ購入其時機ヲ得レバ多少ニ關ラズ供給容易ナリト雖モ天候收穫、需給ノ多少、運搬ノ便否等ニヨリ講入上難易アリ而シテ之ガ購入ハ直接製造所ニ注文スルコトアリ又仲買人ノ手ヲ經ルコトアリテ一定セズ

(八) 製産費及收益ノ比較

三十七年上半年製造費	三三三、七二四 ^円
同 下半年	三九一、〇八三
計	七二四、七九七

收 益

三十七年上半年	六〇、三三二
同 下半年	五九、五九五
計	一一九、九一七

(九) 販 出 額 (三十九年)

地 域	數 量	價 額
内 國	一〇一、一七六 ^箱	九六一、一七二 ^円
外 國	三三、〇三三	四二五、二八一

(十) 販 賣 手 續

大阪支店ヨリ各地特約店ノ手ヲ經テ販賣スルモノナルガ海外輸出ハ直接賣込ト内地商會ノ手ヲ經ルモノトアリ而シテ大阪神戸本船渡ニテ取引シ現金又ハ約束手形、取立爲替、荷爲替等ヲ取組ムモノモアリ

(十一) 相 場 (三十九年)

内 國 向	大瓶一箱	九、八〇〇	小瓶一箱	一一、八八〇
外 國 向	同	九、九〇〇	同	一一、九〇〇

(十二) 製 産 狀 況

元來我國ニアリテハ此業ハ未ダ充分ノ發達ヲ見ルコト能ハズ幼稚ノ狀態ニアリト雖モ將來必ラズ發展ノ見込アリ何トナレバ世ノ文運進歩スルニ從ヒ清酒ノ如キ酒精分ヲ多量ニ含有スル飲料ハ漸次其需要ヲ減退シ麥酒ノ如キ酒精分少量ナルモノ増進スヘキハ明カナル事ニ屬ス而シテ我國斯業者ニシテ自國産ノ「マルツ」ヲ使用セバ頗ル廉價ヲ以テ供給シ得レバ也故ニ將來南洋及東洋ノ市場ニ於テ獨逸産及米國産ノビールヲ壓倒シ無限ニ擴張シ得ル見込アリ

(十三) 荷作法及其費用

松又ハ樞ヲ以テ容積四才ノ箱ヲ作り大瓶四打ヲ入レ内地向ハ繩掛ケ外國向ハ針金掛トシ其費用ハ六十二三錢ヲ要ス而シテ運搬費ハ大阪ヨリ

至	運 費	至	運 費
至 川 口	四〇 ^圓	至 大 連	八〇 ^圓
至 神 戶	九〇	至 青 島	七〇〇
至 長 崎	三五〇	至 上 海	四五〇
至 橫 濱	六三〇	至 香 港	三五〇
至 天 津	七五〇	至 新 嘉 坡	五五〇
至 營 口	七五〇	至 南 洋 地 方	一、〇〇〇
至 芝 罘	三五〇		

(十四) 主ナル取扱商店

○製造者直接賣込

芝 罘	吉 岡 號	祐 和 盛 號	金 舛 洋 行
營 口	松 茂 洋 行	金 舛 洋 行	祐 和 盛 號
大 連	安宅合名會社出張所		

大阪府

天津	武者洋行
青島	東洋公司
上海	ゲッヂス商會
香港	カルトベック商會
漢口	ケッチス商會
廣東	小林洋行
東京	シモン商會
孟買	ハンター商會
マニラ	島商會
新嘉坡	ハンター商會
コランボ	浴谷商會
メダン	チヨキョト商會
パダビヤ	澁谷商會
スラバヤ	カンベルマクール商會
ビナン	ニーロツブ商會
	ハタソンシモン商會
大阪	糸平商會

○輸出品ヲ引取り直接輸出スル商會

武者洋行
東洋公司
ゲッヂス商會
カルトベック商會
ケッチス商會
小林洋行
シモン商會
ハンター商會
島商會
ハンター商會
浴谷商會
チヨキョト商會
澁谷商會
カンベルマクール商會
ニーロツブ商會
ハタソンシモン商會

双盛泰號
松下商店

神戸	ハンター商會
長崎	祐和盛號
内地ハ全國各縣ニ沙レトモ今一萬圓以上ノ需要地ヲ上グレハ左ノ如シ	
香川	廣島
滋賀	福岡
臺灣	東京
	大阪
	京都
	熊本
	兵庫
	三重
	福井
	鹿兒島
	庫

(三) 鈕釦

(二) 産額	數量	價額
三十七年	二、一〇四、七三三	六一四、六八二
三十八年	二、三四二、〇二六	一、〇八七、九八七

(二) 種類 鈕釦ノ種類ハ金屬釦、水牛釦、骨釦、貝釦、飾釦等ニシテ石釦モ多少製出スレトモ下等品ニシテ輸入品ニ比スヘクモアラス

(三) 主要産地

大阪市 南河内郡

(四) 沿革

大阪府

明治初年頃ハ卸ハ一切輸入品ニ供給ヲ仰ギタリシガ其價格甚ダ不廉ナリシヲ以テ中村儀助之カ製造ヲ開始セシカ明治十年頃ニハ需要頓ニ増加セシカバ船橋福松等亦之ガ製造ニ從事スルニ至リ二十一年以後ハ從來輸出木綿縮用トシテ使用シ來リシ舶來用卸ノ高價ナルヲ以テ内地産品ヲ以テ之カ製造ヲ開始シ二十五年頃ヨリ輸入ヲ杜絶セシノミナラズ却テ海外ニ輸出スルニ至リ殊ニ日清戰爭ノ際ハ海陸軍ノ需要増加シテ盛況ヲ來シ爾來内外ニ其販路ヲ擴張シ殊ニ近年洋服ノ流行ト共ニ一層需要ハ増加スルニ至リ製産家モ亦其數ヲ増加セリ

(五) 製産狀況

日露開戦前即チ三十五年頃ニ於テハ露國ガ輸入重税ヲ課シタル爲メ浦潮方面ニ對シテハ輸入杜絶ノ狀態ニ陥リシモ開戦間際トナルヤ内ハ我海陸軍ノ需要ヲ増加シ又旅順方面ニ向テモ露軍ノ需要有リ好況ヲ呈セリ然ルニ一朝開戦トナルヤ此等ノ需要ヲ見サルノミナラズ運賃保險料等騰貴ノ爲メ原料供給ノ不充分トナルト同時ニ製品輸出ノ難澁トナリ一時不況ノ狀態ニアリシモ平和克復ト同時ニ西比利亞地方輸入無税ナルノ利便ト一般需要ノ開始トニヨリ殊ニ清國ノ如キハ學生服ノ洋服トナルモノ多ク爲メニ需要増加セリ去レバ三十九年ニ於テハ製産著シク増加シ各種卸共ニ好況ナリシ

(六) 原料ノ需要供給

原料ハ金屬卸ハ眞鍮、銅、ニッケル、骨卸ハ牛骨、水牛卸ハ水牛及馬等ノ角、骨等ヲ使用シ貝卸ハ白蝶貝、黑蝶貝、夜光貝、廣瀬貝、南光貝、鮑貝、螺貝、高瀬貝等ヲ使用ス眞鍮ハ大阪、京都ニ産シ骨ハ主ニ南洋産ニシテ米國産モ多少輸入ス貝ハ八重山群島ノ産最モ上等ナリト雖モ産額少ク且價格高キガ故ニ南洋ヨリ輸入ス此等ハ皆大阪ニ於ケル仲繼商人ヨリ購入ス

(七) 輸出額並ニ輸出手續

製品ハ支那ニ輸出スルモノハ金屬卸多ク韓國及西比利亞地方ニハ各種ノ卸輸出セラル製産者直輸出ヲナスモノ少ク大抵支那商人ノ手ヲ經テ輸出ス仕向先ハ以上ノ各地ニ止マラズ獨逸及印度方面ニモ販出ス
金屬鈕卸ハ多少改良ノ跡見ユ此上ハ意匠ニ留意シテ色合及形狀等ヲ改良スルヲ要ス貝製ハ原料不足セル爲メ更ニ適當ナルモノヲ發見セザレハ製産上困難多カルヘシト云フ
最近阪神兩港輸出額ハ左ノ如シ

○大阪港輸出額

金 屬 製	三十八年	三十九年
貝 製	一四二、二九三	一八二、四九〇
其 他	六、七六八	五一、七六七
計	六、二二四	二一、二七七
○神戸港輸出額	一五五、二八五	二五五、五三四

金 屬 製	三十八年	三十九年
貝 製	五五、八三三	五七、二七七
其 他	一三五、三二五	二八一、〇六六
計	七三五	三、二五〇
計	一九一、八九三	三四一、五九三

(八) 荷造方法

大阪府

荷造リハ百又ハ二百哥ヲ縦箱ニ詰メ鐵帶ニテ締メ其四個ヲ更ニ大ナル箱ニ入レ又ハ五百乃至千哥ヲ一箱ニ詰ムルコトアリ其費用小箱四十錢大箱一圓餘ナリ

(九) 重ナル製造者

- 大阪市 (貝及金製) 中村儀助 (貝製) 船橋福松
- (全) 繩田久太郎 (全) 鐘搗仁三郎
- (全) 石田源次郎 (全) 磯部友次郎
- (金屬製) 三平株式會社 (全) 日本金屬品製造所
- 南河内郡 (貝製) 正垣卯之助 (全) 川端丑松

(四) 石 鹼

(二) 沿 革

明治四年頃春本重助船來石鹼ニ模倣シテ之ガ製造ヲ試ミ苦心研究スル所アリ然ルニ當時邦人ノ需要頗ル少ク收支相償ハザリシカ明治八九年ニ至リ需要次第ニ増加シタルト同時ニ海外輸出ヲ企テ清韓及印度地方ニ多少ノ輸出ヲナスニ至リ其後外商ノ手ヲ經テ海外販路ノ擴張ニ勉メタレトモ尙ホ微々振ハス然ルニ明治十五年頃ニハ内地ノ販路ハ關西地方一般ニ及ビ海外殊ニ清國ニ於テハ價格ノ低廉ナルヨリ好評ヲ博スルニ至リシカバ同業者漸ク増加シ遂ニ粗製濫造ノ弊ヲ萌セリ是ニ於テ十六年一月組合ヲ組織シ斯業ノ改善進歩ニ努メタレトモ年ヲ經ルニ隨ヒ規約ノ勵行モ其功ヲ奏セズ單ニ粗製濫造ノミニ止ラズ他人ノ模型意匠ヲ窃取シテ恬然耻ツル無ク唯眼前ノ私利ヲ計リ毫モ永遠ノ計ヲ爲ス者ナク爲メニ斯業モ一時衰迷ニ陥レリ仍テ明治二十六年製造業者ノミ團體ヲ再興シテ改善ヲ圖リタリシモ積弊ハ容易ニ刈

除スル能ハス時恰モ日清戰役起ルニ遇ヒ輸出ハ殆ンド杜絶ノ状態ニ陥リ事業全ク沈滞セリ是ニ於テカ同業者漸ク悟ル所アリ相共ニ規約ヲ遵奉シ稍ヤ面目ヲ改ムルニ至リ且日清戰後ハ内外ノ需要一時ニ増加シ形勢遂ニ一變セシカハ三十二年規約ヲ改正シ益々斯業ノ改善發達ニ勉メ續テ三十三年重要輸出品同業組合法ニ據リ組合ノ組織ヲ改メ且本品ノ品質意匠等ヲ改良シ爲メ内外ノ嗜好ニ投ジ益々盛況ヲ來セリ日露戰争ノ如キハ開戰當時多少ノ影響ヲ與ヘタルノミニテ三十八年ノ如キハ寧ロ好況ヲ呈シタルコト統計ノ示ス所ノ如シ

(三) 産 額

年 次	化 粧 用	工 業 用	洗 濯 用 其 他	計
三十六年	一、三五一、六五一	六、八一六	一七六、二〇四	一、五二七、八五五
三十七年	六五八、六一〇	六、八一六	六四、〇八〇	七二九、五〇六
三十八年	九五九、三二九	七、五〇三	六七、九一二	一、〇三四、七三四

(三) 主要産地

大 阪 市 中 河 内 郡

(四) 製造戸數及職工數(三十八年)

製造戸數 三十四戸 職工數 四百八人

(五) 製産狀況

今ヨリ數年前ニ於テハ專ラ直焚法ノミニヨリシモ素ヨリ此ハ全ク人力ニヨリ且其生地乾燥ニ至ツテハ唯天候ニ依賴スルモノナルヲ以テ數十日ヲ要シ若シ雨天ニ際セハ少シモ之ガ製出ヲナス能ハザルノ不便アルヲ以テ近年器械練製者ノ數ヲ増加シ三十六年度ニハ六十七馬力ナリシガ三十七年度ニハ六百十五馬力トナリ三十八年度ニ於テハ六百六十四馬

力ニ増加セリ隨テ製品モ亦良好ナルモノヲ出スニ至レリ

(六) 輸出額(三十八年末關)

清國	六四二、二四八
韓國	一〇九、一七〇
露領亞細亞	三七、一五六
英領印度	七〇、五五五
南洋諸島	四三八
計	八五九、五六八

(七) 販賣手續及販出品仕向地

特約店ヲ有スルモノ若クハ直接注文ニ應ジテ販出スルモノ、外ハ多ク阪神居留外商又ハ大阪市雜貨貿易商ノ手ヲ經テ販賣シ仕向地ハ韓國、清國、香港、海峽殖民地等トス

(八) 荷造法及其費用

化粧石鹼ハ百打以上三百打迄ヲ木製函ニ入レ洗濯石鹼ハ二十本ヲ木製函入トナス其費用一圓五十錢乃至二圓トス

(九) 商況其他

清韓共ニ化粧石鹼ヲ多ク需要スレトモ三十八年ニ於テハ韓國ハ洗濯石鹼ハ前年ニ比シ増加セシガ化粧石鹼ハ却テ少セリ而シテ印度向ノ好況ナルト同時ニ新ニ南洋ニ販路ヲ擴張セリ

元來清國人ハ食物油濃キモノヲ好ムガ故ニ酒食ノ前後ニハ必ズ洗面洗手ヲナシ又婦人ハ常ニ厚化粧ヲナスガ故ニ一般ニ石鹼ノ需要多ク古昔ヨリ胰子肥皂ナル一種ノ石鹼アリシヲ近時輸入石鹼ノ便益ナルヲ知リ之ガ需要ヲ増加セリ今

清國ニ於ケル我石鹼ノ欠點ヲ上ゲテ參考ニ供セント欲ス

- (一) 曹達ト鹽分トノ使用多クシテ夏日ニ至リ支那人ノ最モ忌ム灰ト稱スル白キ吹出物ヲ生ズルコト
- (二) 乾燥ノ結果形體ヲ變ズルコト
- (三) 香料ヲ用ユルコト少ク又ハ粗惡ノモノヲ用キル爲メ香氣ヲ變ズルコト
- (四) 著色不良ナル爲メ洗濯物ニ汚染スルコトアリ
- (五) 包裝ノ不體裁不完全ナルコト
- (六) 容器ハ石鹼取除後再ヒ他ノ用ニ供シ得ザルコト等ヲ以テ主ナルモノトス此他色合及商標其他一般ノ嗜好ヲ充分研究スルヲ要ス

(十) 重ナル製造者

大阪市	春元重助	半田寅之助	由利岩藏
	野々村庄太郎	合資仁壽堂	萩原辰藏
	稻葉潤吉	今井楠太郎	尾崎清三郎
	日野文次郎	家村松藏	柏組石鹼工場
中河内郡龍華村	村井石鹼製造所		

(十五) 「タオ」ル

(一) 産額

三十四年

數量

價額

二四、〇七七

大阪府

三十五年	?	三四〇、五五一
三十六年	?	五六〇、七四三
三十七年	五三八、四三五	四三三、四二〇
三十八年	一、〇二〇、一七九	六七三、八九〇

(二) 主要産地

大阪	市	泉	南	郡
----	---	---	---	---

(三) 製造戸數及職工數(三十八年)

	製造戸數	職工數
工場	三五 _戸	六一九 _人
家内工業	一八	八〇
織業	五五	一六三
賃業	六〇二	一、〇三三
計	七一〇	一、八九五

(四) 製産狀況

從來手工の小製造家多カリシガ近時製織方法ヲ練習シ或ハ織機ヲ購入シ職工ヲ雇入レ若々製産額ヲ増加シ、アリ而シテ一年中製産繁忙ノ期ハ三、四及九、十ノ四ヶ月ニシテ二月及八月ハ一般ニ閑散ナリ

(五) 原料ノ供給

原料ハ二十手乃至十二手ノ綿糸ニシテ鐘ヶ淵、攝津、合同等諸紡績會社ノ製品ヲ用ユ

(六) 製産費及收益ノ比較

府下主要産地泉南郡ニ就キ調査スルニ左ノ如シ

原料	料(百目ニ付)	二三五 _円
賃	錢	四五
仕上糊代等		五
計		二八五
賣上金		三〇〇
差引益金		一五

(七) 荷作方法

大抵神阪兩地商人ノ手ヲ經テ輸出スルモノナルガ故ニ繩ヅノ儘汽車ニテ送ルヲ常トス然レトモ上海、香港等ニ送ルモノハ堅二尺四寸横一尺七寸深三尺三寸ノ箱ニ一百打ヲ詰メ一梱トス

(八) 販出品仕向地

韓國、支那、香港、印度及南洋地方

(九) 輸出狀況(三十八年)

「タオル」ハ織物稅ノ賦課ヲ免レタルガ故ニ日露戰爭前ハ頗ル活氣ヲ呈シ輸出狀況亦頗ル好調ナリキ然ルニ「バルチツク」艦隊東航ノ途ニ上ルヤ輸出ハ茲ニ一頓挫ヲ招キタリ然レトモ内地ノ商勢盛ナリシカバ此難局ヲ切抜クルコトヲ得タリ斯クテ日本海ニ於ケル皇軍ノ大捷以來内外市場ノ需要頓ニ増加シタルニ乘ジ各地ノ木綿織業者ハ「タオル」ニ轉業スル者多ク隨テ製造過剩ノ現象ヲ見ルニ至リ殊ニ原料騰貴ノ爲メ不引合ノ狀態ヲ呈セントセシモ輸出殊ニ北清及上

海ニ於ケル需要増加ノ爲メ何等之ガ爲メニ影響ヲ受クルコト無クシテ益々好況ヲ呈シタリ然ルニ十一月以降ハ内外共ニ其需要ヲ減退シテ稍ヤ不振ノ現象ヲ示シタリキ

(十) 相場 三十八年一月ヨリ十二月ニ至ル「タオル」相場ヲ示セハ左ノ如シ

年次	尺		全		全		尺		年次
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	
一月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	一月
二月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	二月
三月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	三月
四月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	四月
五月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	五月
六月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	六月
七月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七月
八月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	八月
九月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	九月
十月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	十月
十一月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	十一月
十二月	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	十二月

(十一) 海外ノ嗜好及商況

韓國ニ於テハ移住邦人ノ需要多クシテ韓人間ニモ好評アリ實用外觀共ニ備ハラザル可ラザルハ云フ迄モナキ事ニシテ清國ニ於テハ湯又水ヲ含ムコト多ク且一度熱湯ニ浸シテ後長時間温度ヲ維持スルノ特長アルガ爲メニ本邦「タオル」

ハ諸外國製ヲ壓スルノ傾アリ最モ多ク清人ノ需要スルモノハ尺一モノニシテ尺一物ノ如キモ上等二百二十乃至二百三十寸ノ目方ヲ下スコトナケレバ其聲價ヲ失墜スルコトナカルヘシト云フ

(十二) 改良ス可キ點

- (一) 晒ヲ改良スルコト
 - (二) 尺巾寸法ヲ一定スルコト
 - (三) 色糸ノ善良ナルヲ用ユルコト
 - (四) 原糸ヲ一定スルコト
 - (五) 品質ヲ等一ニスルコト
- 等ヲ以テ主ナルモノトス

(夫) 寒天

(一) 産額	數	價	額
三十四年	一三七、八四三	五六〇、三二六	
三十五年	一一一、〇六〇	四三一、七一	
三十六年	一一一、四九四	四三五、三一五	
三十七年	一一三、八一六	四〇七、五五二	
三十八年	一二五、六三九	四七四、五三八	

備考 本表ノ年度ハ其年四月ヨリ翌年三月ニ至ル一ケ年度ナリ

三十九年(曆年度)中ニ於ケル釜數ハ百九十三個半ニシテ一釜ノ原料焚量ハ二千貫ナルガ故ニ同年中ノ原料使用高ハ三十八萬七千貫ニシテ之ヲ三十八年(曆年度)ニ比スレハ四萬七千貫ノ減少ナリ三十九年ニ此ノ如ク減退セルハ氣候ノ不良ナリシニ由ルナリ而シテ生産額ハ原料使用高ノ約四分ノ一ナルカ故ニ同年中産額ハ約九萬六千七百五十貫ナリト云フ

(二) 種類

角 寒 天 細 寒 天

(三) 産地

三 島 郡 豊 能 郡

(四) 沿革

寒天ハ既ニ維新以前ニ於テ清韓地方ニ輸出セラレタルモノニシテ大阪府下ニ於ケル本業ノ起源ヲ尋ヌルニ天明七八年頃今ノ三島郡原村富田半平ガ山城國人ヨリ傳習シ郷里城山ノ溪谷ニ於テ試製シ漸次之ヲ傳播シタルニ濫觴スト云フ爾來製造家増加シ器具及製法ニ改良ヲ加ヘ品質改良等取締ノ必要ヲ感シ株制度ヲ採用シテ大阪城内勤町人ノ一人タル尾崎又右衛門ヲ取締役トシテ斯業ノ全權ヲ委任シタリ豊能郡東能勢村宇津呂徳太郎ノ先祖ハ此時ヨリ現今ニ至ルマデ之ガ製造ヲ繼續セリ而シテ此時既ニ八軒問屋ナルモノアリ長崎ヨリ輸出ヲナシタリト云フ後天保三年三十餘株ヲ増加シテ百株トナシ慶應年間國內動搖ヲ來タシ爲メニ輸出ニ影響セリ而シテ之ガ製産モ三分一ニ減退シ細寒天ハ一時中絶ノ姿トナレリ然ルニ維新改革ノ結果産業自由トナルヤ株制ハ瓦解シテ貿易再興ノ機運ニ向ヘリ且政府ニ於テ明治三年通商司ヨリ資金ヲ貸與セシカバ著シク製造家ヲ増加シ翌年ニ於テハ未曾有ノ盛況ヲ呈シ其販路ハ歐米ニモ擴張セラレ

タリ然ルニ六年政府ノ保護策ヲ中止スルアリ斯業一頓挫ヲ來タシ休業轉業廢業者續出シ十四年頃再ビ形勢回復スルヤ製業者増加ト共ニ砂石貝殻等ノ粉末ヲ混入シ或ハ水分ヲ含有セシムル等種々ノ惡計ヲ以テ量目ノ増加ニ勉メ又信用地ニ墜チ容易ニ回復スル能ハザリシガ十九年共進會ヲ開キ而シテ京都、兵庫ト連合シテ組合ヲ組織シ大ニ改良進歩ニ勉メシカ三十年頃ヨリ天候不良ニテ殊ニ三十四年經濟界ノ動亂ハ多クノ廢業者ヲ出スニ至リ翌年又天候不良ニテ腐敗セシメ大ニ製造額ヲ減セリ三十三年重要物産同業組合法ニ基キ定款ノ認可ヲ經テ着々發達改良ニ向テ設施シツ、アリ

(五) 製造戸數及職工數

年	次	製造戸數	釜數	職工數
三十四年	年(自四月至翌年三月)	一七一	三四〇	?
三十五年	年(全)	一六四	二九三	?
三十六年	年(全)	一五三	三〇二	?
三十七年	年(全)	一四九	二九八	一、六二九
三十八年	年(全)	一四三	二六三	一、四九三

(六) 製産狀況

府下ニ於ケル寒天製産ノ情况ハ製造者ト貸焚者トニ分カレ其數伯仲ノ間ニアリ二者共ニ問屋ノ下職ニシテ製造者ト稱スルモノハ自ラ原料ヲ購入シテ之ガ製産ヲナスト雖モ直接自ラ海外ニ輸出スル者無ク皆特約ノ問屋ニ賣却ス而シテ貸焚ニ至ツテハ總テ問屋ニ原料ノ供給ヲ仰ギ其注文量ヲ製造シテ賃金ヲ得ルモノニシテ府下ニ於ケル農家副業中ノ大ナルモノナリ

職工ハ豊能郡ノ如キハ丹波地方ノ經驗アルモノ及地方勞働者ヲ雇入レ此勞働者ハ八月ヨリ十二月迄ハ毎日午前七時

ヨリ午後五時ニ至ル晝間及夜業二時間従業セシメ十二月下旬ヨリ三月ニ至ルマデハ午前八時ヨリ午後五時迄及夜業二時間従業セシム但シ日曜ハ夜業ヲ廢シ祭祝日ニハ休業ス

寒天ハ大抵冬至前十日頃ヨリ焚キ初メ六十日間自然ノ天候ヲ應用シテ製造スルモノナルガ故ニ一度天候不良ナランカ彼等ニ大恐慌ヲ來タスモノナリ三十七年末ヨリ三十八年ニ於テハ著シク此現象ヲ示シタルコトアリ去レバ産額ノ如キ年々不同ニシテ洩資者ノ如キ之ガ爲メ破産ノ不幸ヲ招クコトアリ然ルニ近年製造費増加シ且原料ノ價格騰貴ノ爲メ製造業者ハ困難ヲ感ズルコト甚シク爲メニ賃焚者ニ轉ズルモノ尠ラスト云フ

(七) 原料

原料タル海藻ハ紀伊、志摩、佐渡、能登、伊豆、土佐、五島等ニ産シ尙ホ伊豫、豊後、喜灣、北海道、朝鮮等ニモ産出ス之ガ供給ヲ直接ニナスハ大阪、神戸ニシテ其主ナル問屋ハ神戸池田寛兵衛、大阪中村治兵衛ニシテ今三十七年中ニ於ケル豊能郡原料需要高ヲ聞クニ左ノ如シ

伊豆	三三、六二六
臺灣	一三、三五〇
韓國	二一、四〇〇
紀州	二六、二七五
北海道	五、三二〇
土佐	七、三八〇
房州	一三、〇三〇
佐波	一、二〇〇

日向	七、五〇〇
志摩	六、六〇〇
支那	五、〇〇〇

(八) 販出額

今大阪港ヲ經テ海外ニ輸出シタル額ヲ調査スルニ左ノ如シ

三十七年	數	量	價	額
三十七年	一七四、八四四	斤	一一三、八五八	斤
三十七年	二九三、三二一		一九八、四〇六	
三十八年	二七六、七一四		一七八、九二八	

此外神戸港ヨリ輸出スルモノ、中ニモ大阪府下ノ産品多シト雖モ明確ナル計數ヲ知ルコト困難也參考ノ爲メ同港最近ノ輸出額ヲ見ルニ左ノ如シ

三十六年	數	量	價	額
三十六年	一、〇六一、六〇九	斤	五八四、二六三	斤
三十七年	一、二七六、一六六		六七七、六八四	
三十八年	一、一七八、六七四		六一一、一六八	

主ナル輸出先ハ香港、支那、獨逸、海峽殖民地、英國、蘭領印度、北米合衆國、英領印度等ニシテ就中支那、香港最モ多シ

(九) 販出手續及取引習慣

大阪府

既ニ述ベタルガ如ク問屋ノ注文ニ應ジテ製産シ又ハ之ニ賣込ミヲ爲スニ外ナラズシテ別ニ輸出上ノ手續ト稱スベキモノナシ商權ハ一ニ問屋ノ掌中ニ在リ

(十) 相場

時々變化スルモノニシテ原料ノ價格ノ變遷及ビ自然天候ノ如何ニヨリ價格ニ變動ヲ來タスコト最モ多シ一ヶ月中ニテモ上中下各差アリ近年ノ相場表ヲ上グレバ左ノ如シ

角 寒 天 (千本ニ付)	三十七年	三十六年
特別品(内地向)	十二圓	?
一等品(全上)	十一圓	十二圓七十錢
二等品(全上)	十圓	十二圓
三等品(全上)	九圓	十一圓五十錢
細 寒 天 (百斤ニ付)		
特別品	歐洲向 七五 _円 支那向 七二 _円	歐洲向 七八 _円 支那向 五五 _円
一等品	七二	七三
二等品	六五	六五
三等品	六一	六〇

(十一) 製造費及收益勘定

今三十九年ニ於ケル一般收支ノ表ヲ示シ以テ前者ト相對シテ收益勘定ノ參考トス可シ固ヨリ本業ノ如キハ運賃、勞

働賃、原料其他ノ費用高低一樣ナラズ殊ニ賃金ノ如キハ組合ヨリ一定ノ標準ヲ示スト雖モ舊習ハ容易ニ之ヲ改メ難ク互ニ競争シ賃金ヲ規定外ニ興フル能ハザレハ心附ケ等ヲ出シ又ハ飲食物ニ於テ勞働者ヲ厚遇スル等ノ事アルガ故ニ明細ニ之ヲ勘定スルコトハ困難ナリト雖モ今大要ヲ示サン

一釜ニ付

職 工 賃 (一釜六人ノ職工ハ毎日之ヲ要ス)

晒シノ部	頭 領	十八 錢	二十一 錢
	下働キ男工	十六 錢	以 下
	全 女 工	十二 錢	以 下
寒天ノ部	頭 領	二十二 錢	二十五 錢
	下働キ男	十九 錢	二十二 錢
日傭人夫 (平均一日六人トス此ハ半日ノモノアリ終日ノモノアリ又時ニ不雇ノ日アリ故ニ之ガ平均六人ト見ル) 女工小兒多シ	一 人 分	十五 錢	以 下

此外食物ハ傭主ノ負擔ニシテ一日五回給ス 十 錢 以 十五 錢

原 料 (十貫八圓五十錢位)ノ外荷造費、運賃等ヲ要スルモノ々掲記シ難シ

收入ハ賃焚者ハ問屋ガ製品ヲ賣却シテ原料ヲ差引殘金ト稱スルモノヲ皆渡ス自焚者ハ賣込ヲナシ一釜ニ付寒天糶 (乾)四貫アリ一貫代金(賣價)三十錢即一圓二十錢ノ副收入アリ

尙之ガ精細ヲ調査センコトハ頗ル困難ナル事ニ屬スルガ故ニ今賃焚業者其大部分ヲ占ムル豊能郡全體ニ就キ同業者

ノ算出セルモノヲ示セバ左ノ如シ

原料費	一二、二四〇、〇〇〇 ^円
支出 薪炭等諸費	一九、五八一、〇〇〇 ^円
職工賃	一〇、九七九、六〇〇 ^円
製造賃金	四五、三八〇、〇〇〇 ^円
塞天精金	五二二、〇〇〇 ^円
計	四五、八九〇、〇〇〇 ^円
差引	三千九拾一圓四十錢
純益	

而シテ三島郡ニ於テハ製造業者多キガ故ニ其收支計算表ヲ舉ゲテ以テ前者ト相對シ大體ノ參考ニ供セント欲ス

原料費	三一、六〇五、〇〇〇 ^円
賃金	一三、五七三、〇〇〇 ^円
荷造費	九、〇二一、〇〇〇 ^円
運搬費	二、七〇六、〇〇〇 ^円
諸雜費	七、六六二、〇〇〇 ^円
差引	二二三、二二八、〇〇〇 ^円
賣價	二八七、七九五、〇〇〇 ^円
差	角 寒天 九、一二〇、〇〇〇 ^円
	角 寒天 二七八、六七五、〇〇〇 ^円

(十二) 改良ヲ要スル點

天候不良ノ爲メ腐敗スルコト夥シキガ故ニ自然力ニ依ル事ヲ經減スル方法ヲ案出スルハ第一ノ急務也曾テ藥品防腐劑ヲ製シ試用シタレトモ其効ナシト云フ尙冷藏庫ヲ應用スルコトハ未ダ經驗ナシト雖モ寒天ハ唯冷氣ヲ要スルニ止ラズ日光ヲ必要トスルガ故ニ之ガ實行困難ナルヘント云フ而シテ大仕掛ノ製造出來ザルハ現下ノ如キ原料供給ノ状態ニ在ツテハ到底價格ヲ上騰セシメスシテハ之ガ十分ナル供給ヲ得ルコト能ハザルカ故ニシテ此後ニ於テモ依然農家ノ副業ニ止ラント云ヘリ

(十三) 荷造法及運賃

各商店及距離ニヨリ異ナレトモ大抵輸出向製品ハ四十匁ヲ一把トシ赤色綿絲ヲ以テ兩端ヲ結び四十二把ノ方形ニ結束シタルモノ三束ヲ合セテ一本ト稱シ間屋ニ送り間屋ハ更ニ百斤ヲ方形ニ結束シ琉球苳ヲ以テ包裝シ十六貫目即約十三才ノ容積トナシテ輸出スルモノトス荷作費ハ八拾六錢ヲ要ス而シテ製造業者ノ賣込ヲナスモ四十匁ヲ赤紐ニテ束ネ一束トシ百二十六束ヲ一本トス此ガ荷作費一圓トス運賃ハ三島郡中最不便ノ地見山村ヨリ賣込一本ニ付二十錢ニシテ輸出向ハ一本ニ付神戸マテ二十四錢大阪マテ十五錢トス

(十四) 主ナル製造者及取扱商人

- 府下主ナル製造者 (○印ハ職工二十人以上ヲ使役スルモノ)
- 井上榮太郎 乾 福 松 原田富太郎 中村治三郎
 - 吉岡鹿次郎 入江嘉一郎 大植清登 平田治三郎
 - 宮井丑松 ○川上歌五郎 福岡彌治郎 高谷傳二郎
 - 氏原太郎吉 森 小平 川上嘉左衛門 ○宮田寅次郎
 - 橋本爲次郎 ○和田常七 ○元古小平次 大島盛次郎

ノ算出セルモノヲ示セバ左ノ如シ

原料費	一二、三四〇、〇〇〇 ^円
支出 薪炭等諸費	一九、五八一、〇〇〇 ^円
職工賃	一〇、九七九、六〇〇 ^円
製造賃金	四五、三八〇、〇〇〇 ^円
塞天精金	五二二、〇〇〇 ^円
計	四五、八九〇、〇〇〇 ^円

差引 三千九拾一圓四十錢 純益

而シテ三島郡ニ於テハ製造業者多キガ故ニ其收支計算表ヲ舉ゲテ以テ前者ト相對シ大體ノ參考ニ供セント欲ス

原料費	三一、六〇五、〇〇〇 ^円
賃金	一三、五七三、〇〇〇 ^円
荷造費	九、〇二一、〇〇〇 ^円
運搬費	二、七〇六、〇〇〇 ^円
諸雜費	七、六六二、〇〇〇 ^円
賣價	二八七、七九五、〇〇〇 ^円
差引	二二三、二二八、〇〇〇 ^円

(十二) 改良ヲ要スル點

天候不良ノ爲メ腐敗スルコト夥シキガ故ニ自然力ニ依ル事ヲ經減スル方法ヲ案出スルハ第一ノ急務也曾テ藥品防腐劑ヲ製シ試用シタレトモ其効ナシト云フ尙冷藏庫ヲ應用スルコトハ未ダ經驗ナシト雖モ塞天ハ唯冷氣ヲ要スルニ止ラズ日光ヲ必要トスルガ故ニ之ガ實行困難ナルヘシト云フ而シテ大仕掛ノ製造出來ザルハ現下ノ如キ原料供給ノ狀態ニ在ツテハ到底價格ヲ上騰セシメスシテハ之ガ十分ナル供給ヲ得ルコト能ハザルカ故ニシテ此後ニ於テモ依然農家ノ副業ニ止ラント云ヘリ

(十三) 荷造法及運賃

各商店及距離ニヨリ異ナレトモ大抵輸出向製品ハ四十匁ヲ一把トシ赤色綿絲ヲ以テ兩端ヲ結び四十二把ノ方形ニ結束シタルモノ三束ヲ合セテ一本ト稱シ間屋ニ送り間屋ハ更ニ百斤ヲ方形ニ結束シ琉球苳ヲ以テ包裝シ十六貫目即約十三才ノ容積トナシテ輸出スルモノトス荷作費ハ八拾六錢ヲ要ス而シテ製造業者ノ賣込ヲナスモ四十匁ヲ赤紐ニテ束ネ一束トシ百二十六束ヲ一本トス此ガ荷作費一圓トス運賃ハ三島郡中最不便ノ地見山村ヨリ賣込一本ニ付二十錢ニシテ輸出向ハ一本ニ付神戸マテ二十四錢大阪マテ十五錢トス

(十四) 主ナル製造者及取扱商人

府下主ナル製造者 (○印ハ職工二十人以上ヲ使役スルモノ)

○井上榮太郎	乾福松	原田富太郎	中村治三郎
吉岡鹿次郎	入江嘉一郎	大植清登	平田治三郎
宮井丑松	○川上歌五郎	福岡彌治郎	高谷傳二郎
氏原太郎吉	森小平	川上嘉左衛門	○宮田寅次郎
橋本爲次郎	○和田常七	○元古小平次	大島盛次郎

大阪府

小林清次郎 ○本阪治三郎
 抱辨次郎 古川重助 淺田孫七 ○中村庄太郎
 ○中村豐次郎 中村治兵衛 松下彦兵衛 田中四郎左衛門
 ○堀内重藏 ○小林要助 ○加藤甚助 ○和田常七
 ○中村久吉 ○國鹿清右衛門 齋藤彦次郎
 輸出業者
 桑田松二郎 下村商店 森寄福松 山本三郎
 野々村彌助 小菅善兵衛 五百井清右衛門 谷口商店
 山縣勇三郎 景山商店 今枝捨市 神木彦三郎
 中盛恒 斗永 豐記 同太和
 永平徳 天祥益

(七) 双物

(一) 産	品名	數量	價額
三十五年	諸 鉢 類	一、二二九、七六九	一四七、五七二、二八
	諸 庖 刀	一、二三一、七六九	一七二、四四七、六六

年	品名	數量	價額
三十六年	諸 鉢 類	一、二〇二、四四〇	一六二、三三九、四〇
	諸 庖 刀	一、二六四、六二〇	一八九、六九三、〇〇
計		二、四六七、〇六〇	三五二、〇二二、四〇
三十七年	諸 鉢 類	一、二〇七、四一〇	一三二、八一五、一〇
	諸 庖 刀	一、一九三、八七〇	一五五、二〇三、一〇
計		二、四〇一、二八〇	二八八、〇一八、二〇
三十八年	諸 鉢 類	一、〇九三、三六〇	一四七、六〇三、六〇
	諸 庖 刀	一、〇七七、八〇〇	一七二、四四八、〇〇
計		二、一七一、一六〇	三二〇、〇五一、六〇
三十九年	諸 鉢 類	一、一〇七、〇三〇	一七七、一二四、八〇
	諸 庖 刀	一、〇三四、六七八	二〇六、九三七、六〇
計		二、一四一、六九八	三八四、〇六二、四〇

備考 大阪市産額ハ不明ニ付茲ニハ堺市ノミノ産額ヲ掲ケタリ

(二) 種 類 庖 刀、 鉢、 其 他

(三) 主要産地

堺 市 大 阪 市 大 阪 府

(四) 事業沿革

舊記ヲ案ズルニ大阪府下ノ利器ハ其沿革頗ル遠ク元龜、天正ノ時代ニ於テ刀劍名工梅ヶ枝七郎右衛門、本出長兵衛等輩ニ出テ寛永、元祿ニ至リテハ山ノ上文珠四郎、鍛冶仲間亦大阪ニ在リ此時堺ノ打刃物ノ如キハ全國特有ナリシ也當時ニ在リテハ固ヨリ之ガ製産高ニ關スル記録ヲ存セズト雖モ寶曆年代堺奉行ノ調査セル堺商工業人員録ヲ閱スルニ庖刀打物鍛冶百三十三戸ニシテ之ガ專業ノ販賣商モ二十四戸ト算セラレタリ爾來幾多ノ變遷ヲ經テ明治維新ニ入り産額増加セリ然ルニ明治十七八年頃海外輸出ノ途開ケ一時清韓地方需要好況ヲ呈スルヤ製造者勃興シテ競争ノ結果粗製濫造ノ弊ヲ生シ遂ニ全ク其販路ヲ失フノ悲境ニ陥リシカバ明治三十七年大阪、堺兩市ノ同業者相集リテ同業組合ヲ組織シ之ガ改善進歩ヲ計レリ先是堺市ニ於テハ舶來模造鉄ノ製造等ヲナスモノアリ近時稍ヤ其面目ヲ一新セントス

(五) 製造戸數及職工數

四百五十四戸、家内工業ナリトス故ニ職工ハ各自宅ニ於テ從業ス

(六) 製産狀況

日露戰爭ノ影響ヲ被リ人氣沈靜原料騰貴及職工ノ從軍又ハ砲兵工廠ニ雇入レラレタル等ノ爲メ製品販賣渺々シカラザリシガ戰捷ノ快報頻々タルト共ニ世上人氣引立テ其後三十九年中モ引續キ好況ノ狀態ニアリタリ

製造家ハ大工業的施設ニヨリ産出スルモノナク皆舊法ニ依リ十人以上ノ職工ヲ使用スル者極メテ尠ク依然タル家内工業タリ戰爭ノ結果職工大ニ減シ不足ヲ感シ居レリ三十九年中ニ於ケル職工賃金左ノ如シ

上 九十錢 中 七十五錢 下 六十錢

(七) 原料ノ需要供給

原料ハ和鐵、洋鐵、故鐵及鋼ヲ用ウ鐵ハ内地ニテハ出雲、伯耆等ノ産、輸入品ハ瑞西國産ヲ第一トス之ガ供給ハ別ニ難

(八) 易ナク堺、大阪ノ鐵商ヨリ製造家直接ニ購入ス製産費及收益

種 類	原 料 費	工 賃	合 計	收 入	差 引 利 益
菜 切	一〇〇	二〇	一二〇	一三〇	一〇
出 切	一六〇	二〇	一八〇	二〇〇	二〇
鉄 切	七〇	二〇	九〇	一〇〇	一〇

以上ハ一本ニツキテノ計算ナレトモ今之ヲ大阪市ノ總産額ニ就テ見ルニ是ガ荷作りヲ終ル迄ニ於ケル一切ノ製産費ヲ收益中ヨリ控除シタル計數ハ次ノ如シ

原 料 費 (鐵鋼代)	八、〇八九
職工及人夫賃	一五、五〇〇
木炭コークス砥石費	三、八〇〇
外装レツテール費	二一〇
箱 代	一三〇
荷 造 費 (繩葎及手間賃)	一一〇
計	二八、八三九
賣 上 代 金	三〇、九七五
差 引 益 金	二、一三六

(九) 相 場

大阪府

三十九年中ニ於ケル本品平均相場ハ左ノ如シ

	内地向	輸出向
菜切	一三	一四
出及	二〇	二一
鉄	一〇	一一

(十) 販出額及仕向地(三十八年)

内 國	十八萬〇九百〇三圓
外 國	三萬八千二百〇七圓
北 海 道	四千八百圓
東 海 道	一萬四千四百七十五圓
信 濃 道	三千三百圓
山 陽 道	三千七百五十圓
西 海 道	五千二百五十圓
四 國	三千八百圓

外國ニテハ韓國及清國ヲ主トシ米國ニモ多少ノ輸出アリ

(十一) 荷作法等

各製品ヲ油紙ニテ包ミ又ハ小箱ニ入レ之ヲ大抵石炭空箱ニ入レ庖刀ノ如キハ約二百個ヲ詰メ堺ヨリハ氣車便ニヨラ
 ス仲仕ヲシテ大阪ニ運搬セシム石炭空箱ハ一個十錢乃至十二錢ニシテ運賃ハ一箱堺ヨリ大阪迄十錢位ナリ(仲仕一人

ニテ十乃至十五個運搬ス)故ニ堺ニ於テハ一箱ノ荷作費十五錢内外トス

(六) 緞 通

(一) 産 額
 最近十箇年間ニ於ケル府下ノ緞通産額ヲ擧クレハ左ノ如シ

年	數	價	額
三 十 一 年	?	一、二〇〇、〇一四	九三九、一五〇
三 十 二 年	?	一、〇〇六、二九四	一、七三九、三五四
三 十 三 年	九六〇、一六三	一、七三九、三五四	七一五、〇〇九
三 十 四 年	四二六、六二六	一、一〇六、三六四	一、〇一〇、一五一
三 十 五 年	六一九、三四五	一、〇一〇、一五一	三七八、七〇六
三 十 六 年	六〇九、九一八	一、〇一〇、一五一	二四〇、四五七
三 十 七 年	?	?	五三二、四六五
三 十 八 年	?	?	
三 十 九 年	三八四、〇四八	?	

備考 一疊トハ長六尺幅三尺ヲ云フ

外國トノ取引ハ間接取引ニシテ神戸港及横濱港ニ於ケル左記ノ商館ニ賣込ミ該商館ヨリ各其本國へ輸出セリ

全	神	戸	五十二番	シングルトン、ベンダ商會
全			四十六番	セーブル商會
全			五十五番	野澤組支店
全			六十三番	シウアン、トウムス商會
全			百十八番	ウ非トコースキ商會
全			七十三番	スタツチポリー商會
全			百廿一番	デラカンゾ商會
全			二十八番	ヲツペネメール商會
全			九十三番	カメロン商會
全			二十番	ルカス商會
全			五十四番	サミユル商會
全			二十二番	タスカ商會
全			百番	ウインクレル商會
全			四十九番	ボラツク商會
全			九十九番	米國貿易商會
全			四十番	ウヲルシ商會
全			三十一番	ベツカー商會

全 三 番 スミスベーカー商會

(六) 原料需要供給ノ状況

品名	産地	價	格
木綿糸	個人營業三河産	拾	並上
全 太糸	大阪府東成郡平野郷町地方手紡糸	全	壹圓貳拾
全 績糸	大阪市平野郷堺市岸和田各紡績會社製	全	壹圓貳拾
全 績糸	兵庫縣菟原郡都ヶ濱小泉合名會社製	全	壹圓貳拾
全 績糸	印度及米國輸入ノ「ツェット」即米穀其他ノ古袋解糸	壹	八圓貳拾
全 績糸	大阪府南區西濱町個人營業	全	四圓貳拾
全 績糸	不詳	全	貳圓貳拾
全 績糸	獨逸ハイエル社製	壹	九圓貳拾
全 「マゼンタ」		全	壹圓貳拾
全 「ダーリ、ブリウ」		全	貳圓貳拾
全 「ブリウ、エキストラ」		全	貳圓貳拾
全 「シカゴ、ブリウ」		全	貳圓貳拾
全 「ダイネット、ブリウ」		全	貳圓貳拾
全 「マラカイト、グリーン」		全	貳圓貳拾
全 「グリーン、スター」		全	貳圓貳拾
全 「アシト、グリーン」		全	貳圓貳拾
全 「オーラミン」		全	貳圓貳拾
全 「メタニ、エルロ」		全	貳圓貳拾

大阪府

全「クリソフエニジ」	全		全	上	壹圓五拾錢
全「アルジラ、バイラレット」	全		全	上	壹圓五拾錢
全「アシド、バイラレット」	全		全	上	壹圓五拾錢
全「ビスマック、ブラオン」	全		全	上	壹圓五拾錢
全「アシド、ブラオン」	全		全	上	壹圓五拾錢
全「コンゴツ、ブラオン」	全		全	上	壹圓五拾錢
明礬	支那		全	上	壹圓五拾錢
硫酸	内地		全	上	壹圓五拾錢
硫酸銅	地産		全	上	壹圓五拾錢
全「コロウルカルキ」	全		全	上	壹圓五拾錢

百四

綿段通ノ附糸(即チ毛持)ニ細糸、太糸ノ二種アリ其細糸ハ三河國長良川、矢矧川ノ兩川沿岸ニ水勢ヲ利用シ水車機械ニテ個人ノ製産ニ係ル綿糸ニシテ俗ニ三州糸又ハ三河糸ト稱スルモノヲ使用ス而シテ其最良品ヲ魁印ト云ヒ次ヲ上白又ハ中白ト云フ紡績糸ノ如ク綴ニセリ段通ニ適當ノ糸質ナリ

又太糸ハ大阪府東成郡平野郷町地方ニテ専ラ製産スル手引糸ヲ用フ原質ハ紡績ノ落綿ヲ以テ手紡トナシタル糸ニシテ之ニ二種アリ其上等品ハ専ラ紡績ノ落綿ノミヲ以テ製シ下等品ハ内地ノ古綿ヲ混交シテ製シタルモノナリ何レモ段通ニ適當ノ糸質ナリ

綿段通ノ緯糸ハ前項ノ太糸ヲ四合撚乃至六合撚トシテ使用スルヲ通例トス注文ニヨリ麻ヌキト稱シ麻太糸ヲ三合撚又ハ四合撚トシテ使用スルコトモアリ

麻段通ノ附糸(即チ毛持糸)ニモ亦二種アリ其上等品ニハ印度カルカッタ地方産麻紡績ヲ使用シ又ハ兵庫縣都ヶ濱村小泉合名會社製造ノ麻紡績糸ヲ使用スルコトアリ

其下等品ニ至リテハ俗ニ「ゴロス」糸ト稱シ印度地方ヨリ輸入スル米ノ古袋及ビ米國ヨリ輸入スル棉花ノ古袋ヲ解キ糸トナシ之ヲ使用スルナリ

麻段通ノ緯糸ハ主トシテ古袋ノ解キ糸ヲ使用スト雖モ時トシテハ麻紡績糸ヲ使用スルコトモアリ然レトモ斯ハ糸質強硬ニシテ密着シ難シ之ニ反シテ古袋ノ解キ糸ハ其質柔軟ニシテ毛持糸ト密着シ頗ル適合スルノミナラズ價格ノ點ニ於テモ甚シキ逕庭アリ

毛織段通ノ緯糸ハ綿糸ノ太糸ヲ三合若シクハ五合撚トシテ使用スルヲ通例トス絹及瓦斯系織段通ノ緯糸ハ綿糸ノ細糸即チ三河産ノ糸ノ六合撚糸ヲ二本若シクハ三本ヲ合撚シテ之ヲ用ユ

緯糸ハ總テ染色ヲ用ヒズ白色ノ儘之ヲ使用スルモ上等品ニ至リテハ地色ノ配合ニヨリ或ハ染工ヲ加フルコトアリ

經糸ハ總テ紡績綿糸二十手ヲ八合撚トシ之ヲ用ユルヲ通例トス然レトモ絹及瓦斯系織ノ如キハ紡績糸二十手ヲ十二合撚トシ之ヲ用ユルナリ

羊毛糸ハ概ネ大阪市南區西濱町及木津北島町邊ニ於テ棉花ヲ混交シテ手紡キトナスモノヲ使用スルナリ

羊毛糸及絹糸瓦斯糸ノ如キハ普通商人ノ手ヨリ購求スルモノニシテ其産地ハ明瞭ニ知ルヲ得ス

原料紡績糸ノ荷造リハ壹貫貳百目ヲ洋紙ニテ一包トナシ其拾貳包ヲ一括シテ一梱トナシ蓮包トナシアリ三河糸モ同様ナレトモ其中包ヲ省ケリ

(七) 製産狀況

本品ハ指頭ニテ編製スルモノナルヲ以テ工場ハ各自ノ家屋内ニ設ケ別段工場ト稱スル程ノモノナシト雖モ其工場トスル所ハ土間床ト稱シ地盤ノ上ニ板間ヲ張り直チニ機具ヲ据ヘ付ケアリ

職工ノ種類ハ男女ヲ通シ十歳以上三十歳以下ノモノ多シ今百人ニ對スル年齢ノ比例ヲ示セハ左ノ如シ

三十年以上	二十年以上	十五年以上	十年以上	十年以下
五人	十二人	四十八人	二十五人	十人

總テ段通ハ前述ノ如ク指頭ヲ以テ編製スル手藝品ナルヲ以テ最モ幼年ノ婦女子ニ適セリ故ニ年長者及男子ノ職工ハ鮮少ナリ

勞働時間ハ一定ノ制限ナキモ大約冬期短日ノ頃ハ九時間ニシテ春期長日ノ頃ハ十時間トス尤事業ノ繁忙ナル場合ニ於テハ夜業ヲ爲サシムルコトアルモ午後九時ヲ限リトセリ

祝祭日、年始、年末、毎月一日十五日ヲ休業トス故ニ一ケ年間勞働日數ハ凡ソ三百日トス賃金ハ左表ノ如シ

男			女		
上	等	下	上	等	下
貳拾八錢	貳拾錢	拾五錢	貳拾五錢	拾八錢	拾錢

段通製織ノ際其表面ヲ織リ揃ヘタル缺層ハ椅子又ハ革蒲團等ノ中入トシテ需要アリ其代價壹貫目五錢五厘位ニテ三十九年中ノ産額ハ約參萬五百貫ニ上レリト云フ

(八) 荷造方法

段通ノ荷造ハ通常一疊敷(幅三尺)ト稱スルモノヲ三ツ折トナシ其五拾枚ヲ以テ一括トス
段通五拾枚ヲ一括トシ防水布ニテ下包ヲナシ外包ハ「ドンゴロス」ト稱スル輸入米袋ノ布片ヲ以テシ兩端ヲ苧糸ニ

テ縫合シ上下ニ厚サ八分巾三寸長サ三尺ノ板ヲ一方ニ三枚ツ、都合六枚ヲ以テ之ヲ狹ミ鐵ノ帶金ヲ三ヶ所ニ卷キ鐵鉋ヲ以テ締ムルナリ

一捆ノ量目ハ大約五拾貫目乃至五拾五貫目ニシテ凡ソ十八才ナリ

其内地即チ神戸商館杯へ運搬スル荷造ハ五拾枚ヲ一括シ直チニ苧包トナシ繩ニテ三ヶ所ヲ括リ兩端ヲ繩ニテ縫合スルモノニシテ此ノ一捆ハ大約廿七才ナリ

(九) 運賃及諸掛

堺市ヨリ神戸港迄運賃一捆金參拾五錢保險料千圓ニ對シ壹圓貳拾錢「インボイス」其他諸費拾五錢ナリ同横濱港迄運賃金貳圓貳拾錢保險料金千圓ニ對シ貳圓八拾八錢「インボイス」其他諸費拾五錢ナリ

荷造費用ハ本荷造ハ一捆ニ付金七拾七錢五厘ヲ要ス其内譯左ノ如シ

- 古麻袋地三枚代 金參拾參錢
- 防水布大小二枚代 金拾六錢
- 袂板六枚代 金拾九錢五厘
- 帶鐵凡三百目代 金六錢
- 端縫苧繩四匁代 金壹錢五厘
- 中結貳代 金五厘
- 鐵鉋 金壹錢
- 内地向荷造ノ費用ハ一捆ニ付金貳拾壹錢五厘ヲ要ス其内譯左ノ如シ
- 苧三枚代 金拾八錢

本荷造及蕪包共當地ニテ船積迄ノ仲仕賃一捆ニ付金五錢神戸港及橫濱港ニテ水揚並ニ商館持込賃一捆ニ付凡金五錢ナリ

神 戶	百十三番	フワンタイン商會
全	五十一番	アブラハム商會
全	九十一番	ラスベ商會
全	七十番	ハウデン商會
全	元町一丁目	マツケー商會
全	三ノ宮	エブリール商會
橫 濱	百五十七番	チョートルマル商會
全	九十三番	クーン商會
全	六十番	アールホウショウ商會
全	十二番	ストローム商會

本品ノ海外ニ輸出セラル、ニ至リシ起因ハ米國商人ガ我橫濱及神戸ニ居留シ家屋ノ裝飾品ニ本品ヲ使用シタルニ始マリ其後米國開龍世界博覽會ニ出品シタルニ全國人ノ嗜好ニ適シ全國ヨリ前記商館ノ手ヲ經テ注文アリ因テ該商館ニヨリテ輸出ヲ試ミタルニ爾來逐年需用増加シ其後明治二十六年シカフ萬國博覽會ニ出品シテヨリ益々好評ヲ博シ一ケ年ノ輸出額殆ント貳百萬圓以上ニ達スルニ至レリ然ルニ我商人間ニ於ケル競争ノ結果粗製品ヲ出スニ至リ遂ニ本品ノ信用ヲ失ヒ明治廿八年ニ至リ忽チ一大頓挫ヲ來タシ輸出殆シト杜絶ノ姿トナリタリ因テ善後策ヲ講シ製品ヲ改良シタ

ル結果明治廿九年ニ至リ漸次復舊ノ期ニ越キタルニ明治三十年恰モ米國ノ關稅改革アリ苛重ナル輸入稅ヲ課セラル、コト、ナリタルヲ以テ我段通ハ忽チ賣價ニ大影響ヲ來タシ爲メニ再ヒ輸出杜絶ノ悲境ニ陥リ其現今ニ於テハ米國ヘノ輸出猶ホ曉天ノ星ノ如ク其ノ數極メテ僅少ナリ從來同國ヘノ輸出品ハ麻段通ナリシヲ以テ明治三十二年ニ至リ綿織段通ノ輸出ヲ試ミタルニ本品ハ麻段通ニ比シ關稅低廉ナルヲ以テ一時弗々輸出アリシモ本品ノ性質タルヤ麻段通ニ比スレハ柔軟ナルト高價ナルトヨリ漸次輸出ヲ減シ現時ニ於テハ全ク杜絶セリト云フモ不可ナキニ至リ又毛織段通ニ至リテハ原料ヲ海外ニ仰カサルヲ得サルト染法及模様圖案ノ拙ナルト米國關稅ノ苛重ナルトニヨリ土耳其及波斯産ニ壓倒セラレ我製品ハ輸出ノ望ミナシト云フ

英國ヘノ輸出モ米國ト一般神戸、橫濱兩港在留外商ノ手ヲ經テ前記商館ノ内ヨリ輸出スルモノニシテ其英國ヘ輸出スルニ至リシ起因ハ明治廿八年ノ頃米國ニ於テ一頓挫ヲ來シタルヨリ我段通ハ米國市場ニ堆積シタルヲ以テ米國人ハ之ヲ英國ヘ轉輸出シタルニ始マリ其粗製品ナルモ價格ノ廉ナルニヨリ英領加奈多トロント地方ヘモ販路ヲ開クニ至レリ而モ斯ノ如ク粗製品ノ投資ヲ以テ販路ヲ開キタルコトナレハ現今ニ至ルモ尙ホ全國ノ注文品ハ總テ廉價品ノミナリ隨テ一般ニ我段通ハ廉價ノ粗品ノミト思惟セル傾キアリ仍テ製品ニ改善ヲ加ヘ上等品ヲ輸出セント企ツル者アルモ全國ノ需用者ハ中等以下ノ人ノミニシテ寧ロ價ノ廉ナルモノヲ喜ビ品質ノ如何ヲ問ハサルモノノ如シ何トナレハ本邦製ノ上等品ニテ高價ノモノヲ購求センヨリハ寧ロ土耳其又ハ波斯品ヲ仰クニ如カサレハナリ然レトモ現今大阪府ニテ製造セラル、段通ハ主トシテ全國ヘノ輸出品ニシテ其内地又ハ他ノ外國ヘ仕向ケラル、モノハ僅ニ百分ノ一ニモ足ラサルナリ

(十) 輸出先キニ於ケル需用ノ狀況

本邦製段通ハ土耳其波斯産ノ如ク一種ノ美術品ト謂フヘキモノニ非サルヲ以テ生活ノ狀態高尚ナル英國ニ於テハ富

者即チ上流社會ニ珍重セラルヘキモノニアラス隨テ高價ノモノ、需要ナク彼ノ毛織絨氈ヲ購求ス可キ資力ナキ中等以下ノモノ、必需品トナレルカ如シ故ニ從來輸出セラル、モノハ單ニ堅牢ニシテ廉價ナルモノヲ主トセリ神戸、横濱等ノ外國商館ノ手ヲ經テ注文アルモ皆然リ

米國ニ於テハ我段通業者ノ第一ノ好得意地ニテ明治廿六年頃迄ハ年々多額ヲ輸出シタリシモ當業者眼前ノ小利ニ走り粗製品ヲ仕向ケ忽チ需用ノ途ヲ杜絶シ全國市場ニ本品ノ堆積ヲ見ルニ至リ一時我同業者ニ一大恐慌ヲ來セシコトアリ其後製品ヲ改良シ稍々恢復ノ途ニ就カントスルヤ明治三十年ニ至リ非常ニ高率ノ從價稅ヲ課セラル、ニ至レリ蓋シ此重稅ヲ課セラル、ニ至リシハ同國ニ於テ本品ト稍々同一ナル品ヲ製造スルニ至リタルヲ以テ之ヲ保護センカ爲メ本品ニ對シテ禁止稅同様ノ稅ヲ課セシ次第ニ本品ハ爾來殆ント同國へ輸出スルコトナキニ至レリ
元來米國ハ英國ト異ナリ中等以上ノ富家ノ需用多キニヨリ廉價ナル下等品ヲ好マス品質意匠染色ニ至ルマテ善良ニシテ高尚ナルモノヲ嗜好シタルモ前陳ノ如ク現今ニ於テハ輸出絶無ト云フモ不可ナキ狀態ニ陥レリ其他濠州又ハ南米諸國ニ於テハ注文品トテハナク神戸横濱ノ外商ノ手ヲ經テ仕入品又ハ各本國ニ於テ不向キノモノヲ轉輸スルニ過キザルナリ

(十一) 海外需用地ニ於ケル嗜好并ニ本品ノ缺點

英國ハ専ラ麻段通ヲ好ミ厚地ニシテ堅牢ナルヲ良シトス其配色ニ至リテハ濃赤色又ハ濃萌黃濃茶古金茶等ヲ好ミ模様ニ至リテハ花紋又ハ唐草類ニシテ寸法ノ小形ナルモノヲ主トシ其大形ナルモ幅四尺長サ七尺位ノモノナリ其小形ニ至リテハ幅一尺二寸長サ二尺三寸位ノモノヲ好メリ

英國向ハ形ノ大小ニ論ナク兩端ニ總ヲ附着シ整飾トナスナリ

米國ニ於テハ寸法ノ大形ナルヲ好ミ其大ナルハ幅十二尺長サ十八尺位ノモノ其小ナルモ幅三尺長サ六尺以上アリ配

色ニ至リテハ英國ト大差ナシト雖トモ模様ニ於テハ花鳥ノ如キモノヲ好ミ麻段通ノ上等品ニシテ堅牢ナルモノヲ好ム本品ノ欠點ハ染色不充ナルニヨリ褪色ノ恐レアルニ在リ然レトモ前陳ノ如ク廉價ヲ主トシテ製作スルヲ以テ之カ改善ハ困難ナリト云フ

又綿段通ノ如キハ座居ニ適スルモ立居ニ適セス是レ系質柔軟ナルヨリ靴ニテ踏ムカ如キニ適セサルヲ以テナリ是ヲ以テ外國向キニ適合セザルモ内地向キニハ需要多シトス

(十二) 需用地ニ於ケル本品需用ノ程度及將來ノ見込

英國ニ於ケル需用高ハ大約一ケ年貳拾八九萬ヨリ參拾萬疊ニシテ將來ニ於テモ現今ノ位置ヲ維持スルハ敢テ懸念ナカル可シト雖トモ尙ホ品質及染色ヲ改良セハ販路擴張ノ見込アリト云フ

米國ニ於ケル需要ハ大約一ケ年四五萬疊ニシテ將來ニ於テモ從價稅ノ減額ヲ見サレハ此類勢ヲ挽回スルコト難カルヘシト云フ

英米兩國ヲ除ク他ノ諸國ハ大約一ケ年貳參萬疊ナリ此ハ將來直輸出ヲ爲スニ至ラハ尙ホ大ニ増加ノ見込アリト云フ

(九) 帽子

本品ハ明治二十二年頃ヨリ漸次製造者ノ數ヲ増加シ此等ノ製造家ニハ歐洲ヨリ技師ヲ聘雇シテ銳意改善ニ勉メシ結果國民ノ需要増加スルト同時ニ嗜好モ漸次上等品ニ向ヒ殊ニ日清戰爭後ニ於テハ清韓地方輸出好況ヲ呈スルニ至リシカバ市下斯業茲ニ一新生面ヲ開キ工場的製造者ヲ見ルニ至リ日露戰爭當時ニ至ツテ軍隊ノ需要アリシカバ一層ノ盛況ヲ呈シタリ

(一) 産 額

大阪府

三十四年	二六六、二六五
三十五年	三二二、四六三
三十六年	四五七、八五九
三十七年	四三〇、三二五
三十八年(フエルト帽子)	二二一、六七〇

(二) 種類 製品ノ種類ハ麥稈帽子、烏打帽子、フェルト帽子、毛絲帽子等トス

(三) 原料 原料ハ麥稈、羊毛、狸毛、兔毛等ニシテ夏帽子ノ原料タル「タスカン」真田ハ伊太利産ヲ用ユレトモ其他ハ多クハ支那及我内地ノ真田ヲ使用ス冬帽子ノ原料ハ主ニ英、獨國ヨリ輸入シ又ハ佛、伊、米國ノ産ヲモ用ユ裏地ハ京都西陣及桐生ノ産ヲ用ユ

(四) 販賣手續 外國ハ支那及英國商人ノ手ヲ經テ輸出シ内地ハ各地ノ商人ニ賣渡ス

(五) 輸出額 本品ノ海外ニ輸出セラル、モノハ重ニ清韓向ニシテ近年清人ノ需要ヲ喚起シ戰後滿洲地方ニ輸出セラレタルモノ少カラス前途有望ナリト云フ今阪、神兩港ニ於ケル輸出額ヲ示セハ左ノ如シ

三十四年	大 阪	四七、五二九	神 戶	六九、九五一
三十七年	大 阪	一二四、七〇五	神 戶	七九、六〇八
三十八年	大 阪	二四七、四七二	神 戶	八六、六五四

(三) 扇子及團扇

(一) 沿革

大阪府下ニ於ケル斯業ハ其沿革實ニ古ク吉井茂右衛門ノ祖先ハ寛文年間ヨリ之ニ從事シ天明年間ニ於テハ其製品ヲ關人ニ販賣スルヲ以テ專業トナセシコトアリ而シテ稻垣政七ハ文政ノ初メヨリ製造ニ着手シ屢々海外輸出ヲ試ミシモ未ダ其時期ヲ得ザリシガ明治維新以來一般販路ヲ海外ニ擴張スルコトヲ得ルニ至リシガ大阪商人ノ欠點ハ又此製産ニ於テモ現示セラレ明治十二三年以來數年著シク好況ヲ呈スルヤ從業者一時ニ増加シテ相競争シ其結果粗製ニ加フルニ濫造ヲ以テシ遂ニ二十年ニ至リ一大悲境ニ沈淪セリ是ニ於テ同業者感ズル所アリ大ニ警戒ヲ加エ漸ク形勢ヲ回復シテ爾來十年間順潮ニ向ヒシモ三十三年北清事變起リ且翌年大阪經濟界ノ變動ニ遭遇シテ茲ニ一頓挫ヲ來セシカ再ビ其勢ヲ挽回シ輸出額漸次増加スルニ至レリ今大阪港ニ於ケル最近輸出高ヲ見ルニ左ノ如シ

年	數 量	價 額
三十一年	二七、七八七	四一八
三十二年	一五、〇〇三	三四五
三十三年	四七、二二〇	一、〇一一
三十四年	五八、二八六	一、〇三二
三十五年	四七、二七三	一、八七九

三十五年 一二七、九〇〇
 三十七年 一〇、〇四六
 三十八年 一三、七三四
 三十九年 三三、三四九
 四十一年 六〇、一五五

尙ホ大阪港ヨリ輸出サル、本品ノ仕向先ヲ示セハ左ノ如シ

國名	三十八年	三十七年	三十六年
韓 國	六、九二〇 ^円	二、一六六 ^円	二、六〇五 ^円
支 那	五二、三一九	二九、二〇四	九、七四六
香 港	一二五	一五一	一五一
海峽殖民地	七四一	二七九	八六五
其 他	六〇、一五五	三二、三四九	三六七
計			一三、七三四

尙阪、神兩港ニ於ケル近年輸出統計ヲ示シ參考ニ供ス

三十四年 五四、五一八^円
 三十五年 七三〇、八四二^円
 三十六年 八六七、四二八^円
 三十七年 八一八、六四七^円
 三十八年 八二六、七七七^円

(三) 産 額

製造戸數(三十八年)
 三十四年 數 量 價 額
 三十五年 六三、七五九^円
 三十六年 ?
 三十七年 ?
 三十八年 ?

主要産地
 大 阪 市
 團扇 六、四〇四、六七一
 扇子 六、二九六、四一二
 三、二五六、七八二

(四) 製造戸數(三十八年)

(五) 製造狀況

近年扇子ハ歐米向ハ競争ノ結果京都、名古屋ニ奪ハレ支那向増加シツ、アリ戰爭中男工ハ多ク出征シ女工ハ綿織業ニ轉ジ爲メニ産額減退セリ其製造ハ手工的ニシテ多クノ部門ニ分レ居レリ

(六) 製産費及收益

各種類多クシテ一定セズト雖モ大約原料四、地紙模様其他加飾三、張賃二、諸雜費一ノ割合ナリ收利ハ一割乃至二割トス

(七) 販賣手續

清國輸出品ハ從來多ク神戸居留清商ノ注文ニ應シテ製作シツ、アレトモ近來直接取引ヲ開カント計畫セル者アリ

(八) 荷造法

扇子ハ十二本乃至二十本ヲ紙函ニ入レ六十箱又ハ五十箱ヲ本箱ニ詰メ此ノ賣價約二十五錢ヲ要ス、

(九) 改良スベキ點

材料ノ精撰殊ニ骨タル竹材ノ削リ方ニ注意スルヲ要ス又意匠ハ絶エズ注意セザレバ好評ヲ博セザル而已ナラズ販路杜絶ノ恐レアリ尙一般ニ競争甚ク竹材ノ未ダ乾燥セサルモノヲ使用シ爲メニ腐敗スル等ノ事アリ海外ノ聲價ヲ失墜セルコト少カラズト云フ

(十) 海外ノ嗜好

清國向扇子、團扇ハ北清地方ハ比較的廉價品ヲ好ムト雖モ一般ニ清人ハ此品ニ對スル嗜好ハ高キガ故ニ其價格三四十仙ヲ下ルモノナシ圖樣ハ婦人持ト雖モ南畫着彩ノ花卉翎毛若クハ水墨ノ山水等餘リ俗ナラザルモノヲ好ム四條畫ニテモ應舉吳春等ノ風ハ頗ル彼等ノ意ニ投ズルモノ、如シ南清ハ上品ヲ愛用シ華麗ナルモノヲ良シトス故ニ之ガ意匠ニ於テモ金銀紅紫光彩陸離タルモノナラザルベカラズ一般ニ南清ハ嗜好ノ變遷早クシテ北清ヨリモ新奇ナルモノヲ好ムノ風アリ

(十一) 主ナル輸出者

五百井清右衛門	神木彦三郎	松原元助	小山堂三主商會
景山忠夫	小松芳松		
等ナリトス			

奈良縣

産業概説

本縣ノ生産業ハ農業其首位ヲ占メ工業、林業、礦業之ニ次ク水産業ハ生駒郡山地方ニ於ケル金魚ノ養殖ト吉野川筋ニ於ケル淡水漁業アルノミ畜産業ハ近時之ヲ奨勵セリト雖モ見ルヘキ成績ヲ舉クルニ至ラス

本縣ハ左右ニ大阪、京都ノ二地ヲ控ヘ鐵道縱横ニ貫通シ吉野川、北山川、十津川ハ和歌山縣ノ各港ニ注流シ水陸ノ交通至便ナルヲ以テ農工産原料粗製品ノ供給地トシテ好形勢ノ地位ニ在リト雖モ商業ハ大阪、京都兩市場ノ中間ニ介在スルヲ以テ反ツテ甚タ振ハス

今最近五ケ年間ノ統計ニ基キ本縣ノ生産力ヲ示セハ左ノ如シ

種別	年次	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年
農業	産	一三三三三〇九六	一三八四五二一六	一三二二四六七七	一一四三二〇六三	一二二七〇一八一
工業	産	一〇、四〇三、九〇四	七、九九〇〇三三	九、六二八六六二	一〇、七八三、三九一	八、七六五、四一三
林業	産	二〇、六二二、六〇〇	一八、二二二、八三一	一六、二四〇、六六九	一八、六七、二四五	二二、八九七、五五五
礦業	産	五九七二〇	四四、二四〇	二四、〇二七	五五、〇七四	九〇、二〇四
水産	産	三七九三〇	三三、七四六	四四、五六〇	五六、六三二	五二、七四二
畜産	産	九〇九〇	一〇、八九〇	七、七一〇	六、一五〇	七、五〇〇
計	産	二五、八八六、三三四	二三、七三六、八三五	二四、五四三、七〇五	二四、一九九、五五五	二三、四七五、七九五

尙ホ左ニ最近五ケ年間ニ於ケル重ナル生産品ノ産額ヲ示スヘシ

(一) 農産物

奈良縣

酒	醬	筆	墨	皮	鍋釜	生	竹	油	瓦	下	箸	膠	鼻
油	油	草	物	物	物	器	器	表	表	子	子	子	子
三三、九六三	一〇、三七六	六四、二〇〇	一五、〇四〇	二〇、二七〇	一六、三三二	三三、五九九	一四、六九二	三三、三三八	四六、一七〇	一九、三九〇	三六、八三〇	六八、五六六	七四、三二八
三七、〇一四	一四、七五三	四三、八五二	一四、六二〇	二八、六五〇	一一、八五一	三三、八〇三	二四、二〇〇	二〇、一〇〇	四七、八八二	四、五七三	七〇、七〇三	五三、二二〇	四六、九八八
三八、〇八二	一三、九五四	四七、五七五	一四、三七八	六五、二〇〇	一一、八九二	四二、七〇〇	三三、四九六	三三、五七〇	一八、八八六	六、一一二	一五、七〇三	一四、〇九五	五三、三七八
四一、六八三	一三、四六二	四六、二五三	九〇、七四五	二六、四〇〇	一九、四六三	四八、七二	二八、二七〇	三三、三三〇	一七、八九一	五、七三四	一五、七六〇	一三、四九九	六三、〇八八
四九、三一五	一五、二八三	四八、一八	一四、一三六	一九、七八〇	一三、九七〇	五〇、八九	二八、二二〇	二二、五〇〇	二二、二五〇	七、九二〇	一四、五〇〇	一三、六四〇	二二、五〇〇
四九、三一五	一五、二八三	四八、一八	一四、一三六	一九、七八〇	一三、九七〇	五〇、八九	二八、二二〇	二二、五〇〇	二二、二五〇	七、九二〇	一四、五〇〇	一三、六四〇	二二、五〇〇

種別	年次	産物
扇子	三十八年	一、〇七八
團扇	三十七年	九三九〇
	三十六年	一、三三〇
	三十五年	一、六七三
	三十四年	一、三三八〇

種別	年次	主産物	副産物
林産物	三十八年	一、七三三、〇三〇	三三、七二八
	三十七年	一、〇三〇、六四〇	三三、六七八
	三十六年	一、九三三、三三三	三三、六三七
	三十五年	一、六三三、六五〇	四〇、九九五
	三十四年	一、一五三、五九四	三三、一六一

種別	年次	産物
礦産物	三十八年	五九、七二〇
	三十七年	四二、二四〇
	三十六年	四四、一〇七
	三十五年	五五、〇七四
	三十四年	九〇、二〇四

種別	年次	金魚	其他
水産物	三十八年	一、一五七、〇	二五、三三〇
	三十七年	一、一三八二	三三、三六四
	三十六年	一、五四三〇	二九、一三〇
	三十五年	二、九一三三	二七、五〇〇
	三十四年	三、一五七	三〇、五八五

以下本縣産業ノ概況ヲ説明スヘシ

本縣ハ地味概ネ沃饒ナルヲ以テ農業ハ昔時ヨリ發達シ殊ニ普通農業ハ其進歩大ニ見ルヘキモノアリ就中米ノ如キハ品質頗ル良好ニシテ海外輸出米トシテ又酒造ノ原料トシテ大ニ好評ヲ博セリ平坦部地方ニ於テハ概ネニ毛作田ニシテ麥、菜種ノ栽培亦盛ナルヲ見ル

山間部ニ屬スル添上、山邊、宇陀、吉野ノ四郡ハ養蠶業、茶業大ニ行ハレ平坦部ニ屬スル生駒、北葛城、磯城、高市ノ各郡ハ果樹、蔬菜類ノ栽培盛ナリ且本縣ニ於テハ蠶業、茶業、畜産業ノ技術員ヲ置キ巡回講話並ニ實地指導ノ任ニ當ラシメ或ハ縣費ヨリ補助金ヲ交付シテ稚蠶共同飼育所ヲ設立セシメ或ハ種牡牛ヲ購入シテ貸附シ或ハ製茶器械ヲ購入シテ其模範ヲ示ス等専ラ之カ改良發達ニ力ヲ致セリ

本縣ノ農業ハ米、麥作ヲ主トシ將來亦米麥作カ其中心タルヲ失ハサルヘシト雖モ而モ其地京都、大阪ノ二大市場ニ隣接セルヲ以テ農業ノ趨勢モ自ラ都會地ニ需要多クシテ且收利多キ園藝作物殊ニ果實、蔬菜類ノ栽培ハ更ニ一段ノ發達ヲ見ルニ至ルヘキハ疑ナキ所ナリ而シテ其山間部ニ在リテハ養蠶業、茶業、畜産業ノ發達ヲ計ルノ餘地頗ル多キヲ以テ將來縣ノ獎勵ト相待ツテ漸次其發達ヲ見ルニ至ルヘシ

林業ハ吉野杉檜ノ造林ヲ以テ其名全國ニ高シ其造林營林伐木並ニ造材方法ノ進歩セル材質ノ良好ナル地ニ匹儔ヲ見サル所ニシテ一ケ年ノ伐採高約一百五十餘萬圓ニ達セリ加之輓近林業思想ノ普及ト共ニ新ニ造林ノ經營ヲ爲ス者多ク一年隆盛ノ域ニ進ミツ、アリ造林ノ最モ盛ナルハ吉野郡ニシテ宇陀郡之ニ亞ク本縣ニ於テハ更ニ各郡ニ殖林獎勵ノ必要ヲ認メ明治三十七年度ヨリ森林調査員三名ヲ置キ各郡ニ涉リテ造林營林ノ方法ヲ調査セシメ居レリ

工業ハ染織工業其首位ヲ占メ之ニ亞クモノヲ綿絲紡績、醸造業、製油、製墨、凍豆腐等ノ諸工業トナセトモ染織業ト綿絲紡績業ト醸造業トヲ除ケハ其他ハ皆產額微少ニシテ未タ十分ノ發展ヲ見ルニ至ラス

大和木綿業ハ本縣工業中最モ重要ノ地位ヲ占メ昨三十九年中ノ產額ハ既ニ五百萬圓ニ達シ尙ホ駁々トシテ進歩ノ狀アリ此ノ如ク本業カ著大ナル發達ヲ見ルニ至リタルハ近來染色ヲ改良シ紺緋ニ硫化染料ヲ使用シ能ク價格低廉ノモノヲ製出シ以テ其販路ノ擴張ヲ圖リタルニ由ルモノニシテ從來大和木綿ノ產額ハ白木綿カ總額ノ十分ノ七ヲ占メタリシカ今ヤ紺緋、白緋ヲ合スレハ殆ント之ト運庭ヲ見サルニ至レリ硫化染料ハ一部當業者間ニハ四五年前ヨリ既ニ之ヲ使用シ來リシカ一般

ニ之ヲ使用スルニ至リシハ一昨三十八年冬頃ヨリノ事ニシテ縣下ニ於ケル昨三十九年中硫化染料ノ使用高ハ約十五萬圓ニ達セリ此ノ如ク紺色ニ化學染料ヲ使用シ稍ヤ其成功ヲ見ルニ至リタルハ本縣工業ノ一進歩ニシテ其茲ニ至レルハ縣立工業學校ノ力與ツテ多キニ居ルト云フ現今ニ於テモ大和木綿同業組合ト工業學校トノ關係ハ頗ル密接ニシテ工業學校カ恰モ染織試驗場ノ觀アルハ洵ニ喜フヘキナリ白緋ニ硫化色素ヲ使用スルコトハ從來組合ニ於テ之ヲ許サ、リシカ漸次之ヲ許可スル方針ナリト云ヘハ(目下ハ僅ニ一人ノミ許可シ居レリ)若シ一般ニ之ヲ許スニ至ラハ百萬反以上ノ產額ヲ見ル亦遠キニアラサルヘシ(三十九年中ノ白緋產額ハ八十萬反ナリ)機業ノ狀態ハ概ネ副業的家内工業ニシテ主トシテ各都市ニ散在セル農家ノ子女之ヲ織成セリ面モ近來時勢ノ進運ニ伴ヒ工場工業ノ興起ヲ促シ原動力ヲ使用シ五十臺以上ノ機臺ヲ運轉セシムルモノ六ヶ所ノ設立ヲ見ルニ至リ將來尙ホ増加ノ傾向アルハ喜フヘキ現象ナリト謂フヘシ

本縣ノ麻布ハ奈良晒ト稱シ昔時ハ其製織盛ナリシカ維新以來其需要漸ク減シ現時一ケ年ノ產額ハ十萬圓ニ達セス元來本縣ノ製品ハ晒麻布及綿麻布トモ麻綿交織物ノミニ限ラレ且他ノ產地ニ於ケルカ如ク紺其他色物ノ產出ナキヲ以テ其業著シキ發達ヲ見サルナリ

蚊帳ハ純麻製ノモノモ多少產出スト雖モ其大部分ハ綿麻交織製ト綿蚊帳トノ二種ニシテ就中綿蚊帳ハ價格低廉ナルヲ以テ漸次其需要増加シ且滿韓輸出ノ前途好望ナリトス數年前蒸氣乾燥機械ヲ發明セシ者アリ奈良市ニ工場ヲ設置シ蚊帳ノ染附乾燥ヲ行ヘリ此機械ヲ用ユルトキハ一臺ニテ能ク一日ニ五百疋ヲ染附乾燥シ得ヘシト云フ此ハ未タ他ノ蚊帳產地ニ見サル所ノ事業ニシテ是亦奈良蚊帳業ノ發達ニ資スル處尠少ナラサルヘシ

紡績綿絲ハ郡山紡績株式會社及攝津紡績株式會社高田分工場ノ二工場ニテ之ヲ製造ス其產額二百七十餘萬圓ニシテ概ネ縣内機業家並ニ内國各地ノ需要ニ供シ多少清國ヘモ輸出セリ

製絲業ハ明治二十七八年日清戰役ノ後各處ニ企業セラレタリシモ當時ノ所謂企業熱ニ驅ラレテ興リシ事業ナリシヲ以テ

會社企業者ハ須臾ニシテ倒産ノ悲運ニ陥リ人氣全ク沮喪シ爾來之カ計畫ヲ爲ス者ナシ其業爲メニ大ニ振ハス生絲ノ一ヶ年産額ハ僅ニ二十萬圓内外ニ過キス

製墨及製筆ハ奈良市ノ特産ニシテ其販路全國各地並ニ韓國ニ及ヘリ殊ニ製墨業ノ發達セルハ全國ニ其比ヲ見サル所ニシテ殆ント本縣ノ專占事業ト云フモ不可ナキナリ

漆器ハ奈良市及吉野郡ニテ之ヲ製造ス而シテ奈良漆器ハ室内裝飾具ヲ主トシ古雅愛スヘント雖モ美術工藝品ニ屬スルモノ多ク吉野漆器ハ日用什器ニシテ價格低廉ナレトモ其製粗野ニ失シ共ニ其販路狭少ナリ

素麵ハ本縣特有物産ノ一ニシテ主トシテ磯城郡三輪町ニテ之ヲ製造ス明治三十八年中ニ於ケル産額ハ十二萬二千圓ナリ本業ハ盡ク農家ノ副業ニ係ルヲ以テ一ヶ年ヲ通シテ之カ製造販賣ニ從事スル者ナク毎年十一月ヨリ翌年三月末マテ之ヲ製造シ仲買業者ニ賣渡スヲ例トセリ是レ本業カ他府縣ニ於ケルカ如ク著シキ發達ヲ見サル所以ナリ

凍豆腐ノ主産地ハ添上、山邊、吉野ノ三郡ニシテ本品ハ冬期酷寒中ノミノ製造ニ係リ原料タル大豆ハ内地産及朝鮮産ヲ併用セリ現在ニ於テハ其産地大和、河内、紀伊三國ノ一部地方ニ限ラル、ヲ以テ農家ノ副業トシテハ比較上收利多キ事業ナレトモ將來冷藏庫ノ發達ト共ニ永ク優勝ノ地位ヲ占ムル能ハサルニ至ルヘシ

製革業ハ北葛城郡守道某ノ經營ニ係リ其製品ハ主トシテ陸軍用靴皮、武裝用皮、工場用帶革等トス全工場一ヶ年ノ製造額ハ三十五萬圓ナリト云フ

鑄物ハ北葛城郡及奈良市ニテ之ヲ製造ス工場五ヶ所アリ何レモ職工二十人乃至七十人ヲ使用セリ製品ハ韓國向鍋釜、内地向鍋釜及農具等トス

其他本縣ノ工業品ハ清酒、醬油、瓦、紙、膠、製油、竹器、下駄表並鼻緒、扇子團扇等種々アレトモ現ニ海外ニ輸出セラレ又將來輸出ノ見込アルモノハ綿布、蚊帳、鍋釜、漆器、綿絲等ノ數種ニ過キサルヘシ綿布業ハ前ニモ述フルカ如ク本

縣唯一ノ工業トナシテ置縣以來之カ改良發達ニ力ヲ盡シ或ハ取締規則ヲ發布シテ粗製濫造ノ弊ヲ防制シ或ハ染織講習所ヲ設置シテ該業ニ必要ナル智識技能ヲ授ケ或ハ組合ニ補助金ヲ交付シテ検査ノ確實ヲ期セシムル等種々ノ方策ヲ講シ銳意之カ發展ニ努メ居ルヲ以テ本業ノ前途ハ仍ホ益々多望ナリト謂フヘシ
尙ホ工業品ノ生産分配ノ狀況ニ關シテハ別項ニ之ヲ詳説スヘシ

重要工業產品調

(一) 大和木綿

年次	(一) 産額		(二) 種類別		計
	白木綿	緋木綿	白木綿	緋木綿	
三十四年	六三〇,四四四	一七〇,四六四	六六〇,三〇〇	六六〇,三〇〇	七六〇,八三四
三十五年	七七一,四五〇	三三四,二七五	八〇七,〇〇〇	一,〇〇〇,九五〇	九三三,九七四
三十六年	五〇〇,九三三	二二五,七二五	一,〇一六,〇一八	一,〇八四,四五五	六八七,三三三
三十七年	五九六,四〇〇	一四四,九二四	六六〇,三〇〇	七〇〇,三四一	二六七,九六八
三十八年	七七八,七六〇	二二九,〇三五	一,五四一,六三三	一,四四〇,七七九	一〇,二八〇,八五三
					四二九,九九〇

(二) 種類別

白木綿 緋木綿 白木綿 緋木綿 縞物 無地物

輸出品ハ幅尺三、尺一ノ兩種長四丈八尺但韓國向ハ幅九寸五分長五丈六尺ナリト云フ

(三) 主要産地

奈良縣

北葛城郡 南葛城郡 生駒郡 高市郡 磯城郡

(四) 事業ノ沿革

大和木綿業ノ起源ハ遠ク後陽成天皇ノ朝文祿二年ニ在リ而モ當初ハ只僅ニ一國ノ需用ニ充テタルニ過キス其廣ク各地ニ名ヲ知ラル、ニ至リシハ寛文五年以後ニシテ當時機械ノ業大ニ發達シ各驛村落到ル處機杼ノ聲ヲ聞カサルナク交通ノ便發達スルニ隨ヒ販路各地ニ開ケ殊ニ大和木綿ハ製織ノ精巧地質ノ堅牢ヲ以テ稱セラレ大和木綿ノ名ハ各地ニ知ラル、ニ至レリ紺緋ハ寶曆年間南葛城郡御所町ニ於テ之カ製織方法ヲ發明シ爾來工夫紺、臙紺等各種ノ意匠製織方法ノ發明ニ亞キ染色法織機附屬器具ノ改良發明セラレタルモノ多ク終ニ今日ノ盛況ヲ見ルニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數(三十九年)

(イ) 家内工業

製造戸數

職工數

千三百四拾八戸

凡五萬人

(ロ) 工場工業

工場數

職工數

六ヶ所

二百二十人

馬力

蒸氣力

石油力

水力

一個

三個

一個

八馬力

各九馬力

六馬力

(六) 生産ノ狀況

維新以來交通ノ便開ケ販路ノ擴張ト同時ニ自由競争ノ思想一般ニ機業界ヲ風靡シ當業者多クハ一時ノ利ニ惑ヒ尺巾ヲ減縮シ染色ヲ粗悪ニスル等ノ弊害ヲ生セシ結果大和木綿ノ信用漸ク失墜シ年ヲ逐フテ衰退ニ傾キ明治十七八年ノ頃

ノ如キ殆ント市場ニ於テ取引ヲ拒絶セラル、ノ悲境ニ陥リツ、アリシカ爾來大和木綿改良ノ聲上下ニ喧シク當業者ノ覺醒ト當局者ノ督勵ト相俟ツテ稍ヤ改良ノ緒ニ就キシモ尙未タ面目ヲ一新スルニ至ラス乃チ明治二十七年縣令ヲ以テ大和木綿業組合取締規則ヲ發布シ強制的ニ組合ヲ組織セシメ尺巾、染色、染料、糊付量、經緯ノ糸數等粗製濫造ヲ防制スルニ適當ノ方法ヲ定メ違犯者ニハ過料拘留ノ制裁ヲ設ケ銳意之ヲ勵行シタル結果積年ノ弊習漸ク革新セラレ改良ノ効果著シク擧カレリ其後重要物産同業組合法ノ發布アリシヲ以テ從來ノ取締規則ヲ廢止シ更ニ企業組合法ニ基キ組合ノ組織ヲ改メタリ爾來組合ノ業務ニ弛張アリ時ニ組合ノ紛擾ヲ重ネシコトアリシモ生産上ニハ大ナル障害ヲ及ボスコトナク産額漸次増加シ新ニ臺灣、韓國、清國ニ輸出ノ途開ケ内地需用ノ増進ト共ニ今日ノ盛況ヲ見ルニ至レリ而シテ昨今當業者一般ニ滿韓ニ發展ノ方法ヲ講シ直接輸出取引ノ道ヲ開始センコトニ努メ在來ノ家内工業ハ漸次工場工業ニ移ルノ傾向ヲ生シツ、アルヲ以テ將來ハ尙一層其發達ヲ見ルニ至ルヘシ

本縣機業ノ狀態ハ概ネ家内工業ニシテ其製造家ノ如キ工場ヲ有シ職工ヲ使役セル者少ク只原料ヲ仕入レ之カ機杼ヲ爲シタル上各地ニ散在セル賃職工ニ依託シテ織成セシメ其出來上リ品ヲ取集メ之ヲ仲買業者ニ賣却スルヲ例トセシカ明治三十六年高市郡八木町ニ於テ始メテ原動力ヲ使用シ工場組織ニ由リ機業ヲ開始セシヨリ以來引續キ各地ニ工場ノ設立ヲ見ルニ至リ今ヤ其數六ヶ所ニ及ベリ

大和木綿ノ産額ハ昨三十九年ニ於テハ既ニ五百萬圓ヲ超エ尙ホ益々増加ノ傾アリ本業ガ斯ク著シキ發達ヲ見ルニ至レルハ近來染色方法進步シ紺緋ニ硫化染料ヲ使用シ能ク價格低廉ノモノヲ製出スルニ至レルカ爲メニシテ紺緋ノ産額ハ三十七年マテハ四十萬圓餘ニ過キサリシカ昨三十九年ニハ既ニ百二十八萬圓餘ニ達シ販路益々擴張ノ勢アリ硫化染料ハ一部當業者間ニハ四五年前ヨリ既ニ之ヲ使用シ來リシカ其一般ニ之ヲ使用スルニ至レルハ一昨三十八年冬頃ヨリナリト云フ硫化染料ヲ用キタルモノニハ之ヲ阿波藍ヲ使用シタルモノニ比スレハ其價格約三分ノ一ハ低廉ナリト云フ

(七) 原料ノ需要供給

原料ハ縣内ニ郡山紡績會社及攝津紡績會社高田分工場アリ且綿糸ノ供給市場タル大阪ニ隣接セルヲ以テ各地紡績綿糸ノ供給多ク些ノ不便澹滞ヲ見ス

(八) 生産費及收益ノ比較

(イ) 白木綿(三十八度物) 生産費

金 五拾九錢壹厘	原料綿糸代
金 拾貳錢五厘	織 賃
金 五	糊付並仕拵賃
金 六錢五厘	織物税
收益比較	
金 八拾四錢貳厘	白木綿卅八度物 壹疋販賣價格
内	
金 八拾參錢壹厘	製 産 費

差 引

金 壹錢壹厘

益 金

(ロ) 紺 緋(普通モノ) 生産費

金 四拾七錢六厘	原料綿糸代
金 五拾錢	織 賃

金 五	粹繰及拵括リ賃
金 貳拾貳錢五厘	染 上 賃
金 拾貳錢五厘	機 仕 拵 費
金 三	蠟 引 費
金 五	文庫及商標代
金 拾壹錢五厘	織 物 税
計金 壹圓五拾七錢壹厘	
收 益 比 較	
金 壹圓六拾五錢	紺緋普通品壹反販賣價格
内	
金 壹圓五拾七錢一厘	製 産 費
差 引	
金 七錢九厘	益 金

(九) 販出額及仕向地

大和木綿ノ産額ノ全部ハ殆ント縣外ニ輸出シ其ノ縣内ニテノ消費額ハ殆ント計上スルニ足ラス内地向ノ仕向先ハ大阪、京都ヲ第一トシ名古屋、東京、鹿兒島之ニ亞ク海外輸出向ハ直接之カ取扱ヲ爲ス者ナク大阪輸出商ノ手ヲ經テ輸出シ居レリ而シテ其仕向先ハ仁川、大連ヲ主トシ尙ホ臺灣ヲ經テ厦門地方ヘモ輸出セラル今三十七、三十八兩年間ノ海外輸出額ヲ擧クレハ左ノ如シ

年次	數量	價額
三十七年	四九七、四二〇 _反	三三三、三一〇 _反
三十八年	七八一、五二〇	五三六、六七六

(十) 販賣手續及取引慣習

白木綿製造業者ハ豫メ仲買業者ヨリ注文ヲ受ケ又ハ自己ノ見込ニ依リ製造シタル木綿ヲ仲買業者ニ引渡シ同時ニ引渡木綿ノ代價總額百圓ナレハ其ノ總額ノ八分即八拾圓分ヲ原料綿糸ニテ残り二分即二十圓ヲ現金ニテ受取り續テ次ノ機拵ヘニ掛ルヲ例トセリ仲買業者ト仕向先問屋トノ關係ハ概ネ豫約販賣ヲ爲シ其取引ハ現物仕送り後一週間内ニ代金ヲ送金シ來ルヲ例トシ其他ハ現金取引又ハ約束手形ニ由リ荷爲替ヲ取組ムモノハ甚タ稀ナリ是レ多クハ仕向商店ニ特約アリ各地ヨリ直接仕入ノ爲メ來縣スルヲ以テ荷爲替ニ依ルヲ要セサレハナリ

(十一) 相場

明治三十九年ニ於ケル本品ノ平均相場ハ左ノ如シ

白木綿一疋ニ付	商印	一圓五錢	業印	九十六錢
	發印	八十九錢	達印	八十三錢
	國印	七十四錢	利印	六十八錢
	民印	六十一錢	福印	五十五錢
輸出物白木綿一疋ニ付	尺三	一圓三十錢	九寸五分 _{朝鮮}	一圓六十錢

永通布 一圓五錢
紺緋一反ニ付

上	二圓三十錢	中	一圓九十錢
下	一圓六十五錢		
白 緋			
上	一圓八十錢	中	一圓六十錢
下	一圓三十五錢	下ノ下	九十錢

(十二) 荷造法其費用并ニ運賃諸費

内地向白木綿ハ四十疋又ハ五十疋ヲ一括トシ(之ヲ一本ト云フ)全質ノ木綿ヲ以テ之ヲ纏束シ太繩ヲ以テ一ヶ所ヲ縛スルノミ紺緋、白緋、縞、無地物ハ三十反若クハ二十反ヲ以テ一箱トシ杉板製長方形ノ荷箱ニ入レ釘打トシ更ニ堅繩横繩ヲ掛ク輸出向ハ四十疋ヲ一括トシ別ニ設ケアル荷締器ニ包裝紙及蓆ヲ敷キ其上ニ木綿ヲ載セ荷締メヲ爲シ太繩ニテ堅ク結束ス其費用左ノ如シ

内地向白木綿一本ニ付	金 二 錢
紺緋、白緋、縞物一箱ニ付	金 貳拾八 錢
輸出向白木綿一本ニ付	金 拾貳 錢
運賃ハ若先ニヨリ一定セス高田ヨリ大阪マデノ運賃ハ左ノ如シ	
内地向白木綿一本ニ付	金 六 錢
紺緋、白緋、縞物一箱ニ付	金 四 錢

金 八 錢

百三十二

輸出向白木綿一本三付

(十三) 重ナル製造及仲買業者並重ナル取扱商店
製造及仲買業者

北葛城郡高田村

全

全

奈良市

南葛城郡御所町

全

高市郡八木町

全

磯城郡平野村

北葛城郡馬見村

高市郡天満村大字出

全

南葛城郡御所町

北葛城郡磐園村大字築山

小林 繁藏

松村 善一郎

堀江 三郎

安川 甚五郎

關 商會

卯 園 豐藏

吉川 小七郎

三浦 猪太郎

藤岡 敬治郎

松田 善五郎

竹島 宇平治

高井 仙太郎

高井 宗三郎

大森 儀藏

吉岡 久太郎

山邊郡二階堂村大字南六條
磯城郡織田村大字芝

森崎 由藏
中西 喜重郎

販出先ニ於ケル取扱者

大阪

全

全

全

全

全

京都

全

全

全

東京

全

全

名古屋

奈良縣

藤田 商店

和田 安商店

瀬尾 商店

岡橋 商店

稻西 合資會社

三井物産會社

山田 商店

大忠 商店

安本 商店

伊吹 商店

森清 商店

杉浦 商店

前川 商店

薩摩 商店

瀧 兵右衛門

百三十三

全 全

瀧 定 助
九 八 商 店

百三十四

(十四) 縣ノ施設

明治二十七年ヨリ三十二年ニ至ル五ケ年間毎年縣費ヨリ金壹千圓乃至三千圓ヲ同業組合ニ交付シ組合ノ事業ヲ補助セリ

明治二十九年五月ヨリ三十三年迄染織講習所ヲ置キ各郡市ニ三週間ノ期間ヲ以テ講習所ヲ開キ營業者ヲ集メテ染色及機械ニ關スル學理ト技術トノ智識ノ普及ニ努メタリ

以上ハ縣ノ施設中著シキ事項ニシテ其他經費ヲ補助シテ品評會ヲ開催セシメ或ハ農商務省ヨリ技師ノ出張ヲ請ヒ講和會ヲ各地ニ開キ或ハ營業者ヲ各地ニ派遣シテ製造ノ狀況ヲ視察セシメ昨三十九年ノ如キ視察手當ヲ補給シテ滿韓ニ視察員ヲ渡航セシメシ等斯業ノ獎勵ニ付テハ年來之ヲ怠ルコトナシト云フ

(二) 紡績綿糸

本縣下ニ於ケル綿糸紡績工場ハ郡山紡績會社工場ト攝津紡績會社高田分工場トノ二アリ左記各項(産額ト產地トヲ除キ)ニ記載スル所ハ主トシテ郡山紡績會社ニ就キ取調ヘタルモノニ係ル

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
三 十 四 年		一三三、二二〇	二、二四二、六四〇 ^円
三 十 五 年		一二一、三二〇	二、二八七、三六〇

三 十 六 年	三〇、〇九五	二、四一三、三七三
三 十 七 年	二二、五六七	二、二五七、六七七
三 十 八 年	二四、二一〇	二、七八七、五五六

備考 一捆ハ四十九貫二百匁ナリ

(二) 種 類 別

右十番手 右十六番手 右十八番手 左十八番手 左二十番手

(三) 主 要 産 地

生駒郡 郡山町 郡山紡績株式會社
北葛城郡 高田町 攝津紡績株式會社高田分工場

(四) 製 造 戸 數 及 職 工 數 (二十九年)

郡山紡績會社ニ於ケル職工數並ニ使用馬力數ハ左ノ如シ	職 工 數	馬 力
男	二 百 九 十 二 人	
女	千 〇 十 五 人	
馬		六 百 五 十 馬 力

(五) 製 産 ノ 狀 況

本品中其ノ七割マテハ縣下産木綿ノ原料ニ使用セラル故ニ木綿ニシテ好況ナルトキハ本品モ亦其製産額ヲ増加スルヲ例トス而シテ近年一般經濟界ノ不振ニ伴ヒ本業モ萎靡ノ状態ニ在リ加フルニ原料棉花ハ其價格高直ナルヨリ一層製造ニ困難ヲ加ヘ殊ニ明治三十七年日露開戦ノ當初ニ在リテハ又其影響ヲ蒙リ殆ント悲運ノ極度ニ達シタリシカ幸ニ全年度末ヨリ軍隊用及ヒ滿韓地方ヘノ輸出ノ爲メ木綿ノ需要頓ニ増加セルヨリ本品ノ製産額モ亦漸次多キヲ加フルニ至

レリ而シテ本綿ハ全年度以降引續キ好況ニ在ルヲ以テ本品モ之レニ連レテ順況ノ中ニ其製産額ヲ増シツ、アリ

(六) 原料ノ需要供給

原料棉花ハ主トシテ支那、印度産及ヒ米國産ヲ用ユ

(七) 製産費及收益比較

細番手^(十八番)_(以上)一柵ノ製産費

金百拾四圓八拾四錢

製 産 費

收 益 比 較

金百參拾貳圓貳拾四錢

細番手一柵平均相場

内

金百拾四圓八拾四錢

製 産 費

差 引

金拾七圓四拾錢

益 金

大番手^(十六番)_(以下)一柵ノ製産費

金百六圓拾六錢

製 産 費

收 益 比 較

金百貳拾參圓五拾六錢

大番手一柵平均相場

内

金百六圓拾六錢

製 産 費

差 引

金拾七圓四拾錢

益 金

(八) 販出額及仕向地

本品中七分ハ縣下産木綿ノ原料ニ使用セラレ殘餘ハ京、阪、神及愛知縣等ニ仕向ケラル外國へノ輸出ハ一ケ年凡ソ四百柵内外ニシテ主トシテ上海ニ輸出ス

(九) 販賣手續及取引慣習

販賣手續ニ付テハ最初双方間ニ賣買ノ契約ヲ締結シ置キ次ニ現物授受ノ場合ニハ先ツ賣主ヨリ種別、一柵ノ代價、現物受領期日及ヒ受領ノ場所ヲ記シタル書面ヲ送付シ買主ハ之ヲ承諾シタルトキハ受書ヲ送付シ以テ賣買ヲ結了ス而シテ其代金ハ着荷後五日以内ニ請求スルコト、ナリ居レリ

(十) 相 場

時ニ變動スルヲ以テ精確ナル相場ハ之ヲ示シ難シト雖明治三十九年ニ於ケル平均相場ヲ擧クレハ左ノ如シ

右十番手一柵ニ付

金百貳拾四圓

右十六番手全

金百參拾壹圓

右十八番手全

金百參拾八圓五十錢

左十八番手全

金全 上

左二十番手全

金百參拾六圓五十錢

(十一) 輸出ノ 狀況

近年一般經濟界ノ不振ニ伴ヒ販出モ亦澁滞ヲ免レサリシカ明治三十七年末ヨリ漸次順況ニ向ヒ益々好望ノ状態ニ在

(十二) 荷造法及其費用並ニ運賃

荷造ハ二十番手ハ二十總十六番手ハ十六總ヲ一玉トシ締糸ニテ括リ厚洋紙ニ包ミ再ヒ糸ニテ之ヲ結束シ商標及番手ヲ記シタル紙ヲ貼付シ内地向ハ二十玉ヲ筵ニテ包ミ水壓器ニテ堅ク締メ堅横トモ太繩ヲ懸ケテ販出ス又輸出向ハ四十玉ヲ紙ニ包ミ防水布ヲ巻キ其上ヲ「ドンゴロス」ニテ捲ヒ帶鐵ニテ縛ル尤モ輸出ト雖芝罘及韓國向ハ二十玉入筵包トナス

荷造費ハ輸出向四十玉入一梱ニ付金貳圓十錢内地向二十玉入一俵九十五錢内外ナリ

運賃ハ四十玉入一梱ニ付(郡山ヨリ)

大阪迄

貳拾參錢

神戸迄

四拾錢

二十玉入一俵ハ何レモ其半額ナリ

(十三) 長所缺點并ニ改良スヘキ要點

郡山紡績會社製品ハ主ニ縣下産木綿原料ニ消費セラレ品質最モ白木綿ノ經糸ニ適合ス唯紺并ニ色木綿ノ緯ニ使用スル右撚十六番手ハ撚度稍ヤ強キニ過キ且量目輕キ嫌アリ依テ之レニ使用スルモノニ付テハ其量目ヲ増シ撚度ヲ稍ヤ緩ニスルノ必要アルベシト云フ

(三) 麻布及蚊帳

(一) 産額

年次	種類	數量	價額
三十四年	麻蚊帳	一二六、〇〇〇	一七七、七三二
三十五年	麻蚊帳	二七五、八〇〇	一一八、五九四
三十五年	麻蚊帳	二二、一九〇	四一、九〇五
三十五年	麻蚊帳	一三三、〇八〇	一三〇、〇六五
三十五年	麻蚊帳	二四七、五〇〇	一一三、八九〇
三十五年	麻蚊帳	二二、四六〇	六七、三八〇
三十五年	麻蚊帳	一一三、五九〇	一七六、〇一七
三十五年	麻蚊帳	一四〇、〇〇〇	六八、六〇〇
三十五年	麻蚊帳	二一、七三〇	四〇、一七〇
三十五年	麻蚊帳	一五、〇九〇	二六、九七二
三十五年	麻蚊帳	八三、五〇〇	三九、二四五
三十五年	麻蚊帳	七、三〇〇	二七、八六八
三十五年	麻蚊帳	一六六、〇〇〇	四〇、一六〇
三十五年	麻蚊帳	一六八、〇〇〇	九二、四〇〇
三十五年	麻蚊帳	九、四五〇	三三、〇七五

(二) 種類別

- (イ) 麻布
- (ロ) 蚊帳地
- 縞布
- 兩麻地
- 生平布
- 片麻布

(三) 主要産地

- 奈良市
- 添上郡
- 生駒郡
- 山邊郡
- 北葛城郡
- 奈良縣

(四) 事業ノ沿革

麻布(單ニ奈良晒ヲ云フ)業ノ創始ニ就テハ異説多ク得テ之ヲ詳ニセスト雖モ奈良ニ於テ其製織ノ稍ヤ熾ナルニ至リシハ永祿以後ナリトス蓋當時ノ奈良ハ漸ク衰微ニ向ヒ商賈生計ニ苦ムノ餘斯業ニ轉セシモノ多キニ由ルナリ爾來一時奈良晒ノ製織隆盛ニ向ヒタリシカ粗製濫造ノ弊相繼テ生シ遂ニ復衰退ヲ見ルニ至レリ

是ニ於テ前曆年間ニ至リ始メテ尺幅検査ノ法ヲ設ケ検査ノ結果合格品ニハ合格ノ極印ヲ押捺スルコト、ナシ以テ嚴ニ粗製濫造ノ弊ヲ防遏セリ而シテ其吟味役ニハ奈良町總年寄之レニ任セラレタリ後萬治年間ニハ尺幅不足ノ布ニハ不足ノ判ヲ捺シ製造元ニ還戻シタルコトアリ

右検査勵行ノ結果漸次其信用ヲ回復シ元文ノ頃ニハ生布廿一萬八千七百六疋、挾布一萬二千八百八十七疋ノ產出ヲ見ルノ盛況ニ達セリ降テ維新前後此検査方法自然廢止ニ歸シ爰ニ再ヒ其弊價ヲ失墜シ復不振ノ境ニ陥ルニ至レリ明治三十三年重要物産全業組合法發布セラル、ヤ奈良縣一圓ヲ地區トシ製造業者、仲買業者、行商人、染色業者、晒業者、仕立業者、經緯亭賣買業者ヲ組合員ト爲シ營業上ノ弊害ヲ矯正シ兼テ其利益ヲ増進スルノ目的ヲ以テ奈良麻布蚊帳全業組合ヲ設立セシモ未タ充分ナル効果ヲ奏スルニ至ラスト云フ

(五) 製造戸數及職工數 (二十九年)

製造戸數	百二十戸
職工數	千二百五十人

(六) 製造ノ狀況

舊幕時代ニ於テハ製品検査ノ法行ハレタル爲メ能ク粗製濫造ヲ防遏シ奈良晒ノ弊價大ニ揚リ販路益々擴張シテ多數ノ製出額ヲ見タリシモ明治維新前後ヨリ検査法全ク廢止ニ歸シタルト一方同業者間ノ競争ノ結果トシテ往々粗製品ヲ

出スニ至リ需要地ノ信用漸ク衰へ販路縮少スルニ至レリ明治三十三年奈良麻布蚊帳全業者組合設立以來從來ノ弊習ヲ矯正シ製品ノ改良ニ努メシ爲メ現時ハ稍ヤ回復ノ機運ニ向ヘリト雖モ尙ホ未タ十分ナル好況ヲ見ルニ至ラス

(七) 原料ノ需要供給

麻布ノ原料ハ山形縣產ノ眞苧、栃木縣產ノ麻ヲ使用シ片麻布ハ緯ニ日本製麻會社ノ麻紡績糸又ハ支那產麻苧ヲ紡出シテ使用シ經ニ金巾、合同兩紡績會社ノ紡績綿糸ヲ用ユ又蚊帳地ハ主トシテ縣内郡山紡績會社并ニ攝津金巾兩紡績會社製ノ紡績綿糸ヲ使用ス

(八) 製造費及收益比較

(イ) 生平布(五丈七尺ヨリ一疋ニ對スル)製造費

金四圓四拾錢	原料麻糸代
金壹圓拾錢	織
金拾錢	糊附仕拵賃
金四拾七錢	織物稅

收益比較

金六圓參拾錢 生平布一疋販賣價格

内

金六圓〇七錢 製產費

差引

金貳拾參錢 益金

(ロ)片麻布(五丈八尺モノ)製産費

金九拾錢
金參拾六錢
金拾貳錢五厘
金壹錢五厘
金壹錢五厘
金貳拾錢
金拾參錢貳厘

收益比較

金壹圓八拾五錢

内

金壹圓七拾四錢七厘

差引

金拾錢參厘

(ハ)蚊帳(兩綿九寸巾ノモノ)製産費

金壹圓五拾錢
金參拾錢
金拾參錢

原料麻糸代
全綿糸代
織賃
粹繰及糸延賃
糊附仕拵賃
晒上仕立賃
織物税
片麻布一疋販賣價格
製産費
益金
兩綿生地代
染上賃
木綿更紗綠代

金參錢
金參錢貳厘
金壹錢五厘
金七錢

收益比較

金貳圓貳拾七錢七厘

内

金貳圓七錢七厘

差引

金貳拾錢

四隅縫廻シ蒲繩代
釣鈎代
縫糸代
縫上賃
九寸幅綿六八蚊帳一張販賣價格
製産費
益金

(九) 販出額及仕向地

麻布及蚊帳ノ販路ハ主ニ縣外ニ販出シ縣内ニ於ケル需用額ハ僅少ナリ而シテ内地ノ仕向先ハ京阪、中國、九州、四國地方最多ク關東之ニ亞キ臺灣ヘモ多少ノ輸出アリ海外輸出ハ朝鮮及滿州地方ニシテ此等ハ殆ント總テ大阪商人ノ手ヲ經テ輸出シ居リ直接取引ヲ爲ス者稀ナリ今三十七、八兩年ノ海外輸出額ヲ舉クレハ左ノ如シ

年次	種類	數量	價額
三十一年	麻帳布	二九、二五〇疋 七、九八〇疋	五一、〇二五 一三、四六二

三十八年	麻	四五、五七〇
	帳	一二、五〇〇
	布	八二、〇二六
		二七、五〇〇

百四十四

(十) 販賣手續及取引慣習

麻布及蚊帳製造業者ハ或ハ自己ノ見込ニ依リ又ハ豫シメ仲買業者ノ注文ニ應シ製造シタルモノヲ仲買業者又ハ問屋
 へ引渡シ代金ノ授受ヲ爲ス

仲買業者又ハ蚊帳製造業者ハ例年九月、十月ノ間ニ於テ仕込商人ノ買入レニ來ルヲ俟テ取引スルアリ或ハ豫約販賣
 ヲ爲スモアリ而シテ代金ノ授受ハ或ハ現品送付後送金スルモノアリ或ハ注文ト同時ニ送金シ來ルモノアリ

(十一) 相場

明治三十八年ニ於ケル平均相場左ノ如シ

生平布一疋ニ付	金五圓五十錢
本布物	金二圓八十錢
綿麻交織物	金五圓五十錢
縞布一疋ニ付	金四圓參拾錢
本布物	金參圓九拾錢
二分五 <small>(眞學モノニ對シ紡績麻ニ 分五厘織込ミタルモノ)</small>	金壹圓參拾錢
七分五 <small>(紡績麻七分五厘ニ眞學モノ 二分五厘織込ミタルモノ)</small>	
片麻布一疋ニ付(但九寸巾物)	
總打物(四總打込品)	

續打物

蚊帳壹張ニ付(六八ニテ九寸巾物)

片麻物	金參圓參拾錢
丸綿物 <small>(二十番手 ノモノ)</small>	金壹圓九拾錢

(十二) 荷造法及其費用並ニ運賃諸費

内地向麻布、片麻布ハ五十疋ヲ一括シ一捆ト爲ス再製品ハ初メ紙文庫ニ包ミ疋數ヲ重ネ油紙又ハ澁紙ヲ以テ之ヲ覆
 ヒ其兩端又ハ天地トモ板ヲ挟ミ苧繩ヲ以テ其箇所ヲ結束スルモノニシテ之ヲ板ベト稱ス外面ハ普通ノ苳包ミニ纏ヒ再
 ヒ結束ス蚊帳ハ仕立蚊帳凡ソ貳拾張ヲ積重ネ白木綿ヲ卷キ苳包ト爲シ結束ス而シテ輸出向ニハ總テ前記ノ外杉皮ヲ外
 卷ト爲シ荷締シタル上出荷ス荷造費用左ノ如シ

内地向	金六拾壹錢
麻布、片麻布各一捆ニ付	金七拾五錢
蚊帳一捆ニ付	金參拾五錢
輸出向ハ何レモ拾錢ヲ増ス	金四拾錢
運賃ハ荷主ノ負担ニシテ奈良ヨリ大阪迄平均左ノ如シ	
麻布類ハ一捆ニ付	
蚊帳ハ全	

(十三) 販出先ニ於ケル競争品

遠方へ販出スル場合ハ百里ニ對シ凡ソ金拾貳錢内外ノ保險料ヲ支拂フ保險料ハ荷主ト買主ト折半シテ負擔ス

麻布ハ滋賀縣産最モ多ク世ニ行ハレ本縣ハ之レニアケリ然レトモ片麻布ハ其販出高他國産ヲ凌駕セリ
蚊帳ハ各地トモ多少ノ産出ヲ見ルモ當時本縣産ニ對シテ競争ノ地位ニ在ルモノハ山口縣岩國産ノ關戸蚊帳ナリ

(十四) 重ナル製造業者、仲買業者及取扱商店製造者及仲買業者

奈良市	高阪惣七
全	關商會
全	田畑孝七
全	杉山嘉平
全	中川政七
全	勝村直助
全	蚊帳製造
全	中尾樽治郎
全	杉本甚七
全	上田新八
全	益田甚七
全	廣岡徳平
全	増田徳治郎
全	中井伊一郎
添上郡 月瀬村	稻葉規矩松
生駒郡 郡山町	

取扱商店

大阪	麻布類	伊藤忠兵衛
全	全	小杉佐兵衛
全	全	山中合名會社大阪支店
全	全	長野清次郎
全	全	山中合名會社
全	全	合名會社中村商店
全	全	三越吳服店
滋賀縣	全	阿部市太郎
全	全	阿部商店
全	全	堤惣平
全	全	田附太郎兵衛
全	蚊帳類	中村合名會社
大阪	全	毛利菊次郎
全	全	西川甚五郎
全	全	沓水誠一郎
京都	全	田中平兵衛
全	全	高橋徳兵衛
全	全	西川甚五郎
奈良縣	全	西川甚五郎

(四) 鍋釜及鑄物

(一) 産 額

年 次	種 類	数	量	價	額
三 十 四 年	鍋 釜 鑄 物	三六八、九八〇	三六八、九八〇	四一、七九五	七二、九一六
三 十 五 年	鍋 釜 鑄 物	二二二、七五〇	二二二、七五〇	一、九二〇	四一、七九五
三 十 六 年	鍋 釜 鑄 物	一七、三〇〇	一七、三〇〇	七四、〇九五	一、九二〇
三 十 七 年	鍋 釜 鑄 物	三六九、五〇〇	三六九、五〇〇	四二、五六二	七四、〇九五
三 十 八 年	鍋 釜 鑄 物	二一三、〇〇〇	二一三、〇〇〇	一、八九四	四二、五六二
三 十 九 年	鍋 釜 鑄 物	一八、一〇〇	一八、一〇〇	七四、一九〇	一、八九四
三 十 年	鍋 釜 鑄 物	二一三、八二〇	二一三、八二〇	四二、七一七	七四、一九〇
三 十 一 年	鍋 釜 鑄 物	一八、二九〇	一八、二九〇	二、〇一三	四二、七一七
三 十 二 年	鍋 釜 鑄 物	三七〇、二〇〇	三七〇、二〇〇	七四、二二八	二、〇一三
三 十 三 年	鍋 釜 鑄 物	二一四、一〇〇	二一四、一〇〇	四二、七七六	七四、二二八
三 十 四 年	鍋 釜 鑄 物	二一、四〇〇	二一、四〇〇	二、四五八	四二、七七六
三 十 五 年	鍋 釜 鑄 物	三七〇、八〇〇	三七〇、八〇〇	七六、七四〇	二、四五八
三 十 六 年	鍋 釜 鑄 物	二一四、一〇〇	二一四、一〇〇	四四、二〇二	七六、七四〇
三 十 七 年	鍋 釜 鑄 物	二一四、一〇〇	二一四、一〇〇	三、〇二八	四四、二〇二
三 十 八 年	鍋 釜 鑄 物	二四、八〇〇	二四、八〇〇	三、〇二八	三、〇二八

備考 鍋ハ四升、釜ハ二升五合ヲ以テ一枚トス

(二) 主要産地

北葛城郡 南葛城郡 奈良市

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

(イ) 家内工業 製造戸數 四 戶

職工數 十五 人

(ロ) 工場工業 工場數 二 ヶ 所

職工數 九十二 人

馬力(蒸氣力) 三 馬 力

(四) 製産狀況

本品ノ如キハ經濟界ノ變動ニ左右セラル、コト尠キヲ以テ産額ハ各年ヲ通シテ著シキ増減ヲ見ス然レトモ一般ノ需
要ハ漸次増進ノ傾ヲ呈セリ

(五) 原料ノ需要供給

本品ノ原料地金及燃料「コークス」ハ皆大阪ヨリ供給セラル

(六) 製産費及收益ノ比較

鍋一枚ニ對スル製産費

金九 錢 五 厘

金貳 錢 八 厘

原料地金代

薪炭及コークス代

奈良縣

百四十九

金七 厘
金三 錢 五 厘

泥土其他雜品代
職 工 賃

收益比較

金貳 拾 錢

鍋壹枚平均賣價

內 金拾六錢五厘

製 產 費

差 引

金參 錢 五 厘

益 金

釜壹枚ニ對スル製産費

金八 錢 貳 厘

原料地金代

金貳 錢 八 厘

薪炭及コークス代

金七 厘

泥土其他雜品代

金四 錢 八 厘

職 工 賃

收益比較

金貳 拾 錢

釜壹枚平均賣價

內 金拾六錢五厘

製 產 費

差 引

金參 錢 五 厘

益 金

鑄物中備中鐵壹個ニ對スル製産費

金四 錢 五 厘

原料地金代

金八 厘

薪炭及コークス代

金五 厘

泥土其他雜品代

金貳 錢

職 工 賃

收益比較

金九 錢

備中鐵壹個平均賣價

內

金七 錢 八 厘

製 產 費

差 引

金一 錢 貳 厘

益 金

(七) 販出額及仕向地

製産品ハ主トシテ縣外ニ販出セラレ其仕向先ハ全國ニ及ヘリ就中最モ多ク仕向ケラル、ヲ近畿、四國、九州等トス
又外國向ノ輸出先ハ清韓ヲ主トス今明治三十七、八兩年中ニ於ケル鍋釜ノ海外輸出額ヲ舉クレハ左ノ如シ

三 十 七 年

二四〇、〇〇〇

五三、二〇〇

三 十 八 年

二三五、八〇〇

五〇、四〇〇

(八) 販賣手續及取引慣習

奈良縣

或ハ現金買アリ或ハ着荷後送金セラル、コトアリ又ハ年二季ノ支拂アリテ一定セス

(九) 相場

明治三十九年ニ於ケル平均相場左ノ如シ

鍋一枚(四弁入)壹個ニ付

金貳拾錢

釜一枚(二弁五合人)全

金貳拾錢

銚物中備中鐵一個ニ付

金九錢

(十) 荷造法其費用并ニ運賃諸費

鍋ハ十五枚釜ハ十六枚ヲ一個トシ之ヲ筵包ト爲シ細ヲ六方ニ掛ケテ販出ス其費用一個ニ付金拾壹錢ヲ要シ運賃ハ奈

良市ヨリ大阪迄一個十錢内外ナリ

(十一) 重ナル製造者及取扱商店

製造者

北葛城郡五位堂村

杉田芳太郎

全 南葛城郡御所町

津田五良平

奈良市油留木町

山本安吉

全 市鍋屋町

百濟兼次郎

全 市西木辻

山中たか

大森勇輔

取扱商店

大阪市西區堀江黒金橋

福井清次郎

全 市全 區阿波堀通四丁目

鍋釜合資會社

京都市上京區川東柳馬場三條上ル

堀尾平兵衛

高知市種崎町

廣末常三郎

(五) 凍豆腐

(一) 産額

年次	數量	價額
三十四年	七六、〇五〇箱	二六五、四八七
三十五年	七二、三七一	三〇〇、一九〇
三十六年	五七、九八九	二二六、九七三
三十七年	五二、四八八	二〇五、三〇八
三十八年	六九、六七六	二七三、二〇〇

(二) 主要産地

山邊郡 吉野郡

(三) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數 二百八戸
職工數 九百四十七人

奈良縣

(四) 製産狀況

本品ノ製産地ハ何レモ山間ノ僻地ニシテ殊ニ冬期ハ寒氣酷烈他ニ適當ノ事業ナキヲ以テ農家ノ副業トシテハ將來有望ノ事業タルヲ失ハズ之レガ製産ニ關シテハ原料豆腐ハ但馬又ハ紀伊ヨリ職工ヲ雇入レテ之ヲ製造セシメ其他ノ事ニハ土地ノ人ヲ使用セリ而シテ其製造期ハ冬期嚴寒ノ候即チ十二月末ヨリ翌二月上旬ヲ以テ限リトス

本品ノ製造業者ハ明治二十六年五月大和、河内、紀伊三國ヲ一地區トシテ同業組合ヲ組織セシカ山邊、添上二郡ノ同業者ハ三十五年三月更ニ同業組合準則ニ依リ小倉山凍豆腐業組合ヲ設立シ以テ製品ノ改良及販路ノ擴張ヲ圖リ兼テ原料買入ノ便ヲ開キ又吉野郡池津川ニ於テハ産業組合法ニ依リ三十八年十二月購買組合ヲ設立セリ

(五) 原料需要供給

原料中大豆ハ内地産及ヒ滿韓地方産ヲ用ヒ苦利、生石灰、種油等ハ内地産ヲ使用セリ買入方法ニ就テハ地方ニヨリ異ナレトモ山邊郡小倉地方ハ主ニ大阪、兵庫等ヨリ共同購入ノ途ヲ開キ吉野郡ハ縣下五條町ノ商人ヨリ之カ買入ヲ爲セリ

(六) 製産費及收益ノ比較

凍豆腐(拾箱)ノ製産費	原料大豆代
金 貳 拾 六 圓	苦 利 代
金 四 十 五 錢	石 灰 代
金 五 錢	薪 炭 代
金 貳 圓 五 拾 錢	職工賃及同食料代
金 四 圓 八 拾 錢	

金 壹 圓	雜 費
金 四 拾 貳 圓 五 拾 錢	凍豆腐拾箱賣價

金 參 拾 四 圓 八 拾 錢	製 産 費
差 引	益 金
金 七 圓 七 拾 錢	

(七) 販出額及仕向地

製産額中ノ大部分ハ縣外ニ販出セラレ其重ナル仕向地ハ近畿地方ニシテ中國之ニ亞ケリ又兩三年前ヨリ阪神及廣島商人ノ手ヲ經テ布哇、滿韓地方ニモ輸出スルニ至レリ今三十七、八兩年中ニ於ケル海外輸出額ヲ示セバ左ノ如シ

三 十 七 年	一〇、〇〇〇 <small>圓</small>	五五、〇〇〇 <small>圓</small>
三 十 八 年	八、〇〇〇	四四、〇〇〇

(八) 販賣手續及取引慣習

販賣ハ製造前ニハ別段注文ヲ受クルニ非ス大阪及伊勢地方乾物問屋ハ製品ノ出來時期ヲ俟チ出荷ヲ促シ來リ又仲買人ハ製造家ニ就キ現品ヲ現金取引ニテ買入レ諸方ニ販出セリ大阪、神戸、伊勢等ノ問屋ニ出荷スルモノハ大概委託販賣ニシテ出荷スレハ直ニ先方ヨリ直段ヲ通知シ來リ其通知ニ應スレバ銀行爲替ニテ送金シ來ル向モアレトモ多クハ時々出荷先ニ至リ代金ノ取立ヲ爲ス又中ニハ製造期間内ノ製産高ヲ全部前金ニテ賣買スルモノモアリ委託販賣ノ法ニ依ルトキハ手数料ハ賣揚高百圓ニ對スル百分ノ七(即チ百圓ニ付七圓)ヲ支拂フモノトス故ニ若シ出荷ニ對シ賣却濟ニ至

ラサルモ荷主ノ請求ニ依リ價格ノ七割乃至八割爲替トシテ前拂スルコトアリ而シテ此場合ニ於テモ別ニ日歩ヲ支拂フコトナシト云フ

(九) 相場

明治三十九年ニ於ケル平均相場ハ左ノ如シ

凍豆腐壹箱ニ付

金四圓三十錢

(十) 荷造方法及其費用并ニ運賃諸費

荷造ハ完全ナル縦又ハ松板ヲ以テ長二尺一寸横一尺深サ一尺ノ箱ヲ造リ之ニ千百切ヲ入レ各自ノ商標ヲ記入セル「レットル」ヲ貼用シ横三重繩ニ縦繩ヲ纏ヒテ取出ス一箱ノ費用拾八錢五厘ニシテ運賃ハ地方ニヨリ其額ヲ異ニスルモ山邊郡針ヶ別所村小倉ヨリ大阪迄一箱十二錢乃至十三錢ナリト云フ

(十一) 販出先ニ於ケル競争品

天然製凍豆腐ノ販路漸次擴張セルヲ見テ明治三十三年伯耆國ニ於テ冷蔵氷豆腐業ヲ開始セル者アリシモ好果ヲ得スシテ廢止セリ次テ三十五年神戸市ニ於テ冷蔵庫ヲ使用シ之カ製造ヲナンタル者アリシカ天然製品ニ比シ其風味劣レルヲ以テ是亦中絶セリ然ルニ目下大阪市ニ於テ資本金貳百萬圓ノ日本冷蔵株式會社ヲ設立シ三百人ノ職工ヲ使役シ一日三百箱(二箱千切入)ノ凍豆腐ヲ製造シ天然製品ト競争ヲ試ミツ、アリ是レ蓋本縣其他ノ天然製品ニ對スル一大勁敵ナリト云フヘシ

天然製ト冷蔵庫製トハ一見異ナラサルモ天然製ハ色白ク形狀稍ヤ大ニシテ風味モ彼ニ優レリ故ニ現時ノ相場ハ日本冷蔵會社ノ製品ニ比シ貳割五分強ノ高値ヲ保テリ

(十二) 重ナル製造者及仲買人

製造者

山邊郡都介野村大字白石	大西眞三郎
全郡針ヶ別所村大字小倉	大西庄市郎
全郡全村全大字	勝井官治郎
添上郡東山村大字的野	南辰藏
吉野郡野迫川村大字池津川	犬岡富三郎
全	吉井善太郎
仲買人	
山邊郡都介野村大字白石	城岡嘉四郎
生駒郡山町	田原安治郎

(六) 酒類

(一) 産額

年次	數量	價額
三十四年	四九、三一五 <small>石</small>	一、五二八、八三六 <small>圓</small>
三十五年	四一、六八二	一、三四六、二六二
三十六年	三八、〇八二	一、二六九、五九四
三十七年	三七、〇一四	一、二四七、五三〇

奈良縣

(二) 種類別

清酒

味淋

燒酎

(三) 主要産地

生駒郡 宇智郡

添上郡 北葛城郡

山邊郡 奈良市

(四) 製造戸數及織工數(三十九年)

製造戸數 職工數

百三十戸 千四百三十人

(五) 製造ノ狀況

明治二十七八年日清戰役後ヨリ三十二年迄ハ一般需要ノ増加ニ伴ヒ製造額モ増加シツ、アリシカ三十四年ヨリ三十六年マテハ經濟界不振ノ爲メ稍ヤ沈淪ノ狀況ヲ呈シ三十七年ニ至リテハ日露戰役ノ影響ニ由リ其需要大ニ減シ頗ル悲況ニ陥リ翌卅八年ニ至ルモ尙ホ其衰勢ヲ挽回スルコト能ハズ造石高次第ニ減少セリ然レトモ平和克復後ハ一般ニ需要増加シ殊ニ本縣産酒類ハ酒造ノ原料トシテ最モ適當ナル大和米ヲ用キ且其釀造法モ近時著シク進歩シ聲價大ニ揚リ灘地方ニ於テハ之ニ同地産ノ銘ヲ付シ他地方へ販出スルニ至リシヲ以テ全地へノ販出額増加スルニ隨ヒ漸次造石高ヲ増シツ、アリ

(六) 原料ノ需要供給

本品ノ原料ハ總テ縣下ノ産米ヲ用ユ

(七) 製造費及收益ノ比較

清酒(中等品)一石ノ製造費

金拾壹圓九拾錢

金六拾錢

金壹圓五錢

金拾七圓

收益比較

金參拾參圓

金參拾圓五拾五錢

差引

金貳圓四拾五錢

味淋(中等品)一石ノ製造費

金拾六圓貳拾錢

金六拾錢

金壹圓五錢

金拾七圓

收益比較

奈良縣

金 四 拾 圓

内

金 參拾四圓八拾五錢

差 引

金 五圓拾五錢

燒酎(中等品)一石ノ製産費

金 貳拾圓七拾錢

金 壹 圓

金 壹 圓 五 錢

金 拾 九 圓

收 益 比 較

金 四 拾 六 圓

内

金 四拾壹圓七拾五錢

差 引

金 四圓貳拾五錢

味 淋 (中等品) 一石平均相場

百六十

製 産 費

益 金

原 料 酒 糟 代

薪 炭 代

職 工 賃

平 均 造 石 税

燒 酎 (中等品) 一石平均相場

製 産 費

益 金

(八) 販出額及仕向地

本品ノ約六割ハ縣内ニ於テ消費セラレ縣外ニ販出スルモノハ四割強ナリトス而シテ其ノ仕向先ハ燒酎、味淋ハ大阪

府、清酒ハ同府及ビ兵庫縣ナリトス今明治三十七、八兩年間ニ於ケル販出額ヲ示セバ左ノ如シ

年	數 量	價 額
三 十 七 年	一五、一七五	五一、四八七
三 十 八 年	一三、九二五	四一、六四五

(九) 販賣手續及取引慣習

縣外販出ハ仕向地ノ御小賣商人ヘハ奈良市及北葛城郡高田町等ノ酒類仲買人ノ手ヲ經テ現金取引ニテ賣却ス地方賣ハ醬油ト同シク七月、十二月(舊曆)ノ兩度ニ計算スルヲ例トス

(十) 相 場

明治三十九年ニ於ケル中等品平均相場左ノ如シ

清 酒 一石ニ付	金 三 拾 三 圓
味 淋 全	金 四 拾 圓
燒 酎 全	金 四 拾 六 圓

(十一) 輸 出 ノ 状 况

本品ハ海外ヘノ輸出ナシ他府縣ヘノ販出狀況ニ就テハ前ニ生産ノ狀況ノ部ニ於テ陳ヘタルカ如ク酒類ノ品質佳良ニシテ灘産酒ニ髣髴タルニヨリ全地方ニ於テハ本縣産ヲ以テ灘酒ト稱シ更ニ他方ヘ販出スルカ故ニ全地方ヘノ販出額増加シ從テ造石高漸次多キヲ加ヘ好望ニ向ヒツヽアリ

(十二) 荷造法其費用并ニ運賃諸費

荷造ハ三斗六升乃至七升ヲ杉樽ニ入レ其儘販出ス此費用壹樽ニ付金一圓ヲ要ス又奈良市ヨリ大阪迄ノ運賃ハ一樽ニ

付約十八錢ナリ

(十三) 重ナル製造者仲買人及取扱商店

製造者

生駒郡北倭村大字上
 添上郡襟本町
 奈良市高畑町
 添上郡帯解村今市
 磯城郡織田村
 宇智郡五條町
 生駒郡平端村大字宮堂
 磯城郡大福村大字大福
 北葛城郡二上村大字穴虫
 宇智郡五條町
 吉野郡上市町

仲買人

中本與左衛門
 岡本政吉
 八木千之助
 松田榮太郎
 辻政太郎
 大和酒造株式會社
 乾槌太郎
 松田彌五郎
 吉田庄重郎
 山本七九郎
 北岡惣太郎
 米浪松太郎
 小川安右衛門
 市川清兵衛

北葛城郡高田町

宮高彦三郎
村島長藏

取扱商店

大阪市西區南堀江二番町
 全市西區四ツ橋
 兵庫縣武庫郡今津
 兵庫縣灘新在家
 大阪府堺市大町

井上又三郎
 鈴木忠右衛門
 龍頭商店
 石崎商店
 大澤徳兵衛

(十四) 同業組合

明治二十二年始メテ添上外四郡ニ酒造組合ヲ設立シ舊式ノ釀造法ヲ改善シ品質ノ改良ニ努メ後二十七年ニ至リ各組
 合同シ縣下ヲ通シテ一團ト爲リ其名稱ヲ奈良縣酒類製造業組合ト改稱シ三十三年ニ至リ更ニ分離シテ奈良、中和、
 磯城、宇智、吉野ノ五酒造組合トナレリ

爾來各組合ハ何レモ組合員ヲ督勵シテ斯業ノ改良發達ヲ圖リ漸次販路ノ擴張品質ノ良好ヲ見ルニ至レリ殊ニ昨三十
 九年四月各組合聯合シテ酒類品評會ヲ奈良市ニ開催シテヨリ大ニ當業者ヲ警醒シ益々斯業ノ發達ヲ促スニ至レリ

(七) 醬油

(一) 産額

奈良縣

年	數量	價額
三十四年	一三、四二七	一五八、四四九
三十五年	一四、七六二	一七七、一四四
三十六年	一五、一一四	一八一、三六八
三十七年	一四、二〇九	二〇一、七六四
三十八年	一四、一三一	二五四、五五三

(二) 主要産地 高 市 郡 北 葛 城 郡 吉 野 郡 奈 良 市

(三) 製造戸數及職工數(三十九年)

製造戸數	九十七戸
職工數	二百九十一人

(四) 製造ノ狀況

本縣ノ醬油ハ未タ縣外ニ廣キ販路ヲ有セス其縣外販出額ハ生産額ノ一割五分ニ過キス他ハ總テ縣内ノ需用ニ供セラ
ル、ノ有様ナリ且本品ハ所謂日用必需品ナルカ爲メ酒類ノ如ク世上ノ好況若クハ不景氣ニ伴ヒ其製産額ニ増減アルコ
トナク現狀ヲ維持シツ、アリ

(五) 原料ノ需要供給

本品ノ原料タル小麦及大豆ハ主トシテ縣下ノ産品ヲ使用シ來リシカ近來大豆ハ品不足ノ爲メ韓國産ヲ用ユル者アル
ニ至レリ鹽ハ主トシテ赤穂鹽及ヒ海元鹽ヲ用ユ

(六) 製産費及收益ノ比較

項目	金額	項目	金額
醬油(中等品)一石ノ製産費	金五圓貳拾錢	原料大豆代	全 小 麥 代
	金四圓八拾錢	鹽 代	薪 炭 代
	金七 拾 錢	職 工 賃	器具損料其他諸費
	金壹 圓		
	金四 拾 錢		
收益比較		醬油(中等品)一石平均相場	金拾 六 圓
内		製 産 費	金拾四圓五拾錢
		差 引	金壹圓五拾錢
		益 金	

(七) 販出額及仕向地

製産品ハ主ニ縣内ニ於テ消費セラレ其縣外ニ販出セラル、モノハ僅ニ産額ノ一割五分ニ過キス而シテ其仕向先ハ大
阪府及ビ和歌山縣ナリ

(八) 販賣手續及取引慣習

奈良縣

縣内ニ於テハ製造者ヨリ直接ニ小賣業者若ハ消費者ニ賣却セリ賣却代金ハ多ク七月十二月(舊曆)ノ兩度ニ計算ス
縣外トノ取引ハ着荷後代金ヲ廻送シ來ルヲ例トス

(九) 相場

明治三十九年ニ於ケル平均相場左ノ如シ醬油一石ニ付
上貳拾三圓 中十六圓 下十圓

(十) 荷造方法其費用并ニ運賃諸費

荷造方ハ三斗五升ヲ杉樽入トシ繩ヲ三方ニ掛ケテ販出ス其費用一樽ニ付金七十三錢ヲ要シ高田町ヨリ大阪迄ノ運賃
ハ平均一樽十一錢五厘ナリ

(十一) 重ナル製造者及ヒ縣外取扱商店

製造者

高市郡金橋村大字曲川	堀熊次郎
磯城郡香久山村大字吉備	吉田喜平
奈良市三條	杉田新七
高市郡越智岡村	谷村市三
吉野郡吉野村大字飯貝	尾上六三郎
北葛城郡磐園村大字有井	名倉猶吉
取扱商店	吉川商店
大阪府北區八間家	

大阪府中河内郡檜下村
和歌山縣伊都郡橋本町

森田商店
山本廣吉

(八) 素麵

(一) 産額

種類別	數量	價額
三十四年	八、七五〇 <small>kg</small>	一四二、一〇〇 <small>円</small>
三十五年	九、六七〇	一六九、二二五
三十六年	七、三二一	一二〇、三〇三
三十七年	八、一六九	一三二、九九五
三十八年	六、一〇八	一二二、一六〇

(二) 種類別
手製素麵
器械製素麵

(三) 主要産地
磯城郡三輪町

(四) 事業ノ沿革

本業ハ光仁天皇ノ御宇寶龜年間ノ創業ニ係ルモノニシテ口碑ノ傳フル所ニ依レハ同地官幣大社大神々社(俗ニ三輪明神)ノ神授ニ由リ之カ製造ヲ開始シタルモノナリト云フ斯ル由緒アル爲メカ素麵業者ハ同神社ヲ崇敬スルコト殊ニ

厚ク獨リ本縣ノミナラズ兵庫縣ノ素麵製造地ニ在リテモ大神々社ノ分祠ヲ建立シ祭祀ヲ怠ラスト云フ兎ニ角三輪素麵ハ其起源最モ古ク我國素麵業ノ鼻祖ニシテ其後製造法各地ニ傳ハリ現時ノ如ク盛大トナリシモノナラント云フ

(五) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數 二百六十一戸
職工數 千三百五人

(六) 生産ノ狀況

本業ハ農家ノ副業ニシテ其製造期ハ毎年十一月ニ機始ヲ爲シ翌年三四月ヲ以テ機止ヲ爲スヲ例トセシカ近來素麵製造器機ノ發明アリ此機械ニヨルトキハ四季ノ別ナク製造シ得ヘキモ機械製ハ手製ニ比シ風味劣レルカ故ニ今尙廣ク需要ヲ喚起スルニ至ラズ其價格モ手製素麵ヨリ常ニ下位ニ在リ而シテ本縣素麵業ノ狀態ハ全ク冬期農閑ノ時節ヲ利用セル一種ノ副業ニ過キスシテ專業トシテ之ヲ經營スル者ナキカ故ニ其業著シキ發達ヲ見ルニ至ラズ却ツテ兵庫、岡山、香川地方ノ製品ノ爲メニ漸次其販路ヲ蚕食セラレツ、アルノ有様ナリト云フ

(七) 原料ノ需要供給

原料小麥ハ主トシテ本縣産及他ノ内地産ヲ使用セルモ三十七年、三十八年ノ如キハ麥作不稔品質粗惡ニシテ素麵ノ製造用ニ適セザリシ爲メ米利堅粉ヲ輸入シテ原料ニ供シタリ

(八) 製産費及收益ノ比較

素麵中等品一駄(三十六貫目)ニ對スル生産費
原料小麥代 金拾貳圓拾錢
製粉費 金壹圓貳拾七錢

製造賃金 金參圓六拾錢
油代 金五拾八錢
鹽代 金四拾錢
把立賃 金三拾五錢
計金拾八圓三拾錢

收益比較

素麵一駄(中等品)販賣價格
金拾九圓拾錢
製産費 金拾八圓參拾錢
差引 金八拾錢
益金

(九) 販出額及仕向地

仕向地及販出額左ノ如シ
仕向地 和泉 山城 近江 伊賀
伊勢 紀伊
販出額 數 量 價 額
三 十 六 年 五、二五 九二、二四四

三十七年
三十八年

五、九六四
七、二七五

一〇七、三五二
八五、五二二

百七十

(十) 販賣手續及取引慣習

仕向先ヨリ商人來縣シ直接製造家ニ就キ買入ヲ爲シ悉ク現金取引ナリ

(十一) 相場 (三十九年)

三	輪白髮	一駄ニ付	金貳拾貳圓
三	輪錦	全	金拾九圓拾錢
三	手製輪糸	全	金拾八圓貳拾錢
三	輪里	全	金拾七圓拾錢
三	諸松	全	金拾八圓五拾錢
三	諸竹	全	金拾七圓七拾錢
三	諸梅	全	金拾六圓拾錢

(十二) 荷造法及其費用並運賃

竹ニテ長二尺五寸巾二尺厚一尺ノ行李形ノ籠ヲ製シ藁ヲ以テ下敷トシ其ノ中へ素麵正味六貫目ヲ入レ土ニ藁ヲ置キ蓋ヲ爲シ縱横ニ繩締ヲ爲ス其費用容器及荷造費合セテ一個ニ付金拾三錢ナリ又器械製ハ樞板ノ箱ヲ用ヒ正味五貫五百目入トシ釘ヲナシ繩掛ヲナス此費用金拾五錢ヲ要ス而シテ奈良市ヨリ大阪迄ノ運賃ハ一籠ニ付金貳錢五厘一箱ニ付金貳錢ナリ

(十三) 長所、欠點并ニ改良スヘキ要點

三輪素麵ハ一筋毎ニ一ノ孔線アリ又煮沸ノトキ他素麵ノ殆ント沈澱スルニ反シテ盡ク浮揚スルハ三輪素麵ノ特色ナリ然レトモ製造業者ハ總テ古來ノ習慣ヲ守リ一把ノ目方ヲ八匁トシ荷造ハ主トシテ六貫目入ノ籠詰ト爲スヲ以テ運搬上製品ノ毀損甚シク爲メニ他府縣ヘノ輸出ハ多少不向ノ傾キアルハ一ノ欠點トス故ニ之ヲ改良スルニアラサレハ販路ハ漸次縮小スルニ至ルヘキヲ以テ同業組合ニ於テハ定款ヲ變更シテ他府縣ノ例ニ倣ヒ一把ノ目方ヲ十五匁トシ荷造ハ五貫目入、四貫八百目入貳貫五百目入リノ長方形箱詰トナシテ以テ販路ノ擴張ヲ計ルノ計畫アリト云フ

(十四) 重ナル製造業者及取扱商店

製造業者ハ悉ク農家ノ副業タルカ故ニ一ヶ年ヲ通シテ本業ヲ營ム者ナシ	
縣内ニテ取扱ヲ爲ス重ナル者左ノ如シ	
磯城郡三輪町	池田幸三郎
奈良市	竹村周八

(九) 漆器

(一) 産額

三十四年
三十五年
三十六年
三十七年
三十八年

八二、二〇四

一〇三、四一五

一一七、四〇〇

一〇二、九六五

一二七、二〇〇

奈良縣

百七十一

- (二) 種類別
室内裝飾具 日用品
- (三) 主要産地
奈良市 吉野郡下市町
- (四) 事業ノ沿革

奈良漆器ノ起源ハ天武天皇ノ御宇赤漆ヲ用ヒテ器物ヲ裝成セシニ始マル爾來髹漆ノ術大ニ進歩シ聖武天皇ノ御宇ニ至リテハ漆器ニ螺鈿ヲ嵌シ或ハ抹金鏤及密陀僧ヲ以テ描ク等其技術ノ精巧ヲ極メタリ當時朱塗ヲ稱シテ奈良塗又ハ東大寺塗ト云ヘリ後チ正應年間紀伊國那賀郡根來寺ニ於テ朱塗及黒塗ノ器物ヲ製出シ盛ニ各地ニ販出セシヨリ奈良漆器ノ製造日ニ衰ヘ維新ノ當時ノ如キ殆ンド中絶ノ姿ヲ呈シ居リシガ明治七八年ノ頃三谷喜太郎之ガ廢絶ヲ歎キ自ラ其製造ニ從事シ奈良漆器再興ノ端ヲ開キ爾來當業者漸次増加シ明治二十四五年頃ハ斯業全盛時代ナリシガ不幸ニシテ粗製濫造ノ弊ヲ生シ争フテ粗造品ヲ供給シタル爲メ一時需用大ニ減スルニ至レリ是ニ於テ明治三十年同業組合ヲ組織シ製品ノ改良ヲ圖リ信用回復ニ努メ居レリ

吉野漆器ハ其ノ起源詳カナラス昔時吉野山櫻本坊竹林院其他ノ坊舎ニテ折敷、丸盆等ニ春慶塗ヲ施シ大峯山參詣人等ニ賣與シ來リシモノヲ寛政享和ノ頃下市町小倉喜兵衛ナル者其技術ノ傳習ヲ受ケ漆器業ヲ開始スルニ至レリ之ヲ吉野郡下市町ニ於ケル吉野漆器業ノ權輿トナス其後安政年間ニ至リ斯業大ニ發達シ販路各地ニ開ケ産額亦頗ル多額ニ上レリ明治維新ノ際兵亂ノ爲メ一頓挫ヲ來セシカ概シテ無事ニ經過シ今日ニ及ヘリ然レトモ當業者多クハ資本ニ乏シク進取ノ觀念薄キヲ以テ今日ノ現狀ハ昔時ノ盛大ニ比スヘクモアラサルナリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十九年)

製造戸數	四十九戸
職工數	二百四十人

(六) 生産ノ狀況

製産ノ組織ハ悉ク家内工業ナレトモ吉野漆器ト奈良漆器ハ其生産ノ状態ヲ異ニセリ吉野ニテハ製造家自身ニ職工ヲ雇傭シ之カ製作ヲ爲シ地方ノ問屋又ハ小賣業者へ販出スレトモ奈良漆器ハ問屋ト職人ノ別アリ其問屋ト稱スルハ職工又ハ工場ヲ有セスシテ得意先ノ注文ニ依ルモノ又ハ自己ノ販賣ニ要スル器物ヲ職人ニ委託シテ製作セシメ之レヲ各仕向地へ仕送り又ハ自己ノ店頭ニテ小賣ス職人ト稱スル其主人ハ自宅ニ工場ヲ置キ職工徒弟ヲ集メ前記問屋ノ注文ニ由ル器物ノ製作ニ従事スルノ慣習トナリ居レリ

現今ノ漆器業者ハ概シテ資本乏シキ者多キカ故ニ事業ノ擴張ヲ行ヒ進ンデ販路ヲ开拓セントスル者ナク唯店頭ニテ顧客ヲ待テツ、アル姿ナルヲ以テ其業大ニ振ハス殊ニ吉野漆器ハ從來價格ノ低廉ナルモノヲ主トシ所謂田舎向キノ日用品ノミヲ製作シ來リ其製品粗野ニ失セルヲ以テ今日ノ時勢ニ伴ハサルノ憾アリ最モ改良ヲ急務トスヘシ

(七) 原料ノ需要供給

原料標地ハ吉野産楡及ヒ古代ノ杉楡ヲ使用セルヲ以テ其供給豊富ナリ塗料ハ吉野漆及下等品ニ要スル塗料ハ大阪ヨリ輸入セリ共ニ其供給ニ不便ヲ感スルコトナシト云フ

(八) 製産費及收益ノ比較

生産費ハ日用ノ食器ヨリ裝飾器具、美術工藝品等種々ノ區別アリ其代價ニアリテモ最低二三錢ヨリ最高貳、叁百圓ノ器物ヲ製作シ居レルヲ以テ一概ニ之ヲ算出シ難ク收益亦一定セス今食膳十人前ニ對スル見積ヲ舉クレハ左ノ如シ

奈良塗 (十人前) 生産費

金貳圓五拾錢	原料棹地代
金四圓八拾錢	塗料及麻布代
金五圓	塗上仕上費
計金拾貳圓參拾錢	

收益比較

金拾五圓五拾錢

内

金拾貳圓參拾錢

差引

金參圓貳拾錢

吉野塗(膳十人前ニ對スル)生産費

金七拾錢

金八拾錢

金貳拾五錢

計金壹圓七拾五錢

收益比較

金貳圓參拾錢

内

食膳十人前販賣價格

食膳十人前販賣價格

製産費

益金

原料棹地代

塗料代

塗上仕上費

金壹圓七拾五錢

差引

金五拾五錢

製産費

益金

(九) 販出額及仕向地

奈良漆器ハ産額ノ約三分ハ遊覽旅客及縣内ニテ販賣セラレ其六分ヲ他府縣ニ販出ス其仕向先ハ京都大阪ヲ主トシ吉野漆器ハ産額ノ九分ヲ他府縣ニ販出ス其仕向先ハ大阪ヲ中心トシテ中國九州ノ各地ニ輸出スト云フ

(十) 販賣手續及取引習慣

仕向先ノ注文ニ由ルモノハ着荷毎ニ爲替ニテ代金ノ送付ヲ受ク又仕向先商人直接製造家又ハ問屋ニ就キ仕入ル、モノハ多ク現金取引ニ由レリ其他異ナリタル習慣ナシ

(十一) 相場

形狀種類多樣ニシテ精粗一ナラサルヲ以テ一定ノ相場ヲ示シ難シ

(十二) 輸出ノ狀況

日露戰爭中ハ世上一般ニ不景氣ニシテ殊ニ漆器ノ如キハ一種ノ奢侈品ニ屬セシ爲メ販出ノ道塞カリ一時休業同様ノ姿ナリシカ戦後景氣恢復シ殊ニ三十九年四五頃ノ如キ近來稀レナル販出ヲ見ルニ至リ其後引續キ好況ヲ持續セリ

(十三) 荷造法、費用及運賃

荷造法ハ杉又ハ桐ノ小箱ニ入レ(下等品)別ニ杉又ハ樅ノ六分板ニテ外箱ヲ造リ其中へ綿若ハ藁ヲ小箱ノ間ニ填充シ釘打トシ外繩ヲ掛クルヲ普通トスト雖他ノ貨物ノ如ク荷造法一定セス其費用モ區々タリ運賃ノ如キモ亦同シ

(十四) 長所欠點并ニ改良スヘキ要點

奈良縣

奈良漆器ハ製作方法ニ付テハ別ニ著シキ欠點ナシト雖モ唯餘リニ高價ナル美術工藝品ヲ製作スル者多ク爲ニ其賣行
 キ抄々シカラス將來ハ少シク普通品殊ニ堅牢ナル日用品ノ製作ヲ爲サハ販路今一段ノ擴張ヲ見ルニ至ルヘシ
 吉野漆器ハ從來價格ノ低廉ヲ主トシテ粗雜ナル器物ノミヲ供給シ來リタルカ爲メ其聲價揚カラス故ニ將來ハ製作方
 法ニ改良ヲ加ヘ堅牢ニシ且精巧ナル製品ヲ出スコトヲ勉ムヘシ

(十五) 重ナル製造者及取扱商店

製造者

- 奈良市 石田元治郎
 - 全 守田米治郎
 - 全 大西勇齊
 - 吉野郡下市町 吉田庄藏
 - 全 上田猪三郎
 - 全 加藤伊藏
- 取扱商店
- 京都市上京區 三上治三郎
 - 大阪市東區安土町 通稱薩平

(十六) 縣ノ施設

吉野漆器業ニ對シテハ原料ヲ廉價ナラシムル手段トシテ明治三十一年ヨリ三十三年迄毎年縣費ヨリ金貳百圓ヲ下付
 シ板挽器械ヲ設備シ動力ニヨリ原料槍材ヲ製材セシメ續テ明治三十六年二月講師ヲ聘シテ當業者ヲ集メ短期漆器講習

會ヲ開設セリ

奈良漆器ニ對シテハ明治三十一年縣費ヨリ補助金ヲ下付シテ轆轤器械ヲ設備セシメ技術員ヲ雇備シ之カ傳習ヲ爲シ
 續テ三十七年農商務省工業試驗所ヨリ技術員ノ出張ヲ請ヒ三週間一般當業者ヲ集メテ漆器工業ノ講習會ヲ開催セリ

(十) 筆 及 墨

(一) 産 額

年次	種類	數量	量價	額
三十一年	筆	三,五三九,〇〇〇	本	四六,一一八
三十四年	墨	五,八四八,七五〇	張	一四一,三六四
三十五年	全	三,五三〇,六〇〇		四六,二五三
三十六年	全	五,九〇六,九六〇		九〇,七四五
三十七年	全	三,六〇八,八〇〇		四七,五七五
三十八年	全	五,七五八,九〇〇		一四三,七四八
	全	一,六九一,七〇〇		四三,八五二
	全	六,三六三,九〇〇		一四六,二〇八
	全	?		四六,一一八
	全	?		一四一,三六四

備考 墨一挺トハ目方四匁ヲ云フ

(二) 主要産地

奈良市

奈良縣

(三) 製造戸數及職工數(三十九年)

筆	製造戸數	三十戸
墨	職工數	三百人
製造戸數		三十三戸
職工數		百四十二人

(四) 製産狀況

本業ハ何レモ小規模ノ家内工業ニ屬シ製産狀況トシテ別ニ記スヘキモノナシ製墨業ハ例年十一月ニ始マリ翌年四月ニ終ル故ニ一年中六ヶ月ハ殆ント休業ノ有様ナリ産額ハ毎年著シキ増減ナク商狀亦例年サシタル變動ヲ見ス

(五) 原料ノ需要供給

筆ノ原料タル毛ハ清韓地方ヨリ供給ヲ受ケ軸ハ縣内産ヲ用ユ
墨ノ原料タル油烟及ヒ松烟ハ縣下及紀州産、膠ハ本縣及阿内産、阿膠並ニ香料ハ大阪商人ノ手ヲ經テ支那産ヲ輸入シ
紅ハ主ニ京都産ヲ使用セリ

(六) 製産費及收益比較

筆(普通ノモノ)百對ノ製産費	原料毛代	金八拾錢
	軸代	金貳拾錢

金八拾三錢	職工手間賃
金七錢	膠其他雜費
收益比較	筆百對(並)ノ賣價
金貳圓	製産費
内	益金

金壹圓九拾錢	原料油烟代
差引	膠代
金拾錢	阿膠代
墨(上等)百挺ノ製産費	紅、香料其他諸雜品代
金拾五圓	職工手間代
金壹圓	
金壹圓	
金貳拾錢	
金壹圓八十錢	
收益比較	
金貳拾七圓五拾錢	墨(上等)百挺ノ賣價
内	

金拾九圓

製産費

差引

金八圓五拾錢

益金

同(並等)百挺ノ製産費

金八拾錢

原料松烟代

金參拾六錢

膠代

金壹圓貳拾四錢

職工手間代

收益比較

金三圓

墨(並)百挺ノ賣價

内

金貳圓四拾錢

製産費

差引

金六拾錢

益金

(七) 販出額及仕向地

縣内ニ於テ消費セラル、モノハ其額極メテ少數ニシテ大部分ハ縣外ニ販出セラル其主ナル仕向地ハ東京、大阪、京都及名古屋等ナリ

(八) 販賣手續及取引慣習

筆ハ主ニ行商人ニ現金若クハ賣上後ノ計算ヲ以テ賣渡シ同種ノ商店ト直接取引スルコト少シ
墨ハ主ニ墨商店へ賣却ス代金ハ現金若クハ掛賣ナリ

(九) 相場

筆、墨共其種類數十百種ノ多キヲ以テ相場ハ一定セズ

(十) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

筆ハ目方十五六貫目ヲ杉入箱ト爲シテ販出ス其費用一箱ニ付二十錢内外運賃ハ奈良市ヨリ大阪迄二十五錢ナリ
墨ハ凡ソ二千挺ヲ石油空箱ニ容レテ荷造ス此費用十五錢ヲ要シ奈良ヨリ運賃ハ大阪迄十七八錢ナリ

(十一) 重ナル製造者及取扱商店

筆製造者

奈良市餅飯殿町

水谷嘉六

全

奈良市角振新屋町

三橋音治郎

全 市中筋町

福岡萬治郎

全 市東向北町

廣尾長兵衛

全 市昆沙門町

足代幸太郎

全取扱商店

東京市日本橋區横山町二丁目

大木清七

全市全 區本石町二丁目

岩瀬彌一

墨製造者

奈良市椿井町

松井元淳

奈良市西御門町
 全市今辻子町
 全市三條
 全取扱商店
 東京市日本橋區大傳馬町二丁目
 全市全區橋町四丁目
 大阪市西區南堀江二丁目
 全市全區新町通五丁目

宮武佐十郎
 大森徳兵衛
 大森兵助
 牧野彦八
 山田與兵衛
 春田伊助
 入江新兵衛

(一) 賣藥

(二) 産額	數量	價額
三十四年	六、〇三三、二八四	一〇八、一一三
三十五年	七、一三〇、七八〇	一一八、七五七
三十六年	七、七七〇、七二六	一二七、六五七
三十七年	八、一〇六、一九三	一三九、〇〇六
三十八年	九、四四六、六八二	一五六、九二一
(三) 主要産地		

高市郡宇智郡

(三) 製造戸數及職工數(三十九年)

製造戸數 百七十一戸
 職工數 五百十三人

(四) 製産狀況

本品ハ主トシテ行商人ニ賣渡ス目的ヲ以テ製産シ行商人ハ各製造元ニ就キ自己所要ノ藥品及數量ヲ買受ケ各地ニ行商ス而シテ其製産額ハ各年ヲ通シテ著シキ増減ナシ

(五) 原料ノ需要供給

本品ニ要スル原料ハ總テ大阪ヨリ供給ヲ仰ケリ

(六) 製産費及收益比較

普通賣藥拾貼ノ製産費

金壹錢四厘	原料藥品代
金八厘	包裹及印刷代
金貳錢	印紙稅
金拾五錢	行商人歩引
金貳拾錢	普通賣藥十貼ノ賣價
金貳拾錢	收益ノ比較